先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2020
Volume 3

8月

VIEW21

今号の表紙の
絵の制作者
●
東京都
私立かえつ有明中・高校
伊藤詩奈（しいな）さん
表紙裏に伊藤さんへの
インタビュー記事を掲載

特集

教育の「これから」を考える

――「今」を見つめた未来の創り手たち――

新課程に向けて描く「学校教育デザイン」
長崎県立佐世保西高校

人気記事をPlayback／追跡！ 授業のその後
実践 アクティブ・ラーニング
現代文 栃木県立宇都宮女子高校 黒川治彦

指導変革の軌跡
愛知県・名古屋市立工芸高校

新連載 これからの進路指導のための
世の中トレンド解説

ベネッセ教育総合研究所
https://berd.benesse.jp

表紙制作者

東京都・
私立かえつ有明中・高校
3年生
伊藤詩奈（しいな）さん

聞き手

VIEW21 編集部
統括責任者
柏木 崇

1998 年 4 月号から生徒と教師の写真で飾られてきた本誌表紙。2020 年 6 月号からは、臨時休業という想定外の状況下で、学校での学びの価値を捉え直した生徒のアート作品の力を借りて、引き続き、生徒と教師の関係を描きます。

臨時休業中、ふと学校のウェブサイトを見ていた時に、この写真が目に留まったという。伊藤さんが学校という場に求めていたものが、この写真に凝縮されていたのだろう。

友人と協力して臨時休業中に様々な人にオンラインインタビューを行い、その様子を動画投稿サイトで公開した。

高校で学んだ「対話」が私を変え、新しい世界を創った！

柏木　今号の表紙の絵として、生徒と先生が話をしている様子を描いてくださいましたが、このシーンを描こうと思った理由から教えてください。

伊藤　モチーフは、昨年度の学校案内の中の写真です。生徒が熱心に話すのを先生がじっと聞いている情景は、学びの中で「対話」を大切にしている私の学校を象徴していて、その写真がとても気に入りました。場所の設定は、落ち着いて話ができる屋上庭園に変えて、マスクもせずに対話していた頃を懐かしく思いながら描きました。

柏木　対話は、伊藤さんにとって自身の高校生活を語る上で欠かせないものなんですね。

伊藤　学校には、対話の大切さや手法を学ぶ授業があるのですが、実は最初のうちは、対話について学ぶ必要性を私はあまり感じていませんでした。でも、プロジェクト型の探究学習などを通じて、対話によって多くの気づきが自分の中に生まれることを実感し、想像力と創造力を発揮するためには、自分をメタ認知する他者との対話が必要だと分かったのです。高校２年生の時には、自分を変えてくれた対話を、多くの人に体験してもらえる仕組みをつくりたいと考えて制作した、「子どもの想像・創造力を育てる絵本」が次世代クリエイター向けのビジネスコンテストのグランプリに選ばれました。

柏木　すごい！　充実した高校生活ですね。

伊藤　ただ、コンテストに出たことで満足してしまって、臨時休業中の初めの頃は自宅でぼんやり過ごしていたんです。でも、「こんなことでは駄目だ」と気がついて……。それからは、起業家やクリエイターなど、自分たちが会いたい人にオンラインインタビューをして、それを中学生・高校生向けに発信する活動を友人と始めました。

柏木　臨時休業という困難な状況下で、伊藤さんを新たなチャレンジへと突き動かしたのも、他者との対話への欲求だったのですね。

伊藤　学校に行けなくなって分かったことは、学校は「協働」する場だということです。知識を身につけるという点で言えば、オンラインで十分です。でも、学校に行けば他者との協働が生まれますから、自分１人で完結しかけたものがさらに広がったり、深まったりしますし、他者の反応やその場の空気感を感じ取ることで、思考が思わぬ方向に展開していくこともあります。対話の力で社会をよりよく変えていくために、対話を通した創造についての研究蓄積がある大学に進学し、高校時代の学びを発展させたいです。

柏木　伊藤さんと話す中で、これからの学校を考える上では、「対話」が欠かせないキーワードになると改めて感じました。素敵な対話の時間をありがとうございました。

VIEW21 〈ビュー21〉高校版 2020 Volume 3 8月

CONTENTS

2 特別企画
「大学入学共通テスト」実施初年度入試に向けた指導の状況と今後の見通し

6 特集
教育の「これから」を考える
――「今」を見つめた未来の創り手たち――

8 臨時休業を経た高校生が語る、私の学びの「これまで」と「これから」
他者とのつながりの中で、自分のあり方や秘めた力に気づいた
神奈川県・私立自修館中等教育学校 菅野風歌さん／川久保実莉さん
予測困難な未来を生きるからこそ、語り合いながら「今」を大切に生きる
福岡県立育徳館中学校・高校 中村唯乃さん

12 想定外の事態を経て社会人が考えた、「これから」の社会で求められる資質・能力
学校、そして社会に育てられた私たちが考える、「これからの社会を創る人たち」に必要な力
依田浩崇さん／太田絵梨子さん
進路に悩んだ私を支えてくれた恩師の姿から、想定外をともに乗り越える人とのつながりを考えた
吉田梅乃さん

16 社会の変化を見据えた変革先進県の取り組みに見る、「これから」の学校像
トップインタビュー
学校と授業のあり方をタイムマシーンに乗って考えてみる
広島県教育委員会 教育長 平川理恵
これからの学校教育実践事例
育成した資質・能力を生徒自身が汎用し、地域・世界とつながる教育活動を実践
広島県立広島叡智学園中学校・高校
様々なオンラインツールを活用し、日常を維持しながら、新しい教育を創る
広島県立広島国泰寺高校

22 想定外の事態における経験や気づきを、教育の「これから」につなげる
「ミニマムの資質・能力」を追究しながら、教育活動の見直しに取り組む
北海道旭川東高校 松井恵一 × 福井県・私立福井南高校 浅井佑記範

26 臨時休業の経験を通じて見つめ直した、自校の教育活動の「これから」
臨時休業中の生徒の成長を、グランドデザインの見直しにつなげる 長野県蘇南高校

30 本誌特集の「これから」／〈イベントのご案内〉教育の「これから」を考えるオンライン・ワークショップ

32 生徒の・教師の・自校の・社会のNEXTを語り合うワークシート

34 新課程に向けて描く「学校教育デザイン」
長崎県立佐世保西高校
育成を目指す資質・能力の設定と「対話」を軸に、授業改善の方向性を見いだす

38 実践 アクティブ・ラーニング
現代文 栃木県立宇都宮女子高校 黒川治彦
38 人気記事を Playback 2016年10月号掲載
過去の学習内容と行き来する活発な議論の中で、深い読解を実現する
42 追跡！ 授業のその後
学校や生徒の状況に合わせて柔軟に授業の手法を見直し、対話を通じて創造性を育む

44 指導変革の軌跡
愛知県・名古屋市立工芸高校
「高校生のための学びの基礎診断」
学科・学年混合で行う振り返り会で、生徒に学びの意義を浸透させる

48 改良！ 指導ツール ビフォーアフター
2年生 課題設定ワークシート
改良会議実施校 福岡県・私立福岡女学院中学校・高校

52 これからの進路指導のための 世の中トレンド解説 新連載
スマートシティ
解説者 柏の葉アーバンデザインセンター ディレクター 永野 収

56 SDGsの視点で見る大学の学び
56 解説 目標5・14
58 大学の学び 目標5 ジェンダー平等を実現しよう
仁愛大学 人間学部 コミュニケーション学科 織田ゼミ
地域社会で問題解決の経験を積んだ後、身近にあるジェンダー問題の解決に挑む
60 大学の学び 目標14 海の豊かさを守ろう
東京理科大学 理工学部 土木工学科 水理研究室
河川から海洋へのプラスチックごみの流出量の測定手法を開発し、豊かな海を取り戻す

62 NEXTリーダーがオンライン&オフラインで集まり、語り合う 若手教師・教育創造MTG
第2回オンラインミーティング・リポート
日々の気づきや悩みを共有し、自校の課題に向き合う活力を得る

64 ―疑問や課題を解決！実践につながる！― 新課程レポート
テーマ 新課程入試につながる進路指導とは
実践事例 秋田県立秋田南高校
「大学の学びへの接続」を目指した探究活動と進路指導

72 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち
「自分が受けたい授業を生徒にもしてあげなさい」
広島県・私立ノートルダム清心中・高校 山下佳子

今号の刊行にあたって

「今」と向き合うことが、「これから」を創る

◎依然、先の見通せない状況が続いていますが、先生方や生徒に話を聞くと、臨時休業を始めとする今回の事態を受けた様々な経験から、多くの気づきや学びを得たといった声が少なくありません。そこに教育の「これから」を考えるヒントがあるのではないか――今号の特集では、コロナ禍の「今」に向き合いながら、学びや学校、社会や自身の「これから」について考えた方々を取材しました。共通していたのは、未来は作られるものではなく、自分たちの手で創るという考え方。生徒も教師も一人ひとりが「未来の創り手」であるという意識を持ち続ければ、先が見通せなくても、この難局を乗り越えていけるのではないでしょうか。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

https://berd.benesse.jp
本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます。

印刷製本／（株）協同プレス 編集協力／（有）ペンダコ 執筆協力／佐藤 智、中丸 満、二宮良太 撮影協力／荒川 潤、川上一生、田中秀和、福山 哲

＊本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

＊本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2020

「大学入学共通テスト」実施初年度入試に向けた指導の状況と今後の見通し

「大学入学共通テスト」の実施を始めとする様々な制度変更がある2021年度大学入試は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響でさらなる変更が生じている。20年8月1日時点の変更点をまとめるとともに、生徒の志望動向や学習状況のデータ、6校の進路指導担当者へのヒアリングから、現場の指導状況を捉え、今後の見通しについて考える。

2021年度大学入試の変更点

学業の遅れへの配慮から共通テストに第2日程が設けられる

2021年度大学入試からの制度上の主な変更点は、次の通りだ。

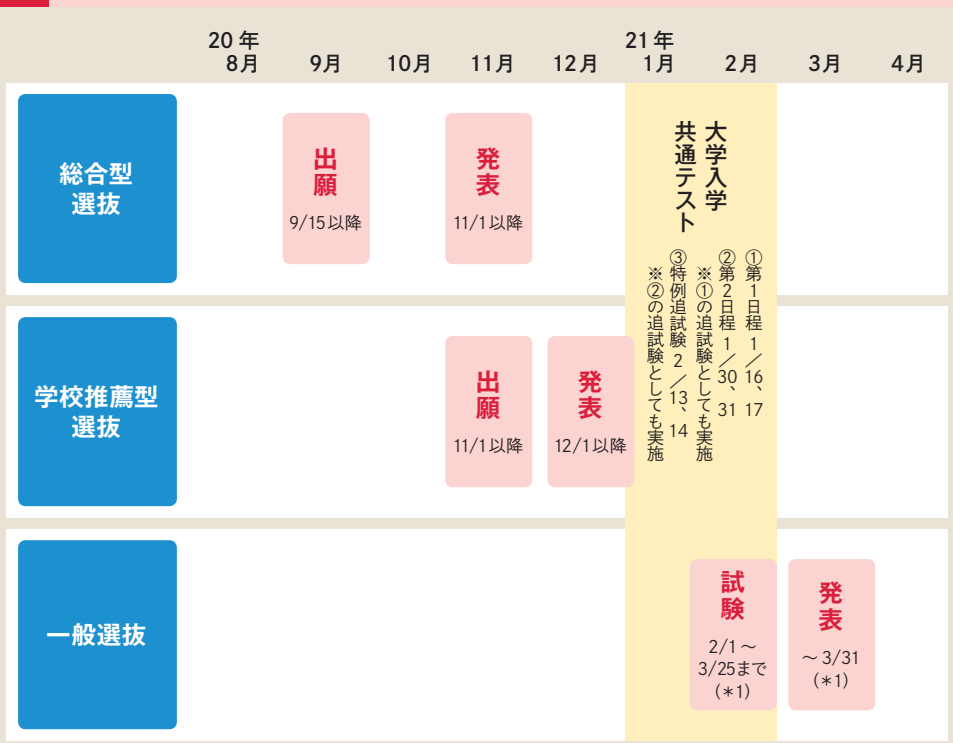
まず、「大学入試センター試験」に代わり、「大学入学共通テスト」が導入される。同テストの出題教科・科目は、大学入試センター試験と同じだが、各教科・科目の知識・技能を十分に有しているかの評価を行いつつ、思考力・判断力・表現力を中心に問うのが眼目の共通入試となる。

各大学の個別入試では、入試区分の名称やあり方が変更される。名称については、一般入試は「一般選抜」、AO入試は「総合型選抜」、推薦入試は「学校推薦型選抜」となる。一般選抜では、筆記試験に加え、調査書や志願者本人が記載する資料等が積極的に活用される。総合型選抜・学校推薦型選抜では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」も適切に評価するために、調査書等の出願書類だけでなく、各大学が実施する評価方法等、または「大学入学共通テスト」のうち、少なくともいずれか1つの活用が必須とされる。

そうした多面的・総合的な評価の充実を図る趣旨から、調査書の様式で、「指導上参考となる諸事項」が拡充され、より多様で具体的な内容の記載が求められるようになる。これまでの表裏の両面1枚という枚数の制限もなくなる。過年度卒業生は、従前の様式による調査書が認められる。

以上が当初の主な変更点だが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、次のような変更点が発表された。まず、入試日程の変更だ（**図1**）。「大

図1　2021年度大学入試のスケジュール



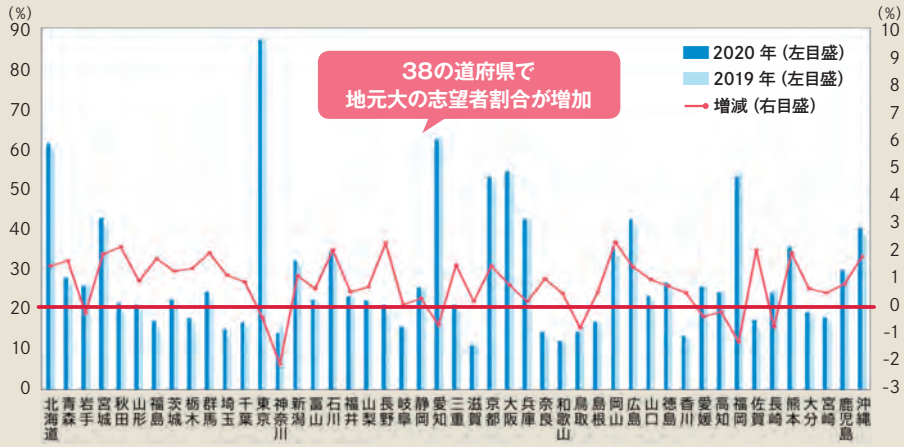
＊1　総合型選抜および学校推薦型選抜において学力検査を課す場合は同様。
＊「令和3年度大学入学者選抜実施要項（令和2年6月19日付け2文科高第281号文部科学省高等教育局長通知）」を基に編集部で作成。

学入学共通テスト」については、当初の試験日だった21年1月16・17日を第1日程とし、新たに第2日程として同30・31日、特例追試験として2月13・14日が設定された。総合型選抜についても、入学願書受付が9月15日以降となった。加えて、第3学年の評定の欄は、臨時休業により評定を記載できない場合は、理由を付して記載不可とすることができる。

また、文部科学省は、各大学に対して、大会や資格・検定試験等に参加できない場合、志願者が不利益を被らないよう、努力のプロセスや大学で学ぼうとする意欲を多面的・総合的に評価するよう求めた。ICTを活用したオンラインによる面接等を取り入れた選抜を行うことも、選抜方法の工夫として挙げられている。

さらに、出題範囲への配慮として、2年程度前の予告・公表にかかわらず、「大学入学共通テスト」の指定科目を減らすことや、指定科目以外への科目変更を認めることなども示されている。個別学力検査では、高校3年生で履修することが多い科目については、解答する問題を選択できるようにしたり、発展的な学習内容から出題しない、あるいは補足事項等を記載したりするといった工夫を行うものとした。

図2　所属校の所在地と同じ所在地の大学の志望者の割合



＊ベネッセコーポレーション「2020年度大学入学共通テスト模試・6月　2021年度入試動向」を基に編集部で作成。

模擬試験の結果に見る生徒の状況

多くの県で強まる地元志向

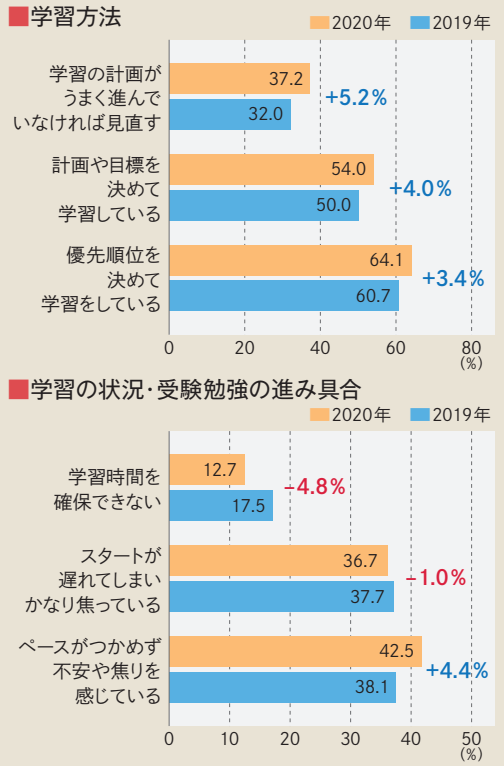
ベネッセコーポレーションが6月に実施した「大学入学共通テスト模試」の受験者総数は、約36万人（対前年指数84）だった。設置区分別に志望者数を見ると、国公立大学の志望者数は対前年指数90、私立大学は同78だった。私立大学においては、16年度からの入学定員の厳格化の影響により、ここ数年、難易度が上昇している。それを敬遠して、20年度入試では志願者数が減少に転じ、それを受けた志望動向が継続している。

近年、出身高校の所在地と同じ所在地の大学を志望する生徒の割合が高まっている。今回の模擬試験の都道府県別の志望動向でも、38の道府県で地元大学の志望者の割合が前年度よりも高く、地元志向が強まっている傾向が見られた（**図2**）。東京都以外の道府県において、東京の大学の志望者数が減少しているのも特徴的だ。

次に、「スタディーサポート」の3年生第1回の結果から、3年生の学習状況を見ていく（**図3**）。

学習方法については、「学習の計画がうまく進んでいなければ見直す」「計画や目標を決めて学習して

図3　3年生の学習状況



＊ベネッセコーポレーション「スタディーサポート3年生第1回結果分析」を基に編集部で作成。

いる」「優先順位を決めて学習をしている」のいずれの割合も、前年度比で増加しており、その傾向は1年次から継続している。それは今年度の3年生に、「大学入学共通テスト」が初めて実施される学年としての意識づけが、低学年時からなされてきたからかもしれない。学習時間についても、「学習時間を確保できない」の割合は、前年度よりも減少している。

一方、「ペースがつかめず不安や焦りを感じている」生徒は、前年度に比べて増加している。よい学習状況を受験直前まで継続できるよう、生徒の不安感をぬぐい去ることができるような支援が求められると言える。

各校の進路の状況と今後の見通し

指導方針に大きな変更はなし 早めの準備を進める

大学入試制度の変化や新型コロナウイルスの感染拡大を受けた様々な変更に、各校はどのように対応しようとしているのか。6校の進路指導担当者に、自校のこれまでの指導状況や生徒の状況、今後の進路指導や学習指導の見通しについてヒアリングを行った（**図4**）。

愛知県立豊明高校 3学年主任　嘉賀正泰	東京都・私立佼成学園女子中学高校 教頭　西村準吉	福島県立喜多方高校 進路指導部長　風間典子	高校 分掌・氏名
1学年 260人／ 国公立大7人、私立大250人（現浪計）	1学年約210人／ 国公立大23人、私立大311人（現役のみ）	1学年約160人／ 国公立大17人、私立大116人（現浪計）	1学年生徒数／ 20年度進学実績
授業進度はおおむね予定通り。学校行事等を見直し、年間授業時数は確保できたため、10月には例年通りの進度に追いつく予定。例年に比べて、総合型選抜への取りかかりが鈍い。オープンキャンパスが開催されず、入試日程が未定の大学が多いため、意思決定も遅れているようだ。大学からの情報は随時出されるため、情報収集力の違いで情報量に差が出そう。	4月からオンライン授業を実施。授業は予定通り進んでいるが、オンライン授業でうまく学習できる生徒と、そうでない生徒に分かれている。集団の学力を測定する機会には乏しかった。進路選択において、大学から直接情報を得たり、友人同士で進路について話したりする機会が少なく、保護者の安全志向に影響されるのではないかと、懸念を抱いている。	理系の数学と理科、文系の地理歴史・公民で予定より授業進度が遅れたため、その対応として、元々実施予定だった平日課外と土曜学習の時間を増やした。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、志望校について話し合う3者面談の前に、首都圏の大学への進学に不安を抱く保護者からの相談があった。志望校検討会で、そうした声があったことを共有した。	これまでの 指導状況、 生徒の状況
【面談での留意点】大学調べを行う時間は十分にあったはずなので、面談では志望大学・学部とその志望理由を明確にさせたい。入試科目等が変更された大学もあるので、正確な情報収集に基づいた準備が必要。教師が提供する情報は生徒が持つ情報以上であるべきという考えから、学年団とは十分な情報収集を心がけることを共有している。県外の大学の志望者には、地方会場があるか、入試当日はどのように移動するのかなどを確認する。 **【学校推薦型選抜の指導】**学校内での1次審査の基準は、入学式で生徒と保護者に説明済みであり、大まかな希望の集約は、3者面談で行った。9月には生徒に出願書類を作成させ、担任・学年団・推薦委員会で精査し、受験の可否を決定する予定。受験決定後には、教師が分担して、受験者に面接・小論文の指導を行う。	**【面談での留意点】**面談では、入試方式だけで志望校を選んでいないかなど、生徒のそれまでの希望進路と、受験校に挙げた大学とを照らし合わせ、志の大切さを改めて問いたい。学問選択では、新型コロナウイルスの感染拡大の影響や産業構造の変化にも注目させ、従来の進路指導と同様に、社会の変化を見通して自分の道を決めることの重要性を伝える。 **【総合型選抜と学校推薦型選抜の指導】**この2つの入試区分は入試日程のすみ分けがされたが、出願時期を考えると、校内選考の日程はほぼ同じ。例年同様、どちらを受験するか迷う生徒が出ている。指導は例年通りで、志望校を早く決め、入試科目と試験内容に対応するよう伝えてきた。入試日を遅らせる大学と遅らせない大学があり、対応が難しい。併願が可能か、入試科目は何かなど、すべてを確認した上で、併願の日程を組み立てさせたい。	**【受験校決定までの留意点】**総合型選抜では、各大学とも募集要項の発表が遅れている。進路指導部では、募集要項の発表時期を大学に問い合わせるなど、情報収集をしている。生徒や学年団は、募集要項の発表後、速やかに事務手続きを行えるよう、事前準備をしている。生徒には、「自分の進路は自分で探す責任がある」と常に話していたが、特に今年は情報収集への意識を高めるよう、進路指導部長からの講話を行った。また、入試科目での負担増が予想されるため、生徒がそれに十分対応できる状況かどうかにも注視して、受験校決定の支援を行いたい。 **【受験校決定後の留意点】**総合型選抜では、募集要項をしっかり確認し、特に提出書類の漏れがないよう注意していく。今年は変更点の多い入試になるため、これまでの経験だけで判断しないことを学年団とも共有した。	進路指導の 状況・ 今後の見通し
【「大学入学共通テスト」対策】教科別の対策は、3年次1学期の補習から行っている。また、進路講話などでも、「丁寧に、正確に、大きく、濃くマークしよう」と常に生徒に伝えている。自己採点の精度を高められるよう、マーク式模擬試験では毎回、生徒に自己採点の重要性を伝えている。	**【「大学入学共通テスト」対策】**例年通り、確かな学力をしっかり身につけさせたい。対策の開始時期は、教科ごとに変わるが、まずはセンター試験の過去問題を解答できる力をつけることが重要だ。授業では、「大学入学共通テスト」の試行調査の問題や対策用問題集で演習を重ねている。演習問題の内容を工夫しているが、基本事項をしっかり押さえる方針だ。	**【「大学入学共通テスト」対策】**各教科・科目とも、センター試験の時と同様、11月から「大学入学共通テスト」対策を始める予定。マーク式対策に多くの時間を費やすことで、記述力が低下してしまわないよう、対策時期も例年通りとしている。授業では、「大学入学共通テスト」の試行調査の問題を踏まえて、問いを工夫している。	学習指導の 状況・ 今後の見通し
教師が根拠をもって指導できているか、生徒一人ひとりの進路を見据えているかが、進路指導で最も大切な点だと考えている。生徒それぞれに対し、時宜を得て面談を行うことを、学年団と共有している。	生徒の志望動向には、大きな変化は見られないが、オープンキャンパスなどには参加できていない。限られた情報で志望校を検討しなくてはならないのが気がかりだ。	コロナ禍が収束しない場合、首都圏で私立大学の入試を受験した後、国公立大学の前期試験まで登校して学習してよいのか、保護者から問い合わせがあるだろう。そういったことも含めた対応と、指導方針を準備しておきたい。	そのほか 留意している点

「大学入学共通テスト」の受験日程については、6校とも「第1日程を推奨する」と回答した。その理由は、個別学力検査の対策期間を十分確保するためだ。また、入試日程がこれまでのAO入試から後ろ倒しになった総合型選抜では、受験の決定に慎重な姿勢が見られた。不合格だった場合、一般選抜への切り換えがすぐに求められるため、その意識を事前に持つように生徒に促すとともに、切り換えの対応ができる生徒かどうかにも留意していくようだ。

総じて、進路指導も学習指導も、大きな方針は例年と変わっていないが、個別具体的な点は、各校とも丁寧に対応している。例えば、調査書の記載事項が拡充されたことを受けて、早めの準備を学年団に促したり、各大学が発信する情報に一層注視し、正確に情報を把握するよう努めたりするといったことだ。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響が大きい首都圏や近畿の大学への進学に、懸念を見せる保護者も出てきている。生徒と保護者との間に意見の相違がないよう、家庭内での話し合いを促すことが例年以上に必要かもしれない。

図4　各校の進路指導・学習指導の状況　＊VIEW21 編集部が、2020 年 7 月下旬に各校に電話でヒアリングした内容をまとめた。

高校 分掌・氏名	沖縄県・私立興南中学校・興南高校 進路指導部主任　沼波岳臣（ぬまなみたけおみ）	熊本県立済々黌高校（せいせいこう） 進路指導主事　篠塚年洋（しのつかとしひろ）	徳島県立脇町高校 進路指導主事　藤澤康二
1学年生徒数／20年度進学実績	1学年約 350 人／ 国公立大 48 人、私立大 273 人（現浪計）	1学年約 410 人／ 国公立大 332 人、私立大 455 人（現浪計）	1学年約 180 人／ 国公立大 95 人、私立大 211 人（現役のみ）
これまでの指導状況、生徒の状況	臨時休業中にオンライン授業を実施し、学校再開後の土曜日も授業を実施したため、授業進度はそれほど遅れなかった。学校再開後、授業を急ぎ進めてきた影響からか、生徒には精神面の不安などが生じたようだ。その影響が、定期考査や模擬試験の結果に少なからず出ている。例年と比べ、学習内容の定着が不十分な生徒が多く見られる。生徒の志望動向は例年通り。	学年団で1年次から第1志望を諦めさせない指導をしてきた成果もあり、例年以上に難関国公立大学志望者が多い。「大学入学共通テスト」の模擬試験では、英語のリーディングや数学Ⅰ・Aで得点が伸び悩む生徒が目立ったため、それぞれ対策を進めている。「大学入学共通テスト」は第1日程の受験を想定し、個別学力検査の対策期間を例年通り確保する予定。	生徒は危機感を持って学習しており、例年よりも家庭学習に取り組んでいる。定期考査や模擬試験の結果は悪くはない。生徒の希望進路に大きな変化はないが、学校推薦型選抜志望者が若干増え、進学先を早く決めたいという生徒の思いが感じられる。授業進度が追いついてきたため、「大学入学共通テスト」は第1日程を推奨。出願校決定や対策に時間を取りたい。
進路指導の状況・今後の見通し	**【面談での留意点】**大学からの情報に注視し、オンラインオープンキャンパスなどに積極的に参加するよう、生徒に勧めている。大学からオンライン大学説明会の案内が個別に来た場合は、校内で希望者を集めて参加させている。 **【総合型選抜と学校推薦型選抜の指導】**総合型選抜では、入試日程や出願書類などの変更点に注意させている。学校推薦型選抜でも学力試験を実施する大学がある。例年以上に生徒に声をかけて、一般選抜も視野に入れた学力試験対策をしっかり意識させている。 **【受験校決定後の留意点】**総合型選抜志望者には、活動報告書や学習計画書などの準備を早めにするよう促した。1年次から蓄積してきたポートフォリオを見返し、活動履歴だけではなく、どんな気づきを得たのか、何ができるようになったのかを自分で言語化できるよう指導している。	**【受験校決定までの留意点】**総合型選抜では入試日程に変更があったが、その影響もなく、例年通りの指導をしている。生徒の志望を明確に持たせ、総合型選抜・学校推薦型選抜希望者ともに、一般選抜対策の学習にもしっかり取り組ませる。調査書の記載量が増えたため、担任から記載量の目安を質問された。大学に問い合わせたが、明確な回答を得られなかったので、どのように書くべきか、どの程度の量に収めるのか、校内の目線合わせをしたい。既に書き始めた担任もいる。 **【受験校決定後の留意点】**保護者には、安易に志望校を変更させないようにと理解を求めている。併願校数が増える可能性があると予想しているが、県内には私立大学が多くないため、その意味でも、国公立大学志望を貫かせたい。生徒には、第2波、第3波に備えて気持ちを引き締めておくことも伝えている。	**【面談での留意点】**生徒と保護者の間で意思疎通がしっかりできているかを確認したい。県外の大学を志望する場合、保護者がその地域の新型コロナウイルスの感染状況を懸念し、生徒の意思決定に影響を与える可能性がある。 **【総合型選抜と学校推薦型選抜の指導】**募集人員が増加傾向にある総合型選抜は、志望理由が明確な生徒に勧めている。学校推薦型選抜は、2年次までの活動内容の充実度を振り返らせて受験を検討させたい。両方式とも、十分な出願準備や対策が必要であり、不合格時には一般選抜に向けてすぐに切り換えなければならない。メリット・デメリットの両方を理解させた上で、受験を決定させる。 **【受験校決定後の留意点】**オンライン面接は、視線や表情など、対面式とは違う留意点がある。特別な対策が必要となるため、学校推薦型選抜の希望が出た段階で指導体制を整えたい。
学習指導の状況・今後の見通し	**【「大学入学共通テスト」対策】**例年通り、教科書の内容を終了後、本格的な指導を開始する。中高一貫コースでは、夏季休業時から演習を始めるが、今年は夏季休業が短いため、例年行ってきた夏季講座を中止。思考力等が求められる問題については、「大学入学共通テスト」の対策用問題集で対応。授業でも、「説明させる」「理由づけする」など、教師が発問を工夫している。	**【個別学力検査対策】**例年通り、「大学入学共通テスト」終了後から個別学力検査の対策を始める予定。内容は、志望校別の問題演習が中心となる。出題範囲の変更が検討されているようだが、出題範囲が狭まったとしても、問題の難易度が変わることはないと予想している。気を抜かないで演習問題に取り組むよう伝えていく。	**【「大学入学共通テスト」対策】**10月に教科書の内容の学習を終わらせ、記述や論述の演習を始める予定。マーク式対策は例年11月に始めていたが、今年は12月の期末考査後として、それまでは記述・論述対策を行う。思考力等の育成は通常の授業に組み込み、その評価は「大学入学共通テスト」の試行調査を参考に作問した校内実力テストで1年次から測定してきた。
そのほか留意している点	生徒の不安を取り除くことに留意し、学校再開後すぐに個人面談を行い、進学説明会も例年より早く実施した。	コロナ禍や入試制度の変更で、生徒は少なからず不安を抱いている。状況が日々変化しても、落ち着いて学習に集中するよう伝え続けたい。経済的に厳しい家庭には、授業料減免や特待生などの情報を個別に提供していく。	SNS やゲームなどに時間を費やし過ぎないよう、自身でルールを決めるなどの指導をしている。選択式問題の入試は、得意な問題を選べる利点はあるが、全大学がそうした対応はしないだろう。対策範囲を省かないようにしたい。

「これから」を考える

――「今」を見つめた未来の創り手たち――

新型コロナウイルスの感染拡大と、それによる社会の変化は、まさに誰もが予測しなかった事態であり、
現代が「予測困難な時代」であることを、私たちは身をもって知ることになった。
だが、そうした中でも、多くの生徒と教師が、よりよい社会と幸福な人生、
そして、その実現に寄与するこれからの学びや学校のあり方について主体的に考え、行動した。
彼ら・彼女らは今回の事態から何を学び、どのような気づきを得たのか――。
「未来の創り手」である生徒と教師、そして、変化の激しい社会を生きている社会人の話から、
学び、学校、教育の「これから」を考える。

人は、他者と話すことで自分を理解することができる――私にとっての大きな気づきだった

神奈川県・私立自修館中等教育学校 **菅野風歌**さん

自分の知らない考え方があることに気がついたことで、もっと悩んでいいんだと思えるようになった

神奈川県・私立自修館中等教育学校 **川久保実莉**さん

未来は何が起きるか分からない。それでも、「今」は「将来」に確かにつながっている

福岡県立育徳館中学校・高校 **中村唯乃**さん

臨時休業を経た高校生が語る、私の学びの「これまで」と「これから」

P. 8－11

難局を乗り越えるためには、理想の社会像を描く力が必要

依田浩崇さん

解決すべき問いを見つけ、自分にできることを謙虚に考えることが求められている

太田絵梨子さん

私たちに必要なのは、人とのつながりの中で生きがいや働きがいなどを見いだしながら、自らを生かす力

吉田梅乃さん

想定外の事態を経て社会人が考えた、「これから」の社会で求められる資質・能力

P. 12－15

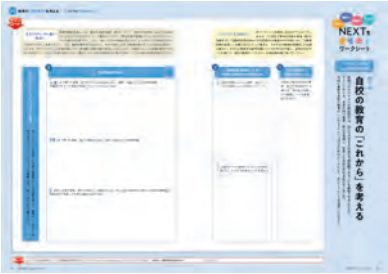
特集 教育の

ダウンロード

生徒の・教師の・自校の・社会の
NEXTを語り合うワークシート

今号の特集のテーマを校内の教師同士で深めるツールとして、ご活用ください

P.32－33



子どもたちが未来の社会で幸せに生きるために、学校は何をすべきかを考える

広島県教育委員会 教育長 **平川理恵**

これからの学校教育 実践事例

広島県立広島叡智学園中学校・高校

広島県立広島国泰寺高校

社会の変化を見据えた変革先進県の取り組みに見る、「これから」の学校像

P. 16－21

生徒に保障するミニマムな指導を明確にした上で、生徒一人ひとりの主体的な学びを支援したい

北海道旭川東高校 **松井恵一**

予測困難な社会を生きる者として、不安を語り合うことは生徒にも教師にも必要

福井県・私立福井南高校 **浅井佑記範**

想定外の事態における経験や気づきを、教育の「これから」につなげる

P. 22－25

臨時休業中の生徒の成長を、グランドデザインの見直しにつなげる

長野県蘇南高校

臨時休業の経験を通じて見つめ直した、自校の教育活動の「これから」

P. 26－29

教育の「これから」を考えるシリーズ特集がスタート

本誌特集の「これから」

P. 30－31

ダウンロード このマークのある図版は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（https://berd.benesse.jp）からダウンロードできます。
「HOME →教育情報→高校向け」でご覧ください。

臨時休業を経た高校生が語る、私の学びの「これまで」と「これから」

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、多くの高校が長期間の臨時休業を余儀なくされた中、生徒は苦しみ、もがきながらも、「今」と「自分自身」に向き合い、行動を起こしていった。生徒の臨時休業中の気づきと学びから、教育の「これから」を考える。

他者とのつながりの中で、自分のあり方や秘めた力に気づいた

神奈川県・私立自修館中等教育学校 菅野風歌（かんのふうか）さん／川久保実莉（みのり）さん

苦しみを乗り越えた時、人生のあり方が見えてきた

菅野　約3か月の臨時休業中は、学校からオンラインで配信された課題などに取り組んでいました。1人でダラダラとSNSを見ないよう、オンライン授業が終わったらデバイスを自室から遠ざけるなど、受験生としての自覚はありました。でも、集中して勉強することがだんだんと難しくなり、計画通りに進まない日が続くようになりました。すると、自分に対するネガティブな気持ちが心の中を占めていきました。

ある日、オンライン上で先生や友人と話をしていた時、ふと私は、「全然勉強が進まない。計画通りに勉強できている友人の話を聞くとイライラし、そんな自分に自己嫌悪してしまう」と、自分の気持ちを吐き出していました。話しているうちに、涙があふれ、止まらなくなりました。自分がこんなに苦しんでいたことに、私は人に話すことで、ようやく気づくことができたのです。

その日から、私は先生と約束をして、頻繁にオンライン上で面談をしてもらうようになりました。先生にアドバイスをもらうためというよりも、自分のことを自分で理解するためです。臨時休業が終わってからも、学校で、しょっちゅう先生に話を聞いてもらっています。

今回の想定外の事態を経験して、私の中で変わったことの1つは、先

かんの・ふうか（左）　神奈川県・私立自修館中等教育学校6年生。将来はリハビリテーションに携わる医療職に就きたいと考えている。
かわくぼ・みのり（右）　神奈川県・私立自修館中等教育学校5年生。環境問題に興味を持ち、探究学習を通じて校内外の活動にも積極的に参加中。

生との関係です。今までは、先生に答えを求めて質問していましたが、今は、自分のものの見方や考え方、あり方を理解するために質問しています。自分のことが分かって初めて自分で動けるのだと思いました。

自分のあり方や考え方を自分で理解できるようになってからは、将来のことをそれまで以上に深く考えられるようになりました。私はリハビリテーションに携わる医療職を目指しているのですが、「もしもこのコロナ禍で、自分がその仕事に就いていたら、何ができただろうか」と考えました。そして、実際にその医療職に就いている方に、オンライン上でお話を伺いました。自分の中に生まれた疑問を解消しようと行動ができたのは、4年間取り組んできた探究学習の中で、自らテーマを決めてそれを解決するための策を考え続けたからだと思っています。

「人は、他者と話すことで自分を理解することができる」ということに気づけたのは、私にとって大きなことでした。目指す職業に就いた時、患者さんやその家族に対して、医療技術的な支援だけでなく、その人たちの話を真摯に聞くことでできる貢献もあるのだと分かったからです。

神奈川県・私立自修館中等教育学校

◎明知・徳義・壮健を建学の精神に、自主・自律の精神に富み、自学・自修・実践できる「生きる力」を育み、人間性豊かでグローバルな人材の育成を目指す。自らテーマを決めて論文にまとめる4年間の探究学習にも力を入れる。
◎設立　1999（平成11）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約120人
◎2020年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東京都立大、横浜市立大などに3人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大などに延べ197人が合格。海外大学に2人が合格。
◎URL　https://www.jishukan.ed.jp/

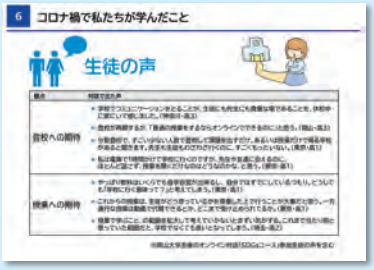
想定外の事態の中で自分の強みを知った

川久保　こんなに長期間、1人で家で勉強するのは初めてだったので、最初のうちは学校の課題を漫然とこなすだけでした。でも、友人とオンライン上で話す中で、同じ場所にはいなくても、この瞬間もともに頑張っている仲間がいることに気がつき、私も頑張ろうと思えるようになりました。それからは、計画通りに勉強ができるようになり、集中力も上がっていくと、心の中に余裕が生まれたのか、趣味の料理、そして中学校からずっと取り組んできた探究学習にも時間をかけられるようになりました。私の探究学習のテーマは、ファストファッションにおける大量廃棄の問題です。せっかく自由な時間があるのだから、探究テーマをもっと深めようと、アパレル業界でこの問題に関心を持っている人にオンラインインタビューを申し込み、お話を伺いました。

普段の生活の中では会う機会がない人と話をすることができて、探究テーマへの理解が深まりましたが、私にとって想定外の成果は、進路のことをその方と話せたことです。インタビューの中で、自分は将来何をしたいのかまだよく分かっていないと正直に話すと、「どんな人を喜ばせたいのかを考えてみたらどう?」と、アドバイスをくださったんです。仕事は自分のしたいことをするもの

臨時休業中の「気づきと学び」を最大化させるための全国の中学校・高校の教師、生徒の対話の場に菅野さんが参加しました

コロナ禍における「生徒の気づきと学び」を最大化するため、全国56の中学校・高校の教師によるネットワーク「コロナ禍における『生徒の気づきと学びを最大化する』プロジェクト」が2020年4月に活動を開始。毎週1回、テーマ別のグループ対話と各校の取り組みの紹介をオンライン上で行い、対話の内容を「プロジェクトアーカイブページ」で公開してきた。菅野さんは5月のオンライン対話に参加し、「他者との対話を通した自己修復、自己発見」という臨時休業中の経験について語った。



「コロナ禍における『生徒の気づきと学びを最大化する』プロジェクト」活動報告より。
https://blog.benesse.ne.jp/bh/ja/news/20200714_release.pdf

予測困難な未来を生きるからこそ、語り合いながら「今」を大切に生きる

福岡県立育徳館中学校・高校 中村唯乃（ゆのの）さん

だと思っていましたが、どんな人を喜ばせたいのかという視点で仕事について考えたことは今までなかったので、新たな視点を得たような気持ちになりました。そして、自分の知らない考え方がまだまだあることに気がついたことで、「私はもっと悩んでいいんだ」と思えるようになり、気持ちが楽になりました。

インタビューの最後に、その方から「あなたと話せてよかった」と言ってもらえたのもうれしかったです。探究学習で取材をした経験を通じて、積極的に自分の考えを述べたり、話がより深まるような質問をしたりする力が身についていたのかもしれません。相手が今どんな気持ちでいるのかを理解し、相手をよりよい状態にするための最適な言動を選択する、ファシリテーターが持つような力は、インタビューに限らずいろいろな場面で必要とされる力だと思うので、これからの高校生活でもっと高めていきたいです。

想定外の事態の中、確かに苦しいこともありましたが、想定外の事態だからこそできたこと、分かったこともありました。今回の事態が収束しても、自分から積極的に動いていくことの大切さは忘れません。

今の自分をつくるのは自分の考えと行動

3月に臨時休業が始まってから、ずっと自宅にこもって勉強をしていました。でも、家族以外の人との交流が少なくなり、何となく毎日がつまらなくなっていくにつれ、勉強へのモチベーションも少しずつ下がっていきました。さらに、部活動の最後の大会が中止になり、大切な目標がなくなったことで精神的に落ち込み、あらゆることに身が入らない時期もありました。

ただ、そんな中でも、「このままではいけない」という思いはずっとありました。私は、高校生活における様々な経験を通して、「今の自分をつくっているのは自分自身」という考えを持つようになりました。

日々の学習の理想の状態や学校行事の目標は、先生にサポートしてもらいながらイメージしていきますが、そこに向かうプロセスは、自由に考え、自分に合った行動を選択していくようにしてきました。高校生になって、自由な選択と挑戦の楽しさを味わいながら自分をつくっていくという実感を得てきた私は、臨時休業という想定外の事態の中で、自分が今取るべき行動を改めて考えました。

私は、自宅にいなければいけない状況だからこそ、「なぜ社会は、このような事態になったのか」「高校生として私にできることはあるのか」といったことを考え、社会のことに目を向けようと考えるようになりました。受験生である前に、今を生きる1人の人間として、社会とつながろうと思ったのです。そうして、オンライン会議ツールを活用した地域の社会人との対話の場に参加するなど、少しずつ新しい行動を起こしていきました。さらに、自分以外の人にも社会的なつながりを楽しんでほしいと考え、高校の友人にも声をかけて、オンライン上で社会人や大学生との対話の場をつくるということにも挑戦しました。

今の思いを語り合いながら大切な「今」を積み重ねたい

臨時休業を振り返った時、私にとっての大きな気づきは、「大切なのは『今』」ということでした。3か月にも及ぶ臨時休業中に私が経験した様々なことは、まさに想定外の

ことばかりで、自分がこれまで「毎日は予想通りに過ぎていく」ことを前提に日々を過ごしていたのだと思い知らされました。計画は大切だけれど、未来は何が起きるか分からない。それでも、「今」は「将来」につながっている……以前よりも「今」を大切に感じるようになりました。

受験生の私は、重要な「今」を積み重ねる日々が続いています。臨時休業でこれまでのような授業ができない時間が長く続いて、正直不安もありますが、先生方は「大丈夫だよ」と繰り返しおっしゃいます。新型コロナウイルスの感染が拡大する中、先生方も私たち同様きっと不安なはずなのに、それでも「大丈夫だよ」と私たちに声をかけながら授業をしてくださる……そんな先生を始めとする大人の気持ちも考えられるようになったのも、臨時休業を通じた私の変化の1つです。

ただ、先生方にそうした言葉をかけてもらっても、私たち生徒は不安にさいなまれ、ネガティブな思考に陥りがちです。私も、部活動の大会が中止になった時に目の前が真っ暗になってしまい、「大会がなくなっても、部活動での経験が無駄になるわけではない」といった言葉は耳に入りませんでした。それでも、顧問の先生や部員と話す中で、少しずつ気持ちは整理されていきました。

今はまだ、私たち生徒にも余裕がなく、勉強に関係のないことは話しづらい雰囲気もありますが、少しずつでもお互いの気持ちを打ち明けながら、大切な「今」を、みんなで積み重ねていければと思っています。

なかむら・ゆの　福岡県立育徳館中学校・高校3年生。高校3年生までバドミントン部に所属。大学ではバイオテクノロジーを学び、将来は、安全で収穫量が大きい農作物の開発などに従事したいと考えている。

福岡県立育徳館中学校・高校

◎宝暦8年、小笠原藩の藩校・思永斎を源流に、全国屈指の伝統を誇る。2004年度から福岡県下で初めての中高一貫教育校となり、「育徳」の校訓と「文武両道」「質実剛健」の校風の下、次世代人材を育成する教育活動を展開。

◎設立　1758（宝暦8）年

◎形態　全日制／普通科／共学

◎生徒数　1学年約200人

◎2020年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、東京外国語大、広島大、九州大、熊本大などに32人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ149人が合格。海外大学に1人が合格。

◎URL　http://ikutoku-h.fku.ed.jp/

最新の教育現場の状況や取り組み、今求められている情報、現場の教師や識者のオピニオンなどを伝える『VIEW21 express』で中村さんが語ってくれた

変化が激しく、将来の予測が困難な社会において必要な教育と、そしてそれを実現するための手立てを考えるため、最新の教育現場の状況や取り組み、現場の教師や識者などのオピニオンを紹介する『VIEW21 express』で、中村さんは「臨時休業下で考えた、これからの教師との関係」について語ってくれた。

『VIEW21 express』
シリーズ・みんなで語り合い、考える「これからの学校」より。
https://berd.benesse.jp/magazine/express/

想定外の事態を経て社会人が考えた、「これから」の社会で求められる資質・能力

新型コロナウイルスの感染拡大は、生活様式や働き方にも大きな影響を与えている。それまでのあたり前が通用しなくなった状況を経験した大人たちは、これからの社会では、どのような資質・能力が求められると考えたのか。かつて本誌に登場した若手の社会人を訪ね、話を聞いた。

学校、そして社会に育てられた私たちが考える、「これからの社会を創る人たち」に必要な力

依田浩崇（よだひろたか）さん／太田絵梨子さん

よだ・ひろたか　福島県立安積（あさか）高校卒業。東京大学法学部卒業。同大大学院教育学研究科修了後、文部科学省に入省。文化庁に在籍し、文化財保護に関する業務に携わる。
おおた・えりこ　福島県立安積高校卒業。東京大学教養学部を経て、現在、東京大学大学院教育学研究科博士課程に在籍。研究テーマは「深い理解を促す授業と宿題の連動」。

予測困難だからこそ未来は自分で創るもの

依田　2011年に大学1年生だった私は、今年、社会人5年目を迎えました。私の故郷、福島県に甚大な被害をもたらした東日本大震災の発生以降、熊本地震を始め、想定外の事態を私たちは数多く経験しました。新型コロナウイルスの感染拡大もその1つと言えるでしょう。私が東日本大震災を通じて考え、学んだことを、そうした想定外の事態に生かせたなら、それは福島県民として育った私の、社会に対する恩返しになるものだと思っています。社会人になってキャリアを重ね、自分の行動が社会に与える影響が大きくなるほど、想定外の事態に対して自分なりにできる行動を模索する思いや責任感が強くなっています。

一方で、想定外の事態に向き合う時、私は、自分に足りないものを自覚し、他者の言葉に耳を傾け、他者の力を借りてよりよい答えを見つけようという意識も強くなりました。そうした変化は、仕事を通した私の成長だと思います。私が現在携わっている文化財保護という仕事は、所有者や修理技術者、観光・地域活性化に携わる方など、様々な立場の人がかかわっていて、時に考え方や利害が異なりますが、地域や社会の未来をよりよくしたいという思いは皆に共通しています。そうした環境で仕事をする中で、他者の言葉に耳を

傾け、納得解を得る大切さを学んだのだと思います。さらに、仕事を通して、日本が誇る伝統や急速に発展するＩＣＴなど、自分があまり目を向けてこなかった領域に大切なものがたくさんあることに気づき、視野の広がりを実感しています。自分の不足を自覚することが、学び続ける原動力になっています。

「未来を予測する最善の方法は、自らその未来を発明することだ」という言葉があります。10年後の社会を予測することさえ困難ですが、どのような社会にしたいのかを考え、その実現に向けて自分にできる行動を選択することはできます。新型コロナウイルスが今後社会をどのように変えていくのかが分からないからこそ、この難局を乗り越えるためには、理想の社会像を描く力が必要だと思うのです。高校時代、「君はどう生きたいんだ？　今、君は何をするべきなんだ？」と問いかけ、私と対話してくれたのは、母校の恩師でした。その時初めて、未来は自分で創るものなのだと、私は学びました。

未来は予測困難だからこそ、先生方には、「君はどう生きたいんだ？」と生徒に問いかけ、分からないことへの向き合い方を、先生自ら示してあげてほしいと思います。

解決すべき問いに謙虚に向き合う学びの経験を

太田　大学院での私の研究テーマは、「宿題」です。これからの社会で求められる資質・能力を育む家庭学習における課題のあり方とはどのようなものなのかを研究しています。元々、宿題の是非については議論が絶えず、宿題不要論も多く見られました。しかし、今回の臨時休業を機に、宿題が子どもの学習の中で重要な役割を担ったため、家庭学習における課題のあり方について改めて考えた先生も多かったと思います。宿題というと、授業で達成しきれなかった知識・技能をドリル練習で補うといったイメージが持たれがちでしたが、今後も休業の可能性がある中、自立的に学ぶ態度やスキルを育てる機会として宿題を捉え直す必要があると思います。

私にとって、今回の想定外の出来事は、自分の研究がこれからの社会においてどんな意味を持つものなのかを考える機会になりましたが、同じように誰もが自分の目の前にある様々なあたり前について、その意義や価値を捉え直す機会にできるのではないでしょうか。思えば、東日本大震災も、私の社会への向き合い方を大きく変える出来事でした。高校時代の私は、日々の学習のことで頭がいっぱいでしたが、震災を経験して、社会のために自分に何ができるのかを強く考えるようになり、社会で起きている様々な問題に目を向けるようにもなりました。大学時代は、経済的に困窮した家庭の学習支援に携わりました。本人に原因はないのに学習が困難な状況に陥るという理不尽な社会の状況を少しでも変えたいと思ったからです。そうした思いを今も抱き、大学院で学んでいます。大学院での研究は、先人たちが積み上げてきたものの大きさと、それに

東日本大震災の被災地となった福島で育った者として、「私たちの未来のために今、私たちにできること」を東京大生だった依田さん、太田さんが語ってくれた

本誌 2012 年 6 月号の特集では、5 組の高校生、大学生に「東日本大震災を契機に何を考え、今をどのように生きているのか」を語ってもらった。当時、東京大学の 2 年生だった依田さん、太田さんは、地元・福島から難関大学を志望する後輩のために企画した合宿セミナーにおいて、中心的な役割を担った。2 人を動かしたのは、「たくさんの人に育ててもらって今の自分たちがある。だからこそ、その恩返しとして、地元の後輩たちにできることをしてあげたい」という思いだった。

『VIEW21』高校版 2012 年 6 月号・特集
「他者のために学ぶ―震災から1年後の、生徒と教師―」より。
https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/02toku_0334.pdf

進路に悩んだ私を支えてくれた恩師の姿から、想定外をともに乗り越える人とのつながりを考えた

吉田梅乃（うめの）さん

比べた時の自分の小ささを、私に教えてくれました。自分の小ささを自覚したことで、社会に対してもより謙虚になったと思います。

予測困難な社会においては、自分なりに解決すべき問いを見つけ、そして自分の小ささを自覚しながらも、その解決に向けて自分に何ができるのかを謙虚に考えることが、私たちに求められるのだと思います。それは、高校であれば、まさに探究学習の中で経験できることです。例えば、地域課題をテーマにした探究学習であれば、これまで地域の人たちが積み重ねてきたことに向き合い、地域に生きる1人として自分に何ができるのかを考える機会になるでしょう。探究学習を始め、高校の教育活動を通じて育まれる資質・能力は、社会を変える源になると、私は信じています。

先日、安積高校の恩師から、「福島の子どもたちのために、一緒に活動しないか」と連絡をいただきました。自分が学んできたことを、未来を生きる後輩たちに還元することができそうで、とても楽しみです。

困難に直面した時、私たちは仲間のために動けた

私は、今年4月から社会人になりました。肩書きはキャリアナビゲーターで、国家試験や各種資格・検定試験に挑戦する人たちに学習プランを提案したり、カウンセリングを通じて仕事や学習のモチベーションを高めたりしながら、ありたい自分を実現できるようにサポートするのが私の仕事です。高校の恩師には、就職の報告の時に「進路指導部の先生のような仕事です」と説明しました。

この仕事に就こうと思った背景には、高校の恩師の存在がありました。進路の目標を見失った私に寄り添い、私の未来について一緒に考えてくれた恩師の姿がずっと心に残っていて、私も誰かの目標や生き方をともに考え、見つけ、その人がそれを実現できるように後押しする仕事をしたいと思うようになりました。

ただ、私の社会人としての生活は、新型コロナウイルスの感染拡大によって、想定外のスタートになりました。新入社員研修はすべてオンライン上で行われ、同期社員や先輩社員とパソコンの画面越しのコミュニケーションが続く毎日……慣れない環境で疲れや不安が募っていました。そんな私を救ったのは、同期社員とのつながりでした。同期社員が声をかけ合い、研修時間外にオンライン上で自主的に集まり、将来の夢や今の気持ちなどを語り合うようになったのです。そうして、お互いの内面を打ち明けるうちに、「先輩社員をゲストに招いて、ざっくばらんに仕事の話を聞いたらどうだろう」などと、仲間のための企画が同期社員から出てくるようになりました。ストレッチなどの知識があった私は、オンライン研修の合間のボディーケアの指導役を担いたいと上司に申し出ました。

あの時、仲間のために何かをしたいという思いがみんなの中に生まれ、同期社員のコミュニティーをよりよくするための工夫や提案を、それぞれが持つ強みや知見を生かしながら行っていました。自分1人では乗り越えることが難しい困難に直面した時に、お互いを助け、高め合っていける関係を築くプロセスを、当事者の1人として目のあたりにできたことは、有意義な経験でした。

内面をさらけ出せた場所は自分にとっての居場所になる

なぜ、想定外の事態をみんなで乗

り越える関係が生まれたのか。会社のミッションに共感し、未来を創る同志としての信頼で結びついた仲間だったことは、理由の1つでしょう。「変えられないことではなく、変えられることに注力しよう」という会社の行動理念が、私たちに既に浸透していたということもあるでしょう。ただ、みんなで困難を乗り越える力は、高校生活の中でも培われ、発揮されていたようにも思います。高校時代、同じ目標の同級生とグループをつくり、お互いを励まし、競ったこと、部活動や学校行事では自分たちをよりよい状態にするために様々な提案をしていたこと……。

会社や学校で、みんなのために行動ができたのは、そこが自分の居場所だと思えたからではないでしょうか。高校時代、進路に悩む私を見放さず、恩師がいつも声をかけてくれたから、学校は私にとって「居てもよい場所」でした。だからこそ、その場への恩返しとして、自分ができる貢献は何か考えるようになり、失敗を恐れずに様々なチャレンジや提案ができたのだと思うのです。

予測困難な社会を生き抜くために私たちに必要なことは、人とのつながりの中で生きがいや働きがいなどを見いだしながら、自らを生かす力だと思います。ただ、そのためには自分と向き合うことが欠かせません。高校時代の私は、恩師がそばに居てくれたから、自分の嫌な感情や頑張れなかったことにも逃げることなく向き合い、自分自身と対話をすることができました。

今も高校生の中には、部活動の大会の中止など、想定外の事態に困惑し、苦しんでいる人がいると思います。でも、先生や友人とのつながりの中で、自分の内面に向き合い、思いを吐露することができる学校は、「居てもよい場所」です。そして、その場所では、みんながみんなのために変えられることを変えようと注力する……私はそう思うのです。

よしだ・うめの　富山県・私立片山学園中学校・高校卒業。大阪市立大学生活科学部人間福祉学科卒業後、株式会社リンクアカデミーに入社。パソコンスキル獲得や各種資格取得などを通じたキャリアアップ支援に従事。

自分のあり方・生き方を考え続ける力が、高校教師とのどのようなかかわりの中で育まれたのかを、大学生時代に吉田さんが語ってくれた

本誌 2018 年 12 月号の特集では、予測困難な社会を生きる高校生の進路選択のあり方と、それを支える教師の役割について、4 人の大学生がそれぞれの高校時代を振り返りながら、高校教師、大学教授と語り合った。大学生の 1 人として座談会に参加した吉田さんは、小学校の頃から高校に入るまでずっと医学部志望だった自分が、勉強や進路に悩むようになり、担任の教師と面談を重ねる中で、自分の本当の興味・関心を見いだしていった経験を語った。

『VIEW21』高校版 2018 年 12 月号・特集
「『社会』に開かれた進路指導――多様な他者とのかかわりの中で」より。
https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_kou_2018_12_interview.pdf

社会の変化を見据えた変革先進県の取り組みに見る、「これから」の学校像

新型コロナウイルスの感染拡大と全国的な臨時休業は、私たちは既に「予測困難な時代」を生きていることを実感させた。この事態を教育改革に先進的に取り組む自治体はどう捉え、学校はどのような対応を行ったのだろうか。

トップインタビュー

学校と授業のあり方をタイムマシーンに乗って考えてみる

広島県教育委員会 教育長 平川理恵

将来の変化を予測することが困難な時代を生きる上で必要な資質・能力を生徒に育む学校とは、どのような場なのだろうか。主体的な学びを促す教育改革に取り組んできた広島県の平川理恵教育長に、臨時休業下での気づきを踏まえて話を聞いた。

臨時休業によって進んだ未来に向けた学びの変革

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業は、私たちに「これからの学校教育はどうあるべきか」を考えさせるものでした。

今回の事態が起きるまでは、同じ年齢の生徒が同じ教室に集まり、教師からの様々な働きかけを通じて学ぶ場、それが学校でした。しかし、臨時休業によって、私たちはそのような場を維持することが難しい状況に追い込まれました。そこで広島県は、Googleの教育支援クラウドサービス「G Suite for Education」を導入し、県内の児童・生徒全員分に相当する約30万人分のアカウントを確保し、オンライン上に仮想の学校・教室をつくれるようにしました（P.20～21で広島県立広島国泰寺（こくたいじ）高校の実践を紹介）。

とは言え、これまで学校で行っていた教育をそのままオンライン上で展開しようとしているわけではありません。目指すのは、生徒中心の学びの場をつくることです。そのためには、例えば、生徒が自己開示しやすいように、安心・安全な場をつくることの必要性を、これまで以上に教師が意識することが重要です。

そもそも、登校して画一的な授業を聞くという学校教育のスタイルは、工業社会に標準を合わせたものでした。大学入試が、記憶した知識や解法パターンの再生に重きを置い

ひらかわ・りえ
2010年、公募により、公立中学校民間人校長として横浜市立市ヶ尾中学校に着任。文部科学省中央教育審議会特別部会委員などを歴任。18年4月から広島県教育長に就任。著書に『クリエイティブな校長になろう――新学習指導要領を実現する校長のマネジメント』（教育開発研究所）など。

てきたのもそのためです。しかし、技術革新によって、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会、Society 5.0の時代を迎え、学校教育は、生徒が自分の興味・関心を軸に、学校の中だけでなく、地域や企業などともつながりながら、意欲的に学びを深める場へと変わることが求められています。

広島県では、2014年12月に策定した「広島版『学びの変革』アクション・プラン」に基づき、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な人々と協働して新たな価値を創造できる人材の育成を目指した教育を進めてきました。学びたいこと、やりたいことを自覚した生徒が、教室においてだけでなく、いつでもどこでも個別最適化された教育を受けられるようにすることで、自分の将来を切り拓く資質・能力が育まれる……私たちはそんな学びを実現しようとしていたのですが、臨時休業によってそれが加速していったわけです。

人とのかかわりの中で学びを深める学校を創る

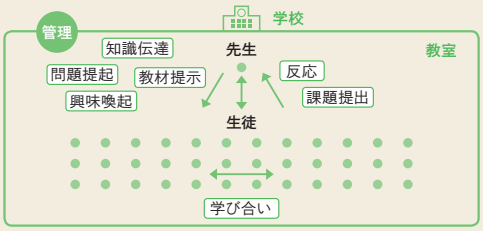
「学びの変革」を実現する上で重要になるのが、「本質的な問い」を通じて資質・能力を育む授業です。例えば、20年4月から、4つの県立商業高校でスタートした「ビジネス探究」では、1年生は毎週4コマ連続で、「生きるとは」といった本質的な問いに向き合います。最初は考えがまとまらない生徒も、これまでの人生を振り返り、仲間と語り合う中で、生きることの意味や学びの目的を言葉にできるようになります。

そうした、一人ひとりの生徒が本質的な問いに向き合いながら、教科の知識・技能を含む資質・能力を身につける授業は県全体で展開していくべきものです。そこで6月から、全指導主事を対象に各教科・科目における本質的な問いの立て方と、ルーブリックに基づいた評価の方法に関する研修をオンライン上で実施しています。また、19年4月には、「学びの変革」を先進的に実践する広島県立広島叡智（えいち）学園中学校・高校が開校しており（P.18～19で紹介）、今後、同校での取り組みの成果を共有しながら、県全体で新学習指導要領で目指す教育を実現していきます。

私たち大人に必要なのは、タイムマシーンに乗る勇気です。未来の社会を想像し、そこで幸せに生きるために、学校は子どもたちに対して何をすべきかを考えてみるのです。私たちは、自分の知っている古い社会を前提に、「子どもは、学校は、こうあらねばならない」と決めつけることはもうやめて、自校の生徒がこれからの社会を生きていく上で必要な資質・能力とは何か、その育成のためにはどのような学びが必要なのかを本気で考えるべきです。

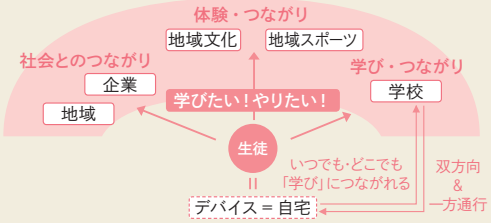
オンライン授業の広まりなど、学校の物理的なあり方は今後大きく変わっていくでしょう。しかし、学校そのものがなくなることはないはずです。なぜなら、新学習指導要領で目指す未来の学校は、人とのかかわりの中で学びを広げ、深める場だからです。そして、学校において、これからますます大切になるのは、生徒の学びの意欲を高め、多様な人と結びつけていく先生方の授業力だと思います。

これまでの学校教育のイメージ



これまでの学校教育は、生徒が物理的に学校に来て、教室に入って初めて学びが成立した。また、知識の伝達や問題提起といった学びのアクションは、教師が起点であることが多かった。

これからの学びのイメージ



これからの学校教育は、生徒一人ひとりの「これを学びたい」「これをしたい」という思いが起点となり、学校内外の場や人が結びつきながら展開されていく。学びの場も、従来の教室という場にとどまらなくなる。

※ ICT toolbox（https://ict-toolbox.com/）提供資料を基に編集部で作成。

これからの学校教育
実践事例

育成した資質・能力を生徒自身が汎用し、地域・世界とつながる教育活動を実践

広島県立広島叡智（えいち）学園中学校・高校

新しい教育モデルの構築を目指す「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を先導的に実践する学校として、2019年4月に、広島県立広島叡智学園中学校・高校が開校。新たな価値を創造する資質・能力の育成に取り組む同校の「今」と「これから」を伝える。

今、何ができるのか、次に、何をすべきなのかを知る

広島県立広島叡智学園中学校・高校は、2020年度に2期生が入学し、中学1・2年生が寮生活を送りながら、「『よりよい未来』を創造できるリーダーの育成」というビジョンの下、育成を目指す資質・能力を掲げて、その実現に向けた教育活動に取り組んでいる（**図1**）。全国から志願者が集まり、入試が高倍率になったことは、学校の理念が保護者の共感を呼んだからではないかと、福嶋一彦校長は語る。

「新型コロナウイルスの感染拡大は、未来の予測は困難であるという事実を、改めて私たちに突きつけましたが、本校が育成を目指す5つの資質・能力は、まさにそうした状況に向き合う際に必要な資質・能力だと思っています」

同校は、国際的な教育プログラムである国際バカロレア（IB）の中等教育プログラム（MYP 11～16歳対象）及びディプロマ・プログラム（DP 16～19歳対象）の候補校でもある。現在、中学1・2年生に、MYPの枠組みで、「言語と文学」「個人と社会」「理科」「数学」「デザイン」など、8教科群の授業を、学習指導要領に準拠する形で展開している。各教科では、評価の規準となる目標と、学びのプロセスの中で身につけるべきコミュニケーションスキルなどの「汎用スキル」が示され、教師、生徒双方がそれらを共有した上で授業に臨んでいる（**写真1**）。評価の工夫点について、MYPコーディネーターの古市吉洋先生は次のように語る。

図1　重点的に育成を目指す5つの資質・能力

- ◎様々な場面で活用できる知識・技能の深い理解
- ◎新しい価値を生み出す創造的・批判的思考力
- ◎異なる文化・価値観を持つ人々と協働する力
- ◎目標に向かってやり抜く力・自信
- ◎日本語でも英語でも議論・協働できる高い語学力

＊学校案内より抜粋。

写真1　単元の目標などは、教室の入り口に置かれたホワイトボード上にも掲示される。

「目標について、各授業や活動でどの程度達成できているのかを、振り返りを重ねることで可視化し、次の授業や活動につなげています。本校では、定期考査は行っておらず、評価は、レポートや作品制作、プロセスジャーナルなど、複数の課題への取り組みを通じて学年成績を出します（**写真2**）。それぞれの課題では、ルーブリックが示されるので、生徒は学習と評価を通して、今の自分が何ができて、何ができていないのか、次は何をすべきなのかを意識することができます。教師も、日々の授業で『お互いに意味のあるフィードバックを心がけて、コミュニケーションスキルを高めていこう』などと、生徒が汎用的なスキルと授業中の具体的な活動とを結びつけられるような声かけを行いながら、それら

を様々な場面で発揮できるような授業づくりに取り組んでいます」

育成された資質・能力を地域、世界で発揮する

資質・能力の育成において重要な役割を果たしているのが、「総合的な学習の時間」に相当する「未来創造科」だ。週約3単位時間が割り当てられ、生徒は自ら課題を設定し、課題解決に向けて協働的に取り組む。大島美紀教頭は、「未来創造科」での生徒の成長を次のように語る。

「『Well-being』『Environment』『Global justice』の3つのテーマに基づき、生徒は課題意識を持って課題解決に取り組みながら、探究していきます。昨年度は、インターンシップやインタビューなどを通して地域の方々とかかわりながら、様々な幸せの形に触れたり、生徒の目線で見つけた地域課題にどのように取り組むのかを考えて提案したりしました。自作のSDGsのポスターを掲示したり、海岸清掃を企画したり（写真3）と、授業で身につけた資質・能力を生かして、私たち教師の想像を超えた活動を実践しました。生徒は自分の価値観を揺さぶられながら、学びのサイクルを繰り返し、急速に変化する社会の中でも発揮することができる資質・能力を身につけています」

資質・能力を育むためには、学びを1つの教科、教室の中で完結させず、他教科と結びつけ、実社会に生かす授業づくりを教師が意識することが大切だと福嶋校長は語る。

「ある教科での学びで培った資質・能力を、ほかの教科や地域活動で発揮できるよう意識しながら、本校の教師は日々、生徒に接しています。ただ、生徒の教育活動を支えるのは教師だけではありません。寮生活や校外での活動にかかわる地域の方々も、本校の教育ビジョンに賛同し、生徒の学びに参画してくださっています。本校は、これまでの学校の枠組みを超えたラーニングコミュニティーを目指しているのです」

校長
福嶋一彦
ふくしま・かずひこ
教職歴36年。同校に赴任して1年目。

教頭
大島美紀
おおしま・みき
教職歴25年。同校に赴任して3年目。

MYPコーディネーター
古市吉洋
ふるいち・よしひろ
教職歴13年。同校に赴任して3年目。

広島県立広島叡智学園中学校・高校

◎「学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となることを目指す」をミッションに掲げ、瀬戸内海にある人口およそ7000人の大崎上島に開校。英語教育に力を入れるとともに、すべての教科で協働的なProject Based Learningを導入している。
◎設立　2019（平成31）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約40人（22年度には、高校1学年に20人の留学生を迎える）
◎URL　https://higa-s.jp/

写真2　生徒にレポートを課す際には、ルーブリックに照らし合わせて自分の考えをまとめることを、レポート作成上の留意点として示す。

写真3　有志の生徒による放課後活動の一環として、学校の近くの大串海岸の清掃活動を実施。大崎上島周辺の海のプラスチックやゴミ問題に意識を向けて次の行動へとつなげていく。

これからの学校教育
実践事例

様々なオンラインツールを活用し、日常を維持しながら、新しい教育を創る

広島県立広島国泰寺高校

大学、企業、国際機関、そして、県内の他校などと協働した高度な学びを追究する広島県立広島国泰寺高校。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業の中で、教育活動をどのように維持・発展させていったのだろうか。オンラインツールの活用に焦点をあて、同校の取り組みを紹介する。

新しい価値を創出する資質・能力を育む

文部科学省のWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（以下、WWL＊1）の拠点校である広島県立広島国泰寺高校は、平和をテーマにSDGs（＊2）と関連づけた活動を展開し、グローバルな視野と強い使命感を持って持続可能な社会の構築や国際社会の平和と発展に貢献するイノベーティブなグローバル人材の育成を目指している。同校が生徒への育成を目指す資質・能力として掲げているのが、「課題を発見する力」「課題を解決する力」「論理的・批判的思考に基づく表現力」の3つだが、佐藤隆吉（りゅうきち）校長は、「WWLの取り組みを通じて、知識・技能はもとより、言語・コミュニケーション能力、イノベーション、オープンマインド、グリットといった、変化の激しい社会を生き抜くために必要な資質・能力を生徒に育成していきたい」と語る。

「これからの社会では、幅広い知識を活用して新しい価値を生み出す力が求められますが、新しい価値の創出に至る道は平坦ではなく、多様な他者と協働して創意工夫を重ねることや、粘り強く取り組むことも不可欠です。WWLの取り組みを始めとする本校の教育活動の中で、生徒は文理両方を学び、そこで身につけた幅広い知識を探究活動などで実際に活用することで、課題発見と最適解の提案を、3年間の高校生活で経験します」（佐藤校長）

「総合的な探究の時間」などにおける校外の多様な人々との交流を取り入れた課題研究、そして、様々な社会課題に取り組む文理融合科目「グローバル平和探究」（普通科2学年対象）などでの学びを通じて、生徒は自分の興味・関心を、平和という切り口で深めていく。その成果は既に教師の目から見ても明らかで、「高校在学中に哲学を学びたい」「生命倫理の研究者にインタビューしようと思っている」などと、高校の教科・科目の枠を超えた学びへの意欲や具体的な計画を口にする生徒が増えてきている。

新しい時代の高校生像を体現する生徒が現れてきた矢先、同校も新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業を強いられた。そうした中でも、生徒の学びを継続・発展させる上で大きな役割を果たしたのが、オンラインツールだった。

オンラインツールの活用で学校の日常を維持する

同校のオンラインツールの活用の特徴は、「生徒がやるべきこと」を支援するツールと、「学校がやるべきこと」を支援するツールとに、役割を分けて活用したことだ。

臨時休業期間中の課題配信など、主に学習面で「生徒がやるべきこと」を支えたのは、2020年度より、オンライン上での学習基盤として県内の公立小・中学校、高校、特別支援学校に整備されたGoogleの教育支援クラウドサービス「G Suite for Education」だ。

同校では、臨時休業期間中のオンライン授業の時間割を作成したが、その際、生徒の主体性が発揮されるように配慮したと、主幹教諭の大川敬洋（たかひろ）先生は説明する。

「私たちは臨時休業を、それまで

＊1 将来、イノベーティブなグローバル人材を育成するため、高校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、高校生へより高度な学びを提供する仕組みを構築するとともに、テーマ等を通じた高校生国際会議の開催等や高校のアドバンスト・ラーニング・ネットワークの形成により、WWLコンソーシアムにおける拠点校を目指す事業。
＊2 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

の教育活動で生徒に育んできた主体性をさらに伸ばす好機だと考えました。そこで、授業の時数は本来の時数の75％ほどに抑えて終業時刻を早め、生徒が自分に必要な学習に取り組めるよう、生徒に時間を返しました。時間割は学年ごとに全クラス共通のものを作成し、配信する学習課題も教科内で同じ内容にすること

校長
佐藤隆吉
さとう・りゅうきち
教職歴38年。同校に赴任して3年目。

主幹教諭
大川敬洋
おおかわ・たかひろ
教職歴27年。同校に赴任して5年目。理科。

で、授業準備にかかる教師の負荷の軽減を図りました。そして、それによって生まれた時間は、オンライン授業を欠席した生徒への個別対応や、学習内容の理解が十分ではない生徒へのフォローなどに充て、生徒の自律的な学習を支えたのです」

オンラインツールの活用によって、臨時休業中もシラバス通りに授業を進めることができた同校だが、今後の課題は臨時休業中の学習内容の定着度を測り、個々の学習支援計画へとつなげていくことだと言う。

生徒のアセスメントデータの蓄積という「学校がやるべきこと」を支えたオンラインツールは、「Classi」（＊3）だ。同校では、Classiを、生徒のポートフォリオの蓄積、日々の学習時間や各種アンケート管理、そして保護者への連絡などに活用している。

「生徒にとってClassiは、自分の学習計画、学習時間を管理することを通じて、自律的に学習する力を養う場となっています。それに加えて、生徒たちはZoom（＊4）などのオンライン会議ツールを使って、外国人留学生との対話を『グローバル平和探究』の中で行うなど（**写真**）、世界を視野に入れた学習に主体的に取り組んでいます」（大川先生）

今回の臨時休業のような非日常が現れた時に、教育活動を止めないためには、複数のツールを持っておくことが重要だと、佐藤校長は語る。

「それまでの対面授業では積極的に発言することがなかった生徒が、オンライン授業で能動的な学習態度を見せてくれることがありました。資質・能力を発揮することができる環境や場面は生徒によって異なることを、私たちは学びました。多様なオンラインツールを活用したことで、学校としての日常を維持するだけでなく、新しい学びの場づくりの必要性に気づくことができました」

同校では今後も、オンライン上での学習プリントや実験動画などの蓄積を続け、授業では生徒同士の対話に時間をかけるなど、反転的な授業づくりにチャレンジしていきたいと考えている。

「ICTは、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力の育成、そして、学校でしかできない学びの保障を実現する上で欠かせないツールだと思っています」（佐藤校長）

写真 「グローバル平和探究」では、Zoomを活用して留学生と環境問題をテーマに意見交換を行った。世界の今をリアルタイムで知ることで、生徒のテーマへの意識も高まっていく。

図 臨時休業中のオンラインツール活用

❶自分自身の健康観察は、朝のＳＨＲまでに「Classi」の「アンケート」を利用して行う。
❷朝のＳＨＲや授業の出席確認は、「G Suite」の「Classroom」にログインして行う。
❸授業は、「G Suite」の「Classroom」の機能を使って出される教師の指示に沿って受ける。授業中の質問も可能。
❹放課後の学習時間は、毎日「Classi」の「学習記録（１日の振り返り）」に入力。担任が生徒の学習の進捗状況や心身の状態を把握する。

＊学校資料を基に編集部で作成。

広島県立広島国泰寺高校

◎広島県初の旧制中学である広島県中学校として設立。その後、広島県広島中学校、広島県第一中学校、広島県立鯉城（りじょう）高校などと名称を変えながら、140年を超える歴史を刻む。アメリカやイギリスの高校との姉妹校提携を中心とした国際交流にも力を入れている。
◎**設立** 1877（明治10）年
◎**形態** 全日制・定時制／普通科・普通科理数コース／共学
◎**生徒数** 1学年約280人
◎**2020年度入試合格実績（現役のみ）** 国公立大は、筑波大、大阪大、広島大、九州大などに159人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ496人が合格。
◎**URL** http://www.kokutaiji-h.hiroshima-c.ed.jp/

＊3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。
＊4 PC・スマートフォン・タブレットで通話に参加できるビデオ通話アプリ／サービス。

想定外の事態における経験や気づきを、教育の「これから」につなげる

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちにとって、まさに予測困難な事態であった。
教師、生徒はこの状況下での経験や気づきを、これからの教育活動や学びに
どのようにつなげていけばよいのだろうか。

「ミニマムの資質・能力」を追究しながら、教育活動の見直しに取り組む

北海道旭川東高校 松井恵一 × 福井県・私立福井南高校 浅井佑記範（ゆきのり）

これまでの枠組みの中では対応ができない状況を経験した生徒、教師が
ともに学び合う存在として語り合った時、教育活動の「これから」が見えてくる――With/After コロナの
学校のあり方について、2人の教師との対話を通じて考える。

「教えてくれる先生」から「ともに考える先生」へ

柏木　新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、生徒も教師も先が見通せない日々を経験しました。しかし、そうした状況の中で、自分のあり方や生き方を深く考え、主体性を発揮して教科学習や探究学習に取り組んだ生徒がいたことを、私たちは全国の先生方から伺ってきました。P.8～11では、3人の高校生が臨時休業中の気づきを語っていますが、臨時休業を成長の機会にすることができた生徒は先生方の学校にもいたのではないでしょうか。

松井　それまでのような学校生活が送れなくなったことで、「今」の大切さに気がついた生徒は少なからずいます。生徒の気づきを理解する上で重要なことは、「今」というものの捉え方が変わったことです。それまでの「今」は、「計画通りの未来につながる今」でしたが、臨時休業という予測困難な事態を経験して、「計画通りとは限らない未来につながる今」へと、生徒の認識が変化したのだと思います。ただ、もしかすると生徒たちは以前から、未来は計画通りにはいかないものだと感じていたのに、私たち教師が「これまで通りの社会」を前提に教育を行っていたことに、生徒は内心、違和感を覚えていたのかもしれません。

浅井　私たち教師は、生徒に「未来は予測困難」と言いながら、実際には「先生の言うことを聞いていれば大丈夫」といった態度で生徒に接してきた気がします。臨時休業という思わぬ事態の中で自立し始めた生徒を見ると、以前から私たちに対して疑問を抱いていたのかもしれませんね。今回の臨時休業は、私たち教師にとって、自分たちの経験や古い枠組みをあてはめるだけではやっていけない社会になったのだと気づかせてくれる機会になったと思います。広島県の平川教育長の言葉（P.16～17）の通り、教師が正解を知っている問いに生徒を向き合わせる教育では不十分なのです。それに、そもそも教師だけが正解を知っている問いなんて、生徒にとっても、つまらないですよね。教師も答えが分からない

問いだから、生徒は前のめりに考えられるし、「先生も一緒に考えましょう！」と、協働的な姿勢で問いに向き合おうとするのだと思います。

松井 分からない問いにともに向き合う時、生徒と教師は対等な存在です。臨時休業を経験した生徒たちは、教師から答えを教えてもらうことではなく、答えが分からない問いについて、教師と語り合い、考えることが大切なのだと、気がついたのではないでしょうか。

北海道旭川東高校　2学年主任
松井恵一　まつい・けいいち
教職歴23年。同校に赴任して17年目。地理歴史・公民科。

北海道旭川東高校
◎学校標語「シマレ　ガンバレ」「挙校大和」を掲げ、校訓「生をよろこべ　矩にしたがえ　全力をつくせ」の下、品性と礼節を重んじながら自由を謳歌する校風を誇る。卒業生や地域の人材と連携した探究学習に力を入れる。「地域医療を支える人づくりプロジェクト」の医進類型指定校。
◎設立　1903（明治36）年
◎形態　全日制・定時制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、旭川医科大、北海道大、東北大、東京工業大、京都大などに152人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ321人が合格。
◎URL　http://www.ah.hokkaido-c.ed.jp/

福井県・私立福井南高校　進学指導部長
浅井佑記範　あさい・ゆきのり
教職歴8年。同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科。

福井県・私立福井南高校
◎福井専修学校を母体に、1995年全国の私学で初めて総合学科を設置して開校。「信義・友愛」を建学の精神とし、物事を正しく判断し実行できる能力を備えた個性豊かな人材の育成を目指す。普通教育と産業教育の均衡を図りながら、体験学習や情操教育など、多様な教育活動を展開。ニュージーランドの姉妹校への長期・短期留学を行う。
◎設立　1995（平成7）年
◎形態　定時制／総合学科／共学
◎生徒数　1学年約80人
◎2020年度進路実績（現役のみ）
4年制大は、福井県立大、桜美林大、東京農業大などに8人が合格。短大、専門学校進学36人。就職33人。
◎URL　https://www.fukuiminami.ed.jp

自分のあり方を考える問いを与えていたか？

柏木 自分の進路を考えるためにオンラインツールを活用して、普段は出会えない職業人や研究者など、学校という枠を超えてつながり、知見を広げ、進路観を深めた生徒もいます。自宅にいながら、社会につながろうという意欲を持ち、オンラインインタビューなどを実際に試みる行動力に驚きました（P.8～11）。

松井 高校3年生だから受験のことだけを考えているはずだというのは、大人の誤解だと思います。本校の3年生を見ても、成績のことだけでなく、社会の中で自分はどんな存在でありたいのかを真剣に考えている生徒が少なくありません。

浅井 漠然と進路を決めていたけれど、想定外の事態の中で自分を見つめ直し、本当の目標が見つかった生徒もいます。社会のあたり前が変わったことで、成績やイメージだけで生き方を決める進路選択から脱却したのです。そうした生徒が増えていけば、私たち教師は、100人の生徒の100通りの進路選択に向き合うことが求められます。楽しみですが、進路指導の力量が問われます。

松井 教師が「高校生はこうあるべきだ」と、生徒に最適解として道を示すのではなく、生徒自身に「君はどうありたいのか」と問い、自分で納得解にたどり着かせることが求められます。生徒が「自分はどうありたいのか」を考える問いを立てる際の材料として、生徒が自身の行動や考えを振り返ってきたポートフォリオを教師が活用することが大切だと思います。

浅井 生徒が「自分はどうありたいのか」を考える問いは、進路面談のような場だけではなく、教科の授業においても求められますよね。教科の知識と見方・考え方を土台として、「自分はどうありたいのか」を問い続けている学校の1つのモデルが、広島県立広島叡智（えいち）学園中学校・高校の取り組み（P.18～19）なのでしょう。

松井 面談で生徒に、「将来、何をしたいの？」と問うことがありますが、実はそれは、問いではなく、単なる確認だったのかもしれません。

VIEW21編集部
統括責任者
柏木 崇　かしわぎ・たかし

生徒が自分を深められるような問い、例えば、「3つの学部に進学できるとしたらどこがいい？」「同時に3つの職業に就けるならどんな職業に就きたい？」といった聞き方もできるのではないかと思いました。

浅井　そのように生徒とのかかわり方を顧みて、指導のあたり前を見直すことが、これからの教師には求められているのだと思います。

ミニマムな力を鍵に自校の教育活動を見直す

柏木　臨時休業中、学習面や進路面で主体的に活動する生徒の姿を目にしたことで、先生方は予測困難な社会で求められる資質・能力とはどのようなものか、そうした資質・能力がなぜ重要なのかを改めて深く考えたことと思います。では、先生方が目にした生徒の変化・成長を、今後の教育活動にどのようにつなげていけばよいのでしょうか。

浅井　今までの教育活動が、予測困難な未来に向き合う力を育むものであったか、生徒に自分はどうありたいのかを問いかけるものであったかといった視点で教育活動を見直したいですね。そのためには、生徒が得た気づきや抱いた疑問を、丁寧に聞き取ることがとても大切です。

松井　自分たちの教育活動は、これからの社会で必要な資質・能力の育成に資するものなのか、もしもズレがあるとしたら、それをどう修正するのか、このままの方針でよいと判断した場合、さらに注力するものは何かを考えることで、今回の経験が価値のあるものになると思います。

柏木　では、そうした教育活動の見直しは、どのように進めていくとよいのでしょうか。まず、学校として育成を目指す資質・能力を校内で共有することは不可欠かと思います。その際に大切なことはありますか。

松井　学校としてこれだけは生徒に保障する、ミニマムな指導を明確にすることだと思います。生徒にあれもこれもと、どこまでも求め、与えるのではなく、どのような社会になるか予測できないからこそ、学校としてここだけは必要だというものを言語化し、その上で生徒一人ひとりの興味・関心や志望に応じ、主体的な学びを支援することが重要です。

浅井　学校として生徒に保障するミニマムな資質・能力とその育成のための教育活動は、生徒と一緒に考えていきたいですね。本校では例年、生徒が学校の課題や展望を話し合い、理事長、校長に提言する場があります。自分たちが生きる未来と、こうありたいという生き方を踏まえて、高校時代にこんな力をつけたい、だからこんな学校であってほしいと、生徒が福井南高校生として主体的にミニマムな資質・能力を考える場であり、本校の生徒にとって欠かすことができない教育活動になっています。

松井　学校として生徒に保障するミニマムな資質・能力を考える際にも、ポートフォリオを通した詳細な生徒把握が欠かせないと思います。臨時休業中、生徒のポートフォリオにじっくり目を通す時間をつくったのですが、そこで気づいた生徒の興味・関心の変遷、深化を面談で生徒に話していく中で、生徒自身が私の気づきをヒントに、進路の選択肢を広げたり、今自分に必要とされている学習を言語化したりするケースが多く見られました。教師が生徒のことを熟知して初めて、ミニマムな資質・能力の設定も生徒が納得できるものになり、また、自分のあり方に気づく問いかけを生徒に投げかけられるようになるのだと思います。

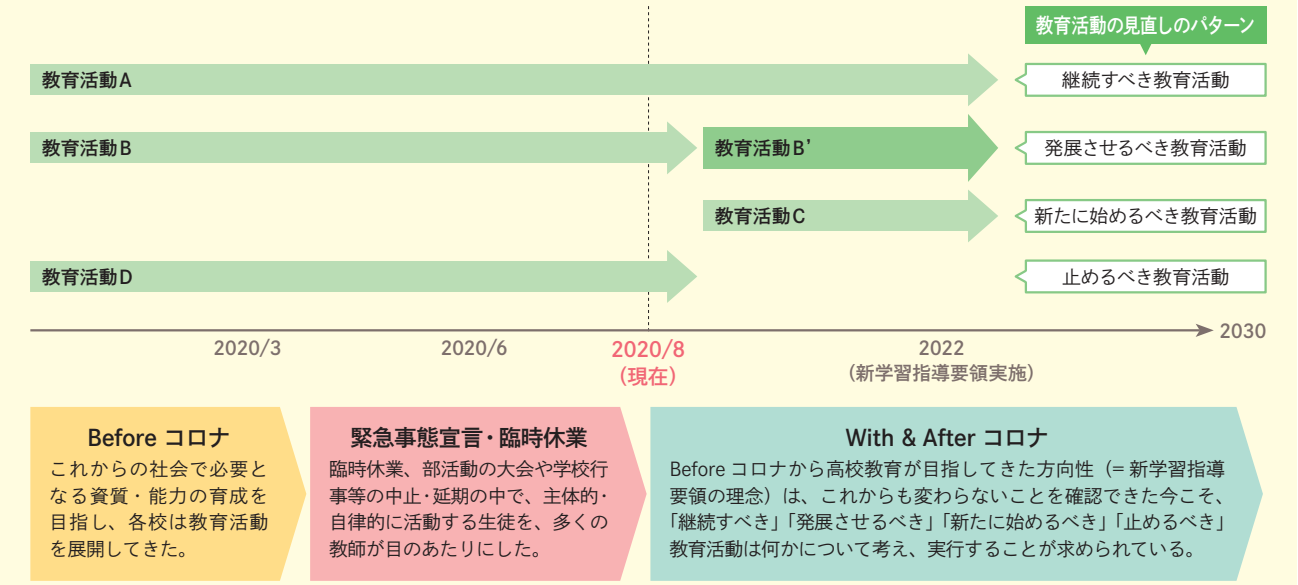
浅井　想定外の事態においても、自分ならではの感性を働かせて、学びや生活をより豊かなものにしようと行動した生徒たちは、新学習指導要領を通じて育成を目指す生徒の姿そのものでした。つまり、私たちがこれから実現すべき教育は、Beforeコロナの教育と決して非連続なものではないどころか、その必要性がより高まったと言えます。ただ、今回の事態を通じて、私たちも多くの気づきを得ました。新学習指導要領の実施まで2年を切った今、これまでの取り組みは肯定しつつも、改めて今回の事態を踏まえ、カリキュラム・マネジメントに基づいた教育活動の不断の見直しは必要でしょう。

不安を吐露できる場は生徒だけでなく、教師にも必要

柏木　教育活動の見直しを進める際、どのようなことから検証を始めると、議論が具体化・活性化するでしょうか。

浅井　オンラインツールの活用の視点における教育活動の見直しは、議

図 臨時休業という想定外の事態を契機に教育活動を見直していくイメージ



学校としてこれだけは生徒に保障する、ミニマムな資質・能力を明確にすることで、教育活動の見直しは地に足のついたものになります。そして、ミニマムな資質・能力を考える際には、学校だけでは育成が困難な、保護者や地域の力を借りながら育成を目指すべき資質・能力はどのようなものなのかも、見極めておく必要があると思います。（松井先生）

教育活動を見直す際、判断のよりどころの１つとなるのが、これまで蓄積してきたポートフォリオです。生徒の活動の履歴やそこでの変化・成長の軌跡がストックできているので、一つひとつの教育活動についても、継続すべきか否か、あるいはそこで生徒にどんなかかわりをすべきか、教師視点で今のあり方を判断する材料となるはずです。（浅井先生）

論が具体化しやすいと思います。本校では、教育活動の効率化と「3密」の回避を目的に、生徒会選挙などの学校行事にオンラインツールを導入しました。また、入学後、先輩たちと交流する機会に恵まれない1年生のために、有志の生徒がオンラインでの異学年交流会を提案したことで、新しい形の教育活動が今年度スタートしました。まさに、生徒目線での問題の発見と、解決策の提案だったわけですが、オンライン上の生徒同士のコミュニケーションの様子を見たベテラン教師が、乗り気ではなかったオンライン授業に、その後挑戦し始めたのです。生徒が考え、悩み、挑み、喜ぶ様子は、教師を強く動かしますし、その瞬間、私たちは実は生徒から学んでいるのです。私たちが一番大切にしている生徒の存在を、組織が変わる原動力につなげていく上で、オンラインツールには大きな可能性があります。

松井 卒業生を招いた進路講演会など、生徒が進路意識を高められる行事を、限られた時間の中で「3密」を回避しながら拡充・継続していくために、オンラインツールは有効に利用したいですね。ただ、年度途中の教育活動の見直しは、私たちにとってもチャレンジングなことですから、「やってみて、生徒はこんな反応だった」「ここが困った」などと、教育活動の見直しの成果や課題を教師間で率直に語れる場が不可欠です。自分たちの喜びや不安を共有することで、次に進んでいく原動力がさらに高まるでしょう。

浅井 変化の過程での不安を語り合うことは、生徒にも教師にも必要ですよね。むしろ、教師にこそ、これまではそういった場が足りなかったのかもしれません。予測困難な社会を生きる者として、私たちにも不安を吐露できる場は必要です。

松井 先行きが分からないからこそ、何が正解かという答えよりも、何が不安かを吐露できる場所や、つながりを校内につくっていきたいですね。教師も1人で不安を抱えたままだと、どうしても自分の過去の経験だけで考え、生徒のことを「これも、あれも不足している」とネガティブに見てしまいます。しかし、教師が協働的な環境にいれば、「こんなことも、あんなこともできるんじゃないか」とポジティブ思考で生徒を評価できるはずです。

臨時休業の経験を通じて見つめ直した、自校の教育活動の「これから」

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、学校はどのような指針の下、生徒の学びを支援したのか。そして、生徒の成長をどのように捉え、今後の教育活動に生かそうとしたのか。教育活動の再構築に向けて動き出した学校の取り組みを紹介する。

臨時休業中の生徒の成長を、グランドデザインの見直しにつなげる

長野県蘇南高校

長野県蘇南高校は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、オンライン授業を実施するとともに、探究学習にも力を入れ、学校再開後は、臨時休業中の学びの成果を見取るために、評価手法を開発した。そして、主体的に学びを進めていた生徒たちの姿を受け、育成を目指す資質・能力の再定義に着手しようとしている。

開拓者精神の理念を基にグランドデザインを策定

長野県蘇南高校が位置する南木曽町は、県南西部にあり、かつて林業が盛んな地域だった。しかし、産業構造は変化し続け、地域はその中で自らの特色を模索している。そうした町にある高校としての教育方針を、小川幸司校長は次のように語る。

「本校を卒業した後に地域を出るにしても、この地域に残るにしても、生徒には未来に向けて挑戦し続ける姿勢が欠かせません。本校の学校教育目標『開拓者精神の具現化』は、『未来を読んで、今をどう生きるかを考える』ことであり、新学習指導要領が目指す方向性とも重なると捉えています」

そうした教育方針の下、学校教育目標の実現に向けたグランドデザインを2019年度に策定した。普通科、商業科、電気科を有していた流れをくむ総合学科の同校には、卒業後の進路として就職を志す生徒もいれば、国公立大学進学を目指す生徒もおり、希望進路も学力も多様な生徒が同じ校舎で学んでいる。そうした生徒一人ひとりへの育成を目指す資質・能力を、「自分を知る」「基本的生活習慣の確立」「課題解決力」「思考・判断・表現力」と定めた。

加えて、同校には、小規模の小・中学校で過ごし、固定化された人間関係の中で育ってきた生徒が多く、岐阜県から越境入学してくる生徒などと新しい人間関係を構築することになるため、「コミュニケーション力」と「協働性」も、育成を目指す資質・能力として掲げた（図1）。

探究学習を通じて学びの意味を考えさせる

グランドデザインに基づき、補習や個別指導などの手厚い学習指導を行ってきた同校の教師は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて臨時休業となることに、大きな不安を感じた。進路指導主事の楯和弘先生は、次のように語る。

「本校は学習支援において、生徒の学力に応じた個別最適化に力を入れるとともに、コミュニケーション

校長
小川幸司
おがわ・こうじ
教職歴32年。同校に赴任して1年目。

教務主任
西澤博樹
にしざわ・ひろき
教職歴31年。同校に赴任して4年目。

進路指導主事
楯 和弘
たて・かずひろ
教職歴21年。同校に赴任して4年目。

総合学科主任・1学年主任
市瀬利之
いちのせ・としゆき
教職歴20年。同校に赴任して5年目。

長野県蘇南高校

◎2019年度、「開拓者精神」の理念達成に向けて、グランドデザインを構築。多様な生徒が入学し、2年次以降は、「文理系列」「経営ビジネス系列」「ものづくり系列」の3系列のいずれかを選択し、専門的に学ぶ。
◎設立　1953（昭和28）年
◎形態　全日制／総合学科／共学
◎生徒数　1学年約70人
◎2020年度進路実績（現役のみ）国公立大は、群馬県立女子大、新潟県立大、福井県立大、都留文科大、長野大に5人が合格。私立大は、麗澤大、中京大、大谷大などに延べ16人が合格。短大、専門学校進学28人。就職22人。
◎URL　https://www.nagano-c.ed.jp/sonan-hs/

力と協働性を育むため、授業に対話を多く取り入れていました。臨時休業によって様々な制約が発生する中、どのように教育活動を推進していくべきか、手探りの毎日でした」

4月に小川校長が着任後、家庭のICT環境を調査すると、パソコンを所有していない家庭はあったものの、スマートフォンは全生徒が保有していた。そこで、準備が整った教科・科目から、オンライン会議ツールや動画配信サイトを利用したオンライン授業を始めた。同時に、教育目標に掲げた資質・能力を育成するために、どのような教育活動を重視すべきか、教師間で対話を重ねた。

「学校に来られないからこそ、生徒には『何のために学ぶのか』『学んだことを将来にどう生かすのか』といったことをじっくり考えてほしいと思いました。そこで、自己のあり方・生き方を考えることにつながる探究学習への取り組みを優先し、教科の授業でも、知識の習得だけでなく、その教科を学ぶ意義の理解と、生徒自身のこれからの学習について考えるための振り返りを重視しようと話しました」（小川校長）

臨時休業中に実施した探究学習の内容は、次の通りだ。

1年生の「産業社会と人間」では、例年通り、「自分史」の作成に向けて、家族にインタビューし、その内容をまとめる「自分史カルテ」に取り組ませた。

2・3年生は、それぞれ1・2年次の「総合的な探究（学習）の時間」で行っていたグループ活動を、オンライン会議ツールを利用して継続させた。加えて、新型コロナウイルスも題材にした。総合学科主任の市瀬（いちのせ）利之先生は次のように説明する。

「新型コロナウイルスに関するニュースを記録したり、感染拡大によって地域にどのような変化があり、その中で自分ができることは何かを考えたりする課題を出しました。こうした事態であるからこそ、社会の一員としての自覚を促し、視野を広げ、生徒が学びの意味を考えることを期待しました」

図1　長野県蘇南高校のグランドデザイン

＊学校資料をそのまま掲載。

それまでの探究学習の成果が休業中の学習姿勢に表れた

臨時休業の開始当初は、自宅での学習に戸惑っていた生徒だが、次第に探究学習やオンライン授業にしっかり取り組むようになっていった。市瀬先生は、自律的に学ぶ生徒を見て、1年次から探究学習に取り組ませてきた意義を改めて感じた。

「学校で他者とかかわり合いながら学びを進めてきた生徒が、学校から離れて自分で学習を進められるのか心配でしたが、それは杞憂でした。1年次に『自分史』を見せ合ったり、グループで対話したりする自己開示を通じて、主体的に考え、発信する姿勢が身についていたのだと思います」（市瀬先生）

生徒の学びは、学校の枠を超えていった。小川校長は、臨時休業中の自主的な学びを表彰する「ブリコラージュ（＊1）賞」を設けたところ、全校生徒の約4割が応募した。

「自由な発想で自分にできることを考えてほしいと思い、生徒に『今しかできない学びに挑戦しよう』と呼びかけました。すると、同じ中学校出身の1年生同士で故郷の美しい春を収めた動画を作成したり、自分と他者の関係を見つめる小説を書く生徒がいたりと、思い思いに自らの学びを広げていました」（小川校長）

全校生徒による主体的な取り組みもあった。それは、教師に贈られた「蘇南高校 先生方へ」と題したアルバムだ。「臨時休業中に先生方が私たちにしてくださったことに感謝を伝えよう」と、3年生有志の呼びかけに全校生徒が賛同し、学校再開後に取り組みたいこと、休業中の気持ちや教師への感謝の言葉など、一人ひとりがメッセージを綴ったのだ。職員会議でそれが読み上げられると職員室は大きな感動に包まれた。

臨時休業中の学びを自己評価させ、意味づける

臨時休業中の生徒の成長をどのように見取るのかについても、教師間で議論した。教務主任の西澤博樹先生は、次のように振り返る。

「臨時休業中に出した課題で評価しようとしましたが、生徒に電話をしたり、分散登校の際に声をかけたりして提出を促した課題は、やらされ感を含んだものです。また、学校再開後すぐに定期考査を実施することも検討しましたが、知識の習得の確認に重きを置く考査も、臨時休業中に育んだ資質・能力を評価する方法としてふさわしくないのではないかという意見が出ました」

議論の結果、生徒が自身の学びを客観的に振り返る「振り返りシート」を、学校再開後に教科・科目ごとに記入させ、評価に用いることにした（**図2**）。全教科・科目共通の評価項目は、「単元の意義の理解度」「自分自身の取り組み」で、それぞれ4段階での自己評価と評価の理由を記入させ、ほかに各教科・科目に応じた項目も設けた。また、全教科・科目の振り返りシートに、同シートの記入内容が成績評価の参考にされることを明記した。さらに、多様な強みを持つ生徒一人ひとりについて、育成したい資質・能力の「ミニマム」を考える機会とすることも重視した。

「どのように課題に取り組み、何を学んだのかを、自身で振り返ることは、生徒の自己肯定感の向上につながります。私は、振り返りシート

図2 「コミュニケーション英語Ⅲ」の「振り返りシート」

振り返りシート

科目名 コミュニケーション英語Ⅲ （ b ）講座

記入日 月 日 年 組 番 氏名

この振り返りシートは、休校期間中の自分自身の取り組みを振り返り、自己の変化に気づくためのものです。成績評価の参考とするので、しっかりと記入をして下さい。

1 単元の意義について

1-1 今回の単元の意義を理解することができましたか？その理由も記入して下さい。

単元	意義
①「語彙力の強化」	①知っている英単語をつぶし、語彙力を強化する。
②英語の読み方の習得	②主張＆複数の具体例＆再主張の流れを把握する。

自己評価 4 できた 3 まあできた 2 あまりできなかった 1 できなかった

理由

2 自分自身の取り組みについて

2-1 課題に取り組む中でどんなところに苦労しましたか？

2-2 課題に取り組む中でどんなところを工夫しましたか？

2-3 課題に取り組んで、分かったことやできるようになったことを記入して下さい。

2-4 課題に前向きに取り組むことができましたか？この課題を通してこれからの学習に対しどのような点が役立つとあなたは思いますか。記入してください。

自己評価 4 できた 3 まあできた 2 あまりできなかった 1 できなかった

＊学校資料をそのまま掲載。

＊1 文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースが『野生の思考』で表した概念であり、「寄せ集めて自分で作る」「ものを自分で修繕する」ことを意味する。

の最後に『コロナ禍で学んだことが自分の未来にどう役立ちそうか、もしくはこれからの学習にどう役立ちそうか』についての考えを書く欄を設けました。それを基に、一人ひとりに育成したい資質・能力の具体的なありようを生徒とともに考え、丁寧な指導をしていこうと考えています。また、学習の振り返りは、平時にも必要です。各教科・科目で振り返りシートの改善を重ね、生徒の主体的な学習を支援するための評価ツールとして、今後も活用していきます」（西澤先生）

教師間の対話の積み重ねが学校組織を強くした

同校が様々な取り組みに挑戦できた背景には、教師の対話の積み重ねがあった。それまでも、各分掌の主任から成る「主任連絡会」を週1回実施し、情報を共有してきた。臨時休業中は、学年主任も同会の参加者に加えて「拡大主任連絡会」とし、毎朝、校長室でその日に取り組む仕事の原案をつくり、ワーキング・グループ、分掌会議、職員会議の順に対話を進めた。

「4月には、1日かけて構築した内容が、感染拡大の状況によってその日の夕方には白紙になったことが何度もありました。しかし、先の見えない中で私たちが前に進めたのは、『対話による集合知』があったからです。対話で決まったことが覆ってしまうと、その対話は無駄だったように思えますが、生徒や教育への思いを共有したことは決して無駄ではなく、議論した内容が1週間後に役に立ったことが何度もありました。右往左往しながらも教師間で対話を重ねたことは、学校組織を強くしたと感じています」（楯先生）

小川校長は、緊急時こそ対話型の能動的な組織が必要だと強調する。

「上意下達の組織では、意思決定は迅速ですが、学校を実際に動かすのは、生徒に近い教諭たちです。上位者である管理職が対話の原案をつくるにしても、担任の納得感が得られなければ、実践にはつながりにくいと考えます。本校では、私も含めた全教師で学校全体の方針を決め、活動内容を考え、実践状況を共有する対話を続けたことが、臨機応変な対応につながったのだと思います」（小川校長）

生徒の成長を教育活動の見直しに生かす

今年7月の豪雨の際にも、数日間の休業を余儀なくされた同校だが、7月中旬の文化祭に向けて、生徒はSNSで連絡を取り合いながら着実に準備を進めた。文化祭のテーマは、「青春と一瞬～想像以上の自分へ～」。臨時休業中に取り組んだ探究学習の成果を展示（**写真**）し、小川校長から「ブリコラージュ賞」の表彰があった。

生徒の成長は、数値にも表れている。「コロナ禍における『生徒の気づきと学びを最大化する』プロジェクト」（＊2）が5月中旬と6月上旬に行ったオンライン学習に関する生徒アンケートを実施し、臨時休業中の生徒の状況を把握した。すると、同校の生徒の「困難に向かう力」「計画性」の肯定率が、2回目の調査で大きく伸びていた。また、「オンライン授業でも、教室と同じように授業を受けている感覚を持ち、友人ともコミュニケーションが取れている」ことへの肯定率も伸びていた。

そうした生徒の変容を踏まえ、育成を目指す資質・能力を、教師だけではなく、地域の人々や生徒と一緒に考え、さらに具体化して、自己評価できる仕組みを築いていきたいと、小川校長は考えている。

「世界全体を巻き込んだコロナ禍に直面し、教師も生徒も、真に社会に貢献できる思考力・判断力・表現力とは何かを考えたはずです。それをより具体的に言語化することが重要であり、どのような教育活動で育成していくのか、教育のリデザインが必要です。次年度に向けて、教師がアイデアを出し合いながら、育成を目指す資質・能力をアセスメントと連動させる評価改革も含め、本校の学びを再構築していきます」

写真　7月中旬に2日間、在校生のみで文化祭が行われた。臨時休業中に取り組んだ「産業社会と人間」や「総合的な探究（学習）の時間」での探究学習の成果を展示。生徒は互いの作品に見入り、所定の用紙に熱心に感想を記入していた。

＊2　臨時休業中の生徒の気づきや学びを最大化することを目指し、全国56校から主に中学校・高校の教師が参画し、互いの知恵を持ち寄りながら、毎週対話を重ねているプロジェクト。

本誌特集の「これから」

コロナ禍における教師や生徒の気づきや学びを踏まえて新学習指導要領を捉え直し、教育の「これから」を考えるシリーズ特集を、今号を起点に展開していきます

新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴う臨時休業を始めとした想定外の事態の中、自分ならではの感性を働かせて、学びや生活をより豊かなものにしようと行動した生徒たちは、新学習指導要領を通じて育成を目指す生徒の姿そのものだった。つまり、学校現場がこれから実現すべき教育は、既に新学習指導要領を踏まえて取り組んできたBeforeコロナの教育と決して非連続なものではないことを、多くの教師が強く実感したのではないだろうか。だからこそ、今回の事態を契機に、Beforeコロナの取り組みを肯定しつつも、その実施まで2年を切った新学習指導要領の理念を確実に実現するために、カリキュラム・マネジメントに基づいた教育活動の不断の見直しが必要であると改めて言えるだろう。

そこで、本誌特集では、今号を起点に、「教育の『これから』を考える」シリーズを次号以降展開していく（**右表**）。今号（8月号）では、新学習指導要領の目的である「何ができるようになるか」という観点、すなわち、育成を目指す「資質・能力」とは何か、それがどういった場面で発揮されたり、育まれたりするのかを、高校生や社会人、そして現

月号	テーマ
8月号	【総論】教育の「これから」を考える－「今」を見つめた未来の創り手たち－
10月号	【実践編①】高校教育の「今」と「これから」をつなぐ授業について考える（仮）
12月号	【実践編②】高校教育の「今」と「これから」をつなぐ学習評価について考える（仮）
2月号	【実践編③】高校教育の「今」と「これから」をつなぐ特別活動・部活動について考える（仮）

図　新学習指導要領の方向性と本誌特集の今後の発信テーマとの対応

＊中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を基に編集部で作成。

場の教師たちの気づきや学びを通して改めて捉え直した。10月号以降は、そうした資質・能力を育むために、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という観点、すなわち、新学習指導要領で示された教育内容や授業・指導改善のあり方などの実践面について、コロナ禍における教師の実践や生徒の成長・変容を通じて捉え直していく。

「教育の『これから』を考える」シリーズを通して発信する情報を、各校の「これから」の学校づくりに役立てていただきたい。

イベントのご案内

VIEW21 PRESENTS

自校の教師同士の対話を通じて、教育の「これから」を考える オンライン・ワークショップ

2020年 9月18日(金) オンラインで 開催！

誰もが答えが１つではない問いに向き合うことが求められている時代、先生方にとっても、互いの考えや思いを共有する重要性が高まっています。今号の特集では、新学習指導要領の実施まで２年を切った今、改めて今回の想定外の事態を踏まえ、自校の教育の「これから」について考えるべきだといった声が現場の先生から上がりましたが、そうした取り組みには、自校の先生同士が考えや思いを率直に語り合う場が欠かせません。そこで、「対話による集合知」をもって予測困難だった今に立ち向かい、教育活動を推進し続けた長野県蘇南（そなん）高校（本号P.26～29）の小川幸司校長と編集部のファシリテーションの下、自校の教師同士で、自校の教育の「これから」について考え、語り合うオンライン・ワークショップを開催します。

本号 P.32～33 のワークシートを用いながら、自校の教師同士の対話を通じて、自校の教育の「これから」を考えます

講師・ファシリテーター

長野県蘇南高校
校長
小川幸司

◎長野県教育委員会事務局・学びの改革支援課を経て、４月より蘇南高校校長。専門は世界史。中央教育審議会教育課程部会の社会・地理歴史・公民ワーキンググループの専門委員を務める。著書『世界史との対話』全３巻（地歴社）など。

ワークショップの主な内容

① 8月号の特集について解説

蘇南高校の取り組みを中心に、８月号の特集について、小川校長と編集部が解説

② 自校の教師同士で対話

「対話による集合知」をもって教育活動を推進し続けた蘇南高校の小川校長と編集部のファシリテーションの下、本号 P.32～33 掲載のワークシートを用いた、自校の教師同士による対話を通じて、自校の教育の「これから」を考える

③ 質疑応答、議論内容共有

記事についての質疑応答と、各校の対話の内容の共有を行う

日時	2020 年9月 18 日（金）15 時 00 分 ～ 17 時 00 分
形式	オンライン（ライブ配信） 申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します
参加申し込み方法・締め切り	QR コードから登録してください 参加申し込みは 2020 年 9 月 15 日（火）まで
参加費	無料

本号 P.32～33 のワークシートにお取り組みの上、自校の先生方と一緒に（２人以上）ご参加ください

教師の 自校の 社会の 生徒の

NEXTを語り合うワークシート

『VIEW21』高校版
2020年8月号特集

テーマ

自校の教育の「これから」を考える

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちに予測困難な社会であることを痛感させたが、そうした中、自身の持つ資質・能力を発揮し、成長した生徒の姿を、多くの教師が目のあたりにした。今回の事態を自校の教育の「これから」につなげるためのツールとして、本ワークシートを活用いただきたい。

ワークシートの使い方

本ワークシートを複写、またはダウンロードし、各自が、「①自校で育成を目指す資質・能力」を踏まえて「②臨時休業を始めとする想定外の事態の中での気づき」「③教育活動の見直し」の欄に記入した上で集まる。それぞれの教師が見聞きした生徒の様子と、それらに関係する教育活動についての考えを共有し、意見を交わすことを通じて、自校の教育の「これから」を参加者全員で見いだしていく。

1 自校で育成を目指す資質・能力

※自校で育成を目指す資質・能力を今後検討する場合は、学年団や分掌などで重視している資質・能力を記入

2 臨時休業を始めとする想定外の事態の中での気づき

A 生徒が発揮していた資質・能力と、そう思う背景となった生徒のエピソード

B 生徒が十分に発揮できなかった資質・能力と、そう思う背景となった生徒のエピソード

でご覧ください。

ダウンロード

ファシリテーター役の先生へ

教育活動の見直しには、育成を目指す資質・能力について、「現状では生徒にはまだ十分育まれていないものはどれか」という観点だけでなく、「既に生徒が発揮しているものはどれか」といった観点が必要です。しかし、私たち大人の生徒を見る目は、ともすると不足の部分ばかりに向きがち。本誌P.8～11では、臨時休業を経て生まれた、学びや学校に対する意識の変化を3人の高校生が語っていますが、そのインタビュー記事を読んでから参加者に対話の場に参加してもらえると、「自校にもこんな意識の変化が見られた生徒がいた」などと、生徒の見取りがより豊かになり、生徒の現状を広い視点で捉えた上での対話の実現が期待できます。

オンラインワークショップのご案内

本ワークシートを活用した自校の教師同士による対話を通じて、教育の「これから」を考えるオンラインワークショップを開催します。詳しくはP.31をご覧ください。

3 教育活動の見直し

A ❷で挙げた資質・能力の育成のために、継続・発展させるべき教育活動
※継続させるべき理由や発展させるべき点も含めて記入

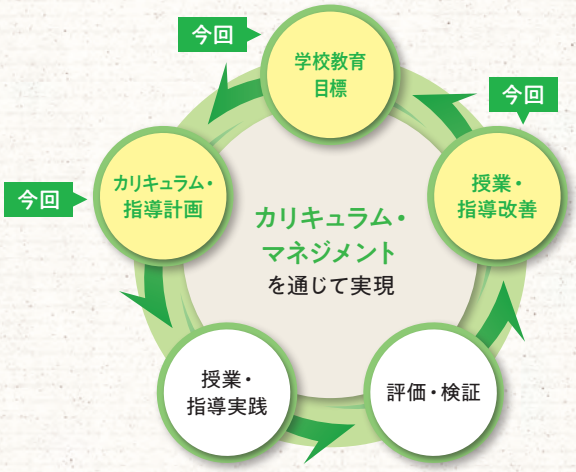
B ❷で挙げた資質・能力の育成のために、新たに始めるべき教育活動

B' 育成を目指す資質・能力の育成という観点からは、中止を含む抜本的な見直しが必要な教育活動
※根本的な見直しが必要な理由も含めて記入

ダウンロード このマークのある図版は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（https://berd.benesse.jp）からダウンロードできます。「HOME →教育情報→高校向け」

育成を目指す資質・能力の設定と「対話」を軸に、授業改善の方向性を見いだす

長崎県立佐世保西高校



◎校訓は「自主自律」「積極敢為」「親和協調」。単位制による多様な選択科目と習熟度別授業で生徒の進路実現を支援する。より高いレベルの授業を希望する生徒のために、1年次より「ウィングクラス」を編成。ハンドボール部、ソフトボール部などの部活動も盛ん。
◎設立　1964（昭和39）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2020年度入試合格実績（現役のみ）　国公立大は、京都大、広島大、九州大、長崎大、北九州市立大などに118人が合格。私立大は、同志社大、近畿大、西南学院大、福岡大などに延べ214人が合格。
◎URL　http://www.news.ed.jp/sasebonishi-h/

授業改善には目的の明確化が必要

育成を目指す資質・能力を設定し、その育成のための「授業改善プロジェクト2020」（図1）を始動させた長崎県立佐世保西高校。学校全体で授業改善の動きが始まったのは、2017年度、宅島健司校長が同校に赴任してからだ。

「生徒の主体性を育むため、そして教師の働き方改革を進めるため、家庭学習や課題・補習を重視した指導スタイルから脱却し、授業改善を進めていきたいと考えました。教師からの知識・技能の教授だけでなく、生徒がじっくり考えたり、協働したりと、多様な活動を通して学びを深め、次の学びへの意欲を引き出すことが、これからの学校には求められると、職員会議などで繰り返し話をして理解を求めました」

18年度には、長崎県が実施する、資質・能力の育成のための指導改善プロジェクトの研究指定校となり、授業改善の取り組みは一気に広まったと、舟越裕教頭は振り返る。

「教科主任を中心に構成した授業改善プロジェクトチームが推進役となり、各教科で授業互観などを進めたことで、『目標設定→活動→振り返り』という授業スタイルが一般化されました」

生徒同士の対話や協働的な問題解決の場面が多く取り入れられるなど、授業は明らかに変わっていったが、それと同時に、「何のための授業改善なのかを、もっと話し合うことが必要なのではないか」といった声が、教師たちから上がってきた。ちょうど18年度末に、VIEW21編集部が主催したカリキュラム・マネジメントに関するワークショップ（＊1）に参加し、学校教育目標の明確化の重要性を痛感した舟越教頭は、宅島校長に「授業を通じて身につける力」を学校全体で話し合い、設定していくことを提案した。

「高校改革が進む中で、佐世保西高校はどんな学校でありたいと思っているのか、すべての教師がそれを生徒や保護者に明確に語ることができて初めて、目指すべき授業が見えてくると考えました。宅島校長も、『授業改善をより本質的なものとするためにも、未来を見通した学校像の言語化が必要だ』と、育成を目指す資質・能力の設定を学校全体での

＊1　ワークショップの内容は、本誌2019年6月号・特集に掲載。

校長
宅島健司
たくしま・けんじ
教職歴31年。同校に赴任して4年目。

教頭
舟越 裕
ふなこし・ひろし
教職歴25年。同校に赴任して3年目。

教務主任
三好啓介
みよし・けいすけ
教職歴19年。同校に赴任して3年目。理科（生物）。

生徒会指導部主任
上野 博
うえの・ひろし
教職歴16年。同校に赴任して5年目。保健体育科。

3学年主任
峯 悦子
みね・えつこ
教職歴16年。同校に赴任して4年目。キャリア支援部。国語科。

進路指導主事
小佐々慎也
こさざ・しんや
教職歴14年。同校に赴任して2年目。キャリア支援部。数学科。

キャリア支援部
松本優梨
まつもと・ゆり
教職歴5年。同校に赴任して3年目。家庭科。

取り組みとすることに賛同してくださいました」（舟越教頭）

全教師による対話を経て資質・能力を設定

19年度、各教科の若手教師で再編成された授業改善プロジェクトチームの主導で、育成を目指す資質・能力の全教師での検討が始まった。同校の強みや弱みを洗い出した上で、育てたい生徒像と育成を目指す資質・能力について意見を出し合い、それらを、各分掌の副主任を中心とした若手検討チームで集約していった。進路指導部から同チームに参加した進路指導主事の小佐々慎也先生は、全教師の意見が土台となったことに意味があったと語る。

「全教師の意見から共通点を見いだし、9つの資質・能力に集約しました（**図1中央**）。漠然とイメージしていた本校の生徒に必要な資質・能力でしたが、どの先生も同じようなことを考えていたのだと分かり、全教師が納得する教育目標として言語化することができました」

生徒会指導部主任の上野博先生は、対話を通して教師がつながっていくことを感じたという。

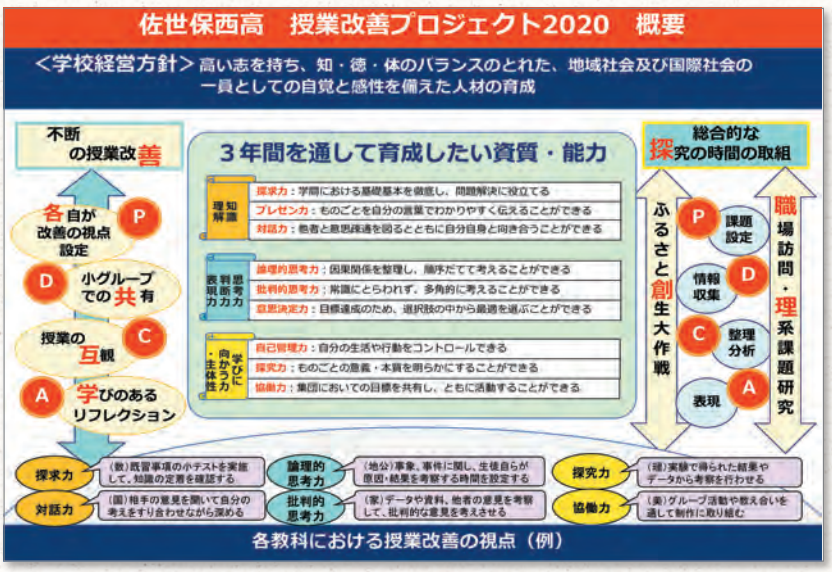
「教科やキャリアを超えた対話の中で、先生方のいろいろな考えを知ることができました。これからは、同僚ともっと対話をするべきだと思いました」

さらに若手検討チームは、学校として9つの資質・能力をどのように育成していくのかを、教育活動の具体例で明示することにした。そこで、各教科団に授業で生徒にどのような活動に取り組ませるのかを検討してもらい、学年団には各資質・能力の育成に寄与すると思われる行事を考えてもらった。

大きな目標を、言わば絵に描いた餅に終わらせないよう、日々の教育活動とひもづけしていく取り組みだが、その取り組みの必要性は、多くの教師が実感していたはずだと、教務主任で授業改善プロジェクトチームのリーダーである三好啓介先生は語る。

「19年度は県の研究指定は終了していましたが、授業改善プロジェクトは、資質・能力の検討と並行して継続していました。18年度は教科団主体の活動でしたが、19年度は担当教科を超えたグループで前年度よりも人数が多い7、8人の構成に変更

図1　授業改善プロジェクト2020



＊学校資料をそのまま掲載。

図3　育成を目指す資質・能力と、それにひもづく各教科・学校行事で展開する教育活動例

佐世保西高で「どのような生徒を育成するか」（育成したい資質・能力）

例	育成したい資質・能力 ○○力	～できる力	○○力を身に付けさせるためにどのような授業を展開するか（各教科） 国語	地歴公民	数学	理科	英語	音楽	美術	書道	保健体育	家庭	情報	研修部関係	どのような学校行事で育成するのか 教務部	生徒指導部	進路指導部	生徒会指導部
知識・技能	探求力	学問における基礎・基本を徹底し、問題解決に役立てることができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
知識・技能	プレゼン力	ものごとを自分の言葉で分かりやすく伝えることができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
知識・技能	対話力	他者と意思疎通をはかるとともに、自分と向き合うことができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
思考力・判断力・表現力	論理的思考力	因果関係を整理し、順序だてて考えることができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
思考力・判断力・表現力	批判的思考力	常識にとらわれず、多角的に考えることができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
思考力・判断力・表現力	意思決定力	目標を達成するために、複数の選択肢の中から最適なものを選ぶことができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
学びに向かう力・人間性	自己管理力	自分の生活や行動をコントロールできる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
学びに向かう力・人間性	探究力	ものごとの意義・本質について明らかにすることができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
学びに向かう力・人間性	協働力	集団においての目標を共有し、ともに活動することができる力	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

＊学校資料をそのまま掲載。

し、授業互観に取り組みました。ところが、教科を超えて共通して育成を目指す資質・能力を明確化できていない状態では、授業互観の後の教師同士の振り返りが活発にならなかったのです。教科を超えて授業改善に取り組むのであれば、どのような授業でどんな資質・能力を育成するのかを共有しておく必要があります。そうしなければ、授業での発問が適切だったのかを検討することもできないと思いました」

授業互観が有意義な振り返りに結びつかず、授業改善の取り組みが進まなかったことは、19年度末の生徒アンケート（図2）の結果にも表れていた。学校教育目標として掲げた9つの資質・能力をどのような授業や学校行事で育成するのかを明らかにして、それを全教師で共有することが急務となっていた。

資質・能力の設定で授業改善の方向性が見えた

資質・能力の育成のための授業・学校行事の改善の具体的な視点は、20年3月、校内で共有された（図3）。それによって、各教師の授業改善が大きく後押しされたと、3学年主任の峯悦子先生（＊2）は語る。

「これまで、生徒同士の対話を盛り込んだ授業の実践を校内に共有しても、『対話よりも知識を注入する方が大切ではないか』といった声が聞かれました。内心は生徒主体の活動を通した学びの大切さを理解していても、まだ確信が持てない先生が、そうした声を発していたのだと思います。しかし、資質・能力の設定とそれを育成するための授業について話し合ったことで、自信を持って授業改善に取り組むことができるようになりました」

20年度は、同校も新型コロナウイ

図2　授業に関する生徒アンケート（1年生）

各質問項目の4・3の割合（%）（4：強くそう思う、3：そう思う）	2019	2018
授業は、生徒が1人でじっくり考える時間がある。	67.0	80.3
授業は、生徒がグループやペアで話し合ったり、教え合ったりする時間がある。	78.4	92.8
授業は、グループで問題解決をする時間がある。	55.4	80.7
授業は、1人が全体に向けて説明をしたり、プレゼンしたりする時間がある。	17.7	31.4

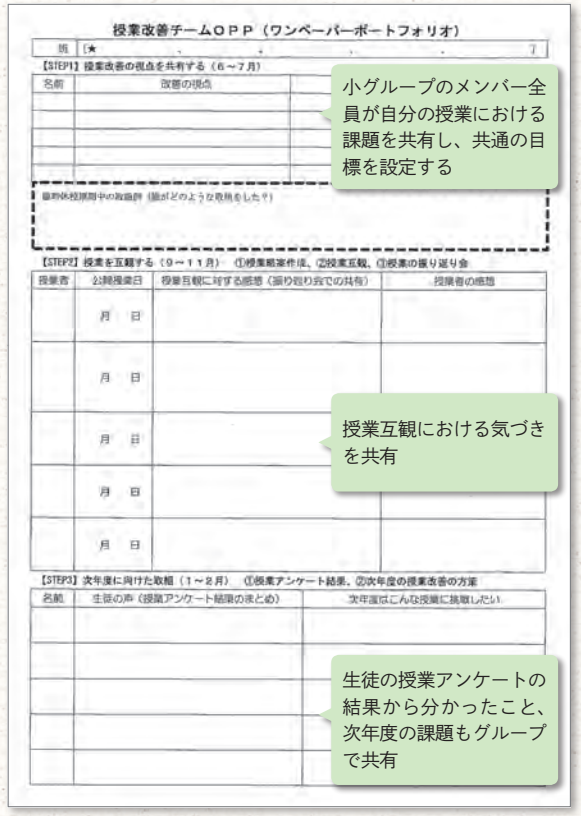
2018・19年度に生徒に行ったアンケートの一部。19年度は前年度に比べて、授業改善の動きが停滞していることが明らかになった。
＊学校資料を基に編集部で作成。

＊2　本誌2019年度4月号「実践　アクティブ・ラーニング」P.34-37で峯先生の古文の授業実践を掲載。

図4 授業改善に取り組む、教科の枠を超えた小グループ活動

2020年度、佐世保西高校では、担当教科が異なる4、5人の教師で構成される小グループをつくり、協働的に授業改善に取り組んでいる。まず、小グループ内で、学校として育成を目指す資質・能力を念頭に置いた上で、各自の授業における課題と目指す授業のあり方、グループ全員で取り組む共通のテーマを、右のポートフォリオを使って共有する。すべての小グループにおいて、週1回、メンバー全員が授業のない共通の時間が設けられており、その時間で授業改善について話し合いを行っている。

下の写真は、7月に行われた国語、数学、英語、音楽の4人の教師から成る小グループ活動の様子。お互いの授業における課題を話し合う中で、「生徒を信じて、自ら取り組ませてみる授業」が共通のテーマに決まり、「生徒の話し合いや熟考の時間を確保するため、スライドなどを使うことによる板書の時間の圧縮」が、目指す授業の実現のための具体的な課題として挙がった。早速、必要なノウハウを学び合おうということになり、1週間後、音楽の教師が講師になって、プレゼンテーションソフトを活用した教材づくりの講習を行うことが決まった。



＊学校資料をそのまま掲載。

ルスの感染拡大を受けた臨時休業という予期せぬ事態でスタートしたが、資質・能力の育成のための授業・学校行事の改善の具体的な視点が明らかになったことで、困難な状況の中でも指導の軸が自分に生まれたと峯先生は話す。

「授業時数が少なくなったので、国語では取り組ませることはなかった予習を生徒に課しています。その内容は、知識を増やすだけのものではなく、教師の手助けがなくても論理的思考力を発揮できるように工夫しています。また、生徒の理解度をきめ細かく把握するために、課題の回収・添削の頻度も高まりました。それも、国語科内で論理的思考力の育成を重視しようという方針が明確になった結果だと思います」

今年度は、担当教科が異なる4、5人の教師で小グループをつくり、授業改善の方針を検討している。前年度よりもグループの人数を減らしたのは、授業互観後の振り返りなどにおけるコミュニケーションを密にするためだ。今後、グループ内で各自の課題をポートフォリオにまとめて共有し、協働的に授業改善を進めていくことになる（**図4**）。

育成した資質・能力を探究学習で発揮

資質・能力の育成において軸となる教育活動が「総合的な探究の時間」だ（**P.35図1右**）。同校は、「ふるさと創生」をテーマとした地域課題研究を18年度から実施しているが、キャリア支援部の松本優梨（ゆり）先生は、「各教科で身につけた資質・能力を発揮する場として探究学習に取り組むことで、教科学習への主体性が高まる」と、探究学習の重要性を語る。

「臨時休業があったため、授業時数の確保に苦心していますが、これまでの探究学習での生徒の大きな成長を思い返すと、生徒の学びを豊かなものにする機会として、探究学習はおろそかにできないと思います」

20年度の授業改善の成果は、各教師が年度末の管理職との面談で、さらにそこでの気づきを小グループで共有して、次年度以降の全校的な授業改善にもつなげる予定だ。管理職が発信した授業改善の願いを、中堅・若手が主体となって実現しようとしている佐世保西高校。教師が一体となった「未来を見据えた学校づくり」は今後も続いていく。

本誌 2016 年 10 月号掲載

授業を進化！ 思考を深化！

実践 アクティブ・ラーニング

現代文

過去の学習内容と行き来する活発な議論の中で、深い読解を実現する

14:15 本文を通読する

●1年生「現代文」の授業。情報学者で東京大学名誉教授の西垣通氏の「ネットとリアルのあいだ」を、この授業から全4時間で読み解いていく。1回目の今回の授業は、本文全体を通して読み、筆者の主張を読み取ることを目指す。（P.41に授業デザインを掲載）

段落ごとに生徒が交替しながら、本文全体を音読する。全 26 段落を 10 分程度で通読完了。「『筆者は何を主張したいのか』を説明してほしいのだけれど、考えを整理するのに何分必要？」と黒川先生から尋ねられた生徒が「3分ください」と返事。クラスの全員がまず自分で考えて、それからペアで話し合った。

栃木県立宇都宮高校
黒川治彦 くろかわ・はるひこ
教職歴 19 年。
同校に赴任して 11 年目。1学年担任。
アクティブ・ラーニングの実践は 20 年目になる。

黒川先生のアクティブ・ラーニング

「生徒の議論」が中心の授業で教師は論点の整理に徹する

1年生の現代文の授業で、黒川治彦（はるひこ）先生が実践するのは、過去の学習内容と関連させながら、より深く、多角的に読み解いていく学習だ。9月上旬に行われたこの授業では、教科書の評論の内容を深く理解するために、夏季休業中に課した評論の読解問題が、思考を活性化するツー

栃木県立宇都宮高校

◎剛毅で高潔な人物の育成を目指す「瀧の原主義」に基づき、「全教科主義」「学業プラスワン」を実践。自己実現を果たせる高い知力・豊かな情操を養い、社会のあらゆる局面で課題解決を図れる資質を備えた人材を育成する。
◎設立　1879（明治12）年
◎形態　全日制・通信制／普通科／男子
◎生徒数　1学年約280人
◎2016年度入試合格実績（現役のみ）　国公立大は、東北大、東京大、東京工業大、一橋大などに118人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、早稲田大などに延べ263人が合格。
◎URL　http://www.tochigi-edu.ed.jp/utsunomiya/nc2/

P.38 ～41 は、本誌 2016 年 10 月号「授業を進化！ 思考を深化！ 実践 アクティブ・ラーニング」（P.26 ～ 29）を再掲載しています。

14:35 複数の評論を読み比べる

夏季休業中に課した評論の読解問題のプリントを生徒に返却。「夏季休業中に読んだ評論で、教科書の評論と関係するものが思い浮かぶかな？」と問うと、約３分の1の生徒が挙手したので、夏季休業中の課題を３分ほどで見直しさせた。そして、教科書の評論と関連しそうな内容をグループで確認しながら、筆者の主張を改めて検討した。

14:30 内容を発表する

指名された生徒が前に出て、重要なキーワードを板書しながら、筆者の主張を説明。聞く側の生徒は、説明の納得度を拍手の大きさで評価する。黒川先生は、小さな拍手だった生徒にその理由を聞くと、「自分が重要だと思った語句が盛り込まれていない」などと理由を述べ、協働的な深掘りが進んだ。

ルとして使用された。

授業では、生徒が段落ごとに教科書の本文を交替で音読し、全体を通読。その後、黒川先生は生徒に「筆者の主張は？」と問いかけた。指名された生徒が説明すると、ほかの生徒から「今の意見では、教科書に書いてあることをなぞっただけでは？」「重要なキーワードは盛り込まれているけれど、うまくつながっていない」などの指摘が入る。その度に、黒川先生が「みんなはどう思う？」「この言葉は外せないようだね」などと、論点を整理し、発表者と聞く側の生徒を橋渡ししながらクラス全員の読みを深める。

そうして、筆者の主張をつかむための正確に理解するべきキーワードを確認したところで、授業は大きく展開する。夏季休業中の課題として取り組んだ評論を、教科書の評論を深く読み解くための材料として、並行して読み比べていくことになったのだ。「ここまでに出てきたキーワードを念頭に、夏季休業中に読んだ評論をもう一度ざっと確認してみよう」という黒川先生の言葉で、生徒たちは教科書の評論と夏季休業中に取り組んだ評論を読み比べ始めた。

「1つの物事を考える時に、あえて別の角度から考えることが大切であると、本校ではすべての教科の中で生徒に訴えています。ですから生徒も、複数の評論を並行して読む意味を十分理解しています。そうした授業を続けていくと、2、3年生になった時、『今日の授業に関連して、自分が前に読んだ本の中にこんなことが書かれてあった』など、教科書に限定することなく、生徒が率先して過去の学びを持ち出し、自由に議論できるようになります」

複数の評論を読み比べ、語り合いの中でさらに理解を深める

教科書、そして夏季休業中の課題と複数の評論を照らし合わせた生徒たちが、グループでの議論を経て、さらにクラス全体での討議を続けた。「自薦でも他薦でもよいので、どんどん意見を出していこう」と黒川先生が呼びかけると、それに応じた生徒たちが「ネット社会で内面的なものがないがしろにされているという主張が、この2つの評論に共通している」「この評論での『内面性』と、この評論での『身体性』は、言葉の印象は違うけれど、実は同じ意味なのでは？」「この2つの評論では、『身体』という意味が全く別の意味で使われている」などと意見を出し合う。別の角度からの読みによって、理解が一気に深まっていく。

授業の佳境とも言えるおよそ十数分間、黒川先生は、生徒の意見を整理し、議論を促進することに徹する。明らかに文を読み間違えた意見が出た時も、即座に否定せず、ただ整理してその意見を全員に提示する。すると、ほかの生徒から「それは違うのでは？」と指摘が入る。

「教師が正解を言えば、『先生が言うのだから

14:45 内容の整理

数人の生徒が、複数の評論を読み比べたことで分かったことを踏まえて、教科書の評論の筆者の主張を発表。黒川先生が「今の指摘はとても重要。では、夏季休業中の課題の中に、別の視点でアプローチしている評論がなかったかな？」と、さらにグループでの議論を促す。それらを踏まえて、最初に発表した生徒が再び内容を整理した。

15:03 まとめ

黒川先生が「評論を読む意味は、そこで理解した視点や考え方を、別の場面で使えるようになること」など、現代文の学びの普遍的な意味を生徒に語る。残り１分程度で、生徒が教科書と夏季休業中の課題を突き合わせながら、自主的に今日の学びを確認し合った。

間違いない』と生徒は考えることを止めてしまいます。しかし、生徒同士であれば、本当に正しいかどうか、最後まで気が抜けません。生徒に議論を任せるからこそ、学びが深まるのです」

思考の活性化・深化への配慮

生徒が自分で気づくための最小限の問いを追究

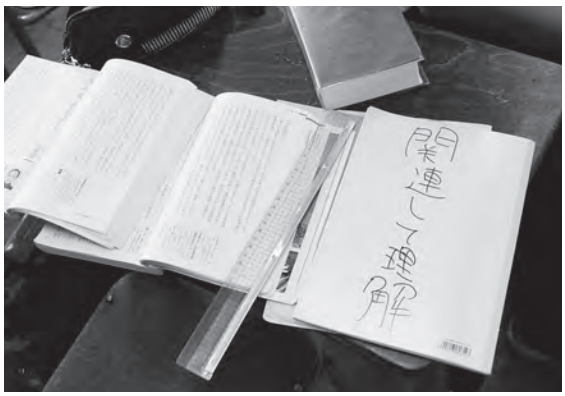
アクティブ・ラーニングの根本は言語活動だが、だからといって、グループワークありきではないと黒川先生は考える。

「大切なのは生徒が能動的に、深く考えることです。それが実現できるのであれば、講義形式の授業でも構わないでしょう。ただ、生徒が自分の考えが深まったことを確認する絶好のアウトプットの場が、グループワークであることは事実です」

思考の活性化につながるグループワークの実現には、教師の役割がより一層重要になる。

「分かってほしいという教師の思いが強すぎると、生徒が理解していることまで説明してしまい、結果、生徒の授業に対する熱を冷ますことになります。生徒は自分で考え、自分で語り、そして認められたいのです。生徒の考えを引き出すため、教師の問いは最小限にとどめる。今回の授業でもたくさん我慢しました」

今回の授業で、キーワードの1つである「コミュニティー」に迫る場面で、ある生徒が人間の存在を「精神と身体から成る」と説明した。そこで黒川先生が問う。「それは自分1人でつくられるもの？」。生徒が「いいえ。周囲に影響されながら……」と答えた次の瞬間、ほかの生徒たちが思わず「ああ……」と声を漏らした。まさに、最小限の問いかけで生徒の思考が活性化したのだ。



黒川先生は、授業中に「学びの意味」をよく口にする。この日、先生が語った「異なるものを関連させることで、多角的に考え、深く理解できる」というメッセージに共感したある生徒が、その言葉を自分のノートの裏に大きく書いていた。

場づくりへの配慮

間違った答えの価値を生徒に理解させる授業力が求められる

生徒主体の議論を授業の中心とするために

授業デザインシート

【教科・科目】国語・国語総合（現代文）
【分野・単元】評論
【テーマ・作品】「ネットとリアルのあいだ」（西垣通）
【設定時数】4時間中の1時間目
【本時全体の目標】筆者の意見を捉え、多角的に考察する

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標（身につけさせたい力・姿勢）	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
本文を音読する	「言葉」に気をつけて、正確に読む。	・技能	【教師】声の大きさや速さに留意する。 【生徒】正確に音読する。	キーワード・キーセンテンスに留意しながら、内容を正確に捉えて読むよう働きかける。	声の大きさや本文に向かう姿勢。
本文の内容を考える	「言葉」を適切に理解し、文脈に即して、筆者の主張の核を把握する。	・思考力 ・判断力	【教師】まずは、自分でしっかりと考えるよう伝える。 【生徒】線引きや図示など、自ら工夫してまとめる。	生徒自身で時間を区切り、集中して考えるよう働きかける。	本文のどの辺りに気を配りながら考えているかを、観察する。
本文の内容を発表し、評価を受ける	「言葉」を適切に理解し、文脈を押さえて筆者の主張を的確に把握する姿勢を、生徒からの評価により養う。	・思考力 ・判断力 ・表現力 ・主体性	【教師】生徒による評価が適切になされるよう進行する。 【生徒】発表内容について確固たる根拠に基づき、自分の考えで評価を行う。	発表内容についてどのような評価をし、その理由はどのような根拠からかを明示させる。また、根拠を持って評価するよう促す。	発表者の態度や内容について、間違っている場合、頭ごなしに否定せず、なるべく生徒同士の発言で解決するよう仕向ける。
読み比べを行う	既読の文章（複数）に改めて触れ、自らが蓄えた知識や教養と関連させて、教科書本文を思考することの面白さを実感する。	・知識 ・思考力 ・多様性	【教師】夏季休業中の課題として既に取り組んだプリントを返却し、個人の記憶を呼び起こす契機とする。 【生徒】自分で考えた跡を振り返り、教科書本文の内容と照らし合わせる。	筆者の述べている内容との関連について、共通する点や異なる点、発展している点などについて考えるよう働きかける。	本文を考える上でキーとなる多様なワードについて、生徒から引き出し、すべてを黒板に書いておく。
読み比べた内容についてグループで話し合う	論理的に文章と文章とを関連づけ説明し合うことで、教科書の本文の読みを深める。	・知識 ・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】机間を巡視し、話し合いの内容・進度について確認する。 【生徒】4人グループで内容について話し合う。	筆者の述べている内容との関連について、共通する点や異なる点、発展している点などについて根拠を持って話すよう働きかける。	本文中に根拠を求め、センテンスを抜き出させるなどして話し合わせる。
読み比べた内容について発表し、評価を受ける	読み比べ、話し合ったことで、読解上焦点をあてた視点(キーワード)から、比較した文章と教科書本文の内容を適切に関連づけて発表する。また、その発表に対し、自らの考えを持って適切に評価する。	・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】司会に徹する。 【生徒】主体的に意見を述べる。	意見を整理しながら、内容が誤っていても教員が答えを提示することはせず、改めて生徒同士で考えるよう働きかける。	生徒の着眼点、そこから考えるべき課題を見て取り、クラスの全員が自己の課題として考えるような雰囲気をつくる。
発表で問題となった点についてグループで話し合う	話し合いを通して、深く内容を理解する。	・思考力 ・表現力 ・多様性 ・協働性	【教師】机間を巡視し、話し合いの内容・進度について確認する。 【生徒】4人グループで内容について話し合う。	文章内容に照らし、根拠を持って話し合うよう働きかける。	本文中に根拠を求めて話し合えているか気を配る。
話し合いを踏まえ、改めて考えを発表する	自らの思考の深まりとその過程について確認する。	・思考力 ・表現力 ・協働性	【教師】生徒の読み取った内容の変化について整理する。 【生徒】発表内容の変化について過程を明確にして発表する。	状況によっては、思考が変化した過程についての説明を求める。	生徒の発表に集中し、その変化を適切にピックアップする。
まとめる	思考を継続する。	・思考力 ・表現力	【教師】生徒の変化を踏まえ、発問をしながら本時の授業内容を整理し、次時の内容につなげることで、思考の継続を促す。 【生徒】発問に対する自らの考えを述べる。	生徒の気づきを大切にするような発問を心がける。	生徒たちの現状を踏まえ、長期的な学習活動における本時の位置づけについても触れる。

＊黒川先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

も、入学後1か月くらいでの授業の雰囲気づくりが重要だと黒川先生は説明する。

「本校の生徒は、プライドを持っているからこそ、人前で間違えたり、否定されたりすることを恐れます。入学後、そうした心持ちを変えるため、私は、たとえ生徒が間違った答えを言っても、そこに学びの価値があることを丁寧に説明しながら、生徒を肯定することを徹底します。次第に生徒たちは、自分の失敗が周囲を成長させていることに気づきます。そういった雰囲気ができ上がれば、自分の意見に対してクラスの仲間が『表面的に思える』と批判しても、それをアドバイスとして受け止め、次にどうすればよいかを前向きに考えることができるのです」

入学して半年。グループでの話し合いに、まだ積極的に参加できない生徒もいる。だが、そうした生徒に対しても、黒川先生は、「根拠が固まっていないまま、形だけ語り合っても意味はない。自分の考えが固まるまで、焦らずに熟考すればよい」と言う。

「正解がはっきりしている古典に比べると、現代文では自分の読みの根拠が浅いと意見が言いにくいものです。失敗と成功を繰り返す仲間の姿を見て、議論に積極的でない生徒にも少しずつ自信をつけてもらいたいですし、机間巡視では、教科書などへの書き込みをチェックし、生徒の理解を支え、価値ある気づきを拾い上げていきたいです」

黒川先生の授業に、その後どのような変化が？

実践
アクティブ・ラーニング
現代文

学校や生徒の状況に合わせて柔軟に授業の手法を見直し、対話を通じて創造性を育む

栃木県立宇都宮女子高校
黒川治彦 くろかわ・はるひこ
教職歴23年。同校に赴任して2年目。国語科。

2016年10月号に登場

栃木県立宇都宮女子高校
◎「白百合よ、貴きをめざせ」のスローガンの下、社会貢献できる人材の育成に努める。「一人一研究」の伝統を受け継いだ「自由研究」、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校としての活動を継続した「探究活動」を実施。
◎**設立** 1875（明治8）年 ◎**形態** 全日制／普通科／女子校 ◎**生徒数** 1学年約280人
◎**2020年度入試合格実績（現浪計）** 国公立大は、東北大、筑波大、宇都宮大、東京大、一橋大、京都大などに159人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ669人が合格。
◎**URL** http://www.tochigi-edu.ed.jp/utsunomiya joshi/nc2/

前回の取材後からの授業の変化

既存の取り組みを生かし、思考の幅を広げる授業を展開

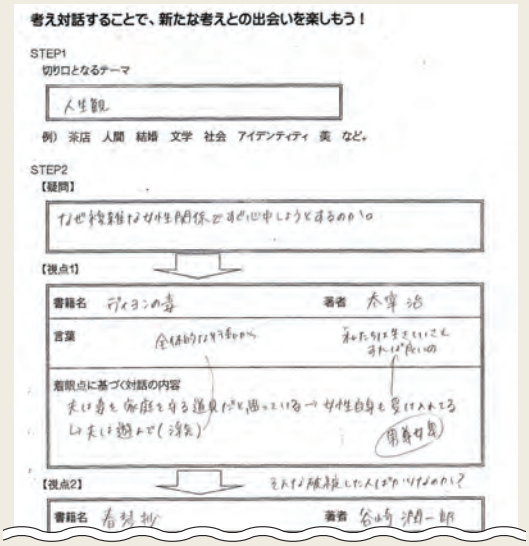
本誌2016年10月号の本コーナーに登場した黒川治彦先生は、現在、栃木県立宇都宮女子高校に勤務している。思考力など、生徒への育成を目指す資質・能力は以前から変わらないが、指導方法は目の前の生徒や学校の状況に応じて変化していると語る。

前任校の男子校で行っていた、教科書と副教材に載っている2つの評論を読み比べ、関連性を考えさせる授業は、現任校の状況に合わせて変更した。同校には、課題図書のリストがあり、生徒は各自、その中から年間15冊以上を読む。黒川先生は、その活動を生かした次のような授業を考えた。

教科書に載っている太宰治の『富嶽百景』と関連すると思う課題図書を生徒自身に選ばせ、その2つの作品にはどのような関連性があるのかを分析させる。グループでその結果を持ち寄り、特定のテーマを切り口にして話し合い、『富嶽百景』の読解を深める。最後に、話し合った内容をワークシート（図）にまとめ、グループごとに発表するといった展開だ。

「選んだ作品が異なることで、『そんなアプローチがあるんだ』『そこまで考えたんだ』といった気づきが多数生まれ、思考の幅が広がります。1人で考えることには限界がありますが、対話型の

図 授業のワークシート


考え対話することで、新たな考えとの出会いを楽しもう！

STEP1
切り口となるテーマ
人生観
例）茶店 人間 結婚 文学 社会 アイデンティティ 美 など。

STEP2
【疑問】
なぜ複雑な男性関係でまだ心中しようとするのか？

【視点1】
書籍名 ディヨンの書 著者 太宰治
言葉 全体的にはうまくいかない 私たちは生きていこうとすれば良いの
着眼点に基づく対話の内容
未だ妻を家庭を守る選択だと思っている → 女性自身も変化する
↓未だ過渡期で（浮気）
（男女関係）

【視点2】 それは離婚した人ばかりなのか？
書籍名 春琴抄 著者 谷崎潤一郎

＊学校資料をそのまま掲載。

学習では、他者の視点を知る重要性や読書の大切さを実感し、主体的な学びにつながる効果があると考えました」

課題図書の内容をメンバー全員が知っているとは限らず、前提知識が異なるため、話し合いが浅くなる可能性もあった。しかし、話し合いを通じて他者が読んだ課題図書の内容を知ることは、読書の幅が広がる機会になると、黒川先生は考えた。

「自分が選んだ課題図書の内容をほかのメンバーが知っているとは限らないという点にも配慮して、自分の考えを伝えようとする姿勢が、生徒に見られた点がよかったです」

黒川先生は、生徒の特性に応じて対話の手法も工夫している。女子校である同校に赴任した当初、クラス全員の前で1人ずつ発表する場を設けたが、発表に抵抗感を示す生徒が多く、うまくいかなかった。そこで、「ペアワーク→グループワーク→クラス全員の前で発表」と段階を踏むことで、発表への心理的なハードルが下がるようにした。

授業の変化の背景

生徒と一緒に授業をつくることを大切にし、指導の手法を柔軟に変更

初任校では、生徒同士の対話を成立させるためには、ある程度の知識を事前に生徒に与える必要があり、最初に講義形式の授業も行った。前任校と現任校の授業は、生徒が十分な基礎知識を身につけているため、1時間のうちの多くが生徒同士の対話で占められる。

「前任校と現任校では、教師が説明し過ぎると、生徒の学習意欲や考える力を削いでしまう場合があると気づきました。そこで、生徒が自分の考えを持つような予習を課し、授業では対話によって考えや疑問を出し合い、他者から学び、次の学習につながるような指導を重視しています」

現任校では、女子校ならではの特性に合わせて、1年次の最初の段階で「間違えてもよいんだ」と何度も伝え、まずは安全・安心な場づくりを心がけた。前任校よりも、ペアワークの回数を増やしたのも、そうした背景がある。

「私が大切にしているのは、生徒と一緒に授業をつくることです。目の前の生徒が変われば、授業の方法もそれに合わせて変わります」

今後の展望

国語の授業での探究を通して、新しいものを創造する力を育みたい

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、黒川先生はオンライン授業を実施した。古文では、話す時に強調や間の取り方を工夫し、調べ考えることを大切にした授業を心がけたところ、生徒の理解度に手応えがあった。一方、現代文では、生徒同士の対話を通じた読解を行おうとしたが、オンラインのグループワークでは生徒が発言のタイミングをつかみにくいなどの問題点が見えてきたので、実施しなかった。

「今回の事態で、状況に応じて指導の形を変えなければならないことを痛感させられました。例えば、対話には、自問自答のような自己との対話、講義での教師との対話などもあります。オンライン授業や、感染予防をしながらの授業で、いかに対話を取り入れていくかを模索していきます」

実社会では、チームで1つの物事を多角的に考えたり、自身の考えを表現したりする力が欠かせない。黒川先生は、そうした力を育めるような授業を、今後も追究していきたいと語る。

「課題図書を利用した授業は、一見関係がなさそうなものの間に関連性を見いだし、視野を広げる活動でした。新しいものは、異なるもの同士をかけ合わせることで生まれます。これからも、探究を通じて、創造性を育むような国語の授業を実践していきたいと考えています」

黒川先生の授業を受けて

宇都宮大学共同教育学部2年
登城直紀（とじょうなおのり）さん（栃木県立宇都宮高校卒業）

対話を中心とした黒川先生の授業スタイルには初めは戸惑いましたが、1か月も経つとすっかり慣れました。授業では、思考の型を学ぶとともに、自分では思いもしなかった考えをクラスメートから聞くことなどを通じて、他者との対話から自分の思考を深める手法を学びました。そうした経験があったからこそ、例えば、言葉に詰まった時に別の視点からアプローチすることもできるようになりました。大学は理系分野に進学しましたが、思考の型は文理関係なく必要なことだと感じています。将来は数学の教師を目指していますが、私も生涯、この思考の型を活用しつつ、考えを整理できる手法を生徒に伝えられる教師になりたいです。

愛知県・名古屋市立工芸高校

「高校生のための学びの基礎診断」

学科・学年混合で行う振り返り会で、生徒に学びの意義を浸透させる

変革のステップ

背景と課題

- 年度当初に実施した「高校生のための学びの基礎診断」の結果返却時に、生徒の学習意欲を喚起するフィードバックを行うことができなかった

実践内容

- **有志の教師のチームで「振り返り会」を企画**
  ２回目の「高校生のための学びの基礎診断」に向けて、有志の教師が集まり、返却方法を検討。自校にとっての実施の意義を「生徒が学習のＰＤＣＡサイクルを回せるようになること」と整理し、かつ、楽しみながら「学び」の大切さを実感できるようにと、結果を振り返る会として「マナフェス」を企画。「高校生のための学びの基礎診断」の意義を伝え、学科・学年が混在したグループでのワークショップを実施

成果と展望

- 生徒にPDCAサイクルの概念が浸透しつつある
- 「高校生のための学びの基礎診断」の実施前後の教育活動を整理することで、日々の授業に対する生徒の意識を高めることを目指す

「学びの基礎診断」の振り返りと学びの大切さを伝えたい

２０２０年２月、７つの科を擁する実業高校である愛知県・名古屋市立工芸高校は、「高校生のための学びの基礎診断」（以下、学びの基礎診断）の結果を振り返る会として、１・２年生合同の「マナフェス」を実施した。１・２年生全員が、「学びの基礎診断」の帳票の見方とそれを自分の学習改善に活用する方法を学んだ上で、学科・学年が混合のグループで問題解決型学習などの３つのミッションに取り組んだ。「マナフェス」の企画・運営を主導した建築システム科主任の深見信規（あきのり）先生は、こう説明する。

『マナフェス』は、『学びの基礎診断』の

PROFILE

「創意・責任・勤勉」を信条とし、「知・心・技」それぞれの探究を通して、自分の道を考え、選択し、歩んでいく生徒の育成を目指す。２万人以上の卒業生が、デザイナーやエンジニアなどとして、社会の第一線で活躍。

設立	1917（大正６）年
形態	全日制／電子機械科・情報科・建築システム科・都市システム科・インテリア科・デザイン科・グラフィックアーツ科／共学
生徒数	１学年約 280 人
2020 年度進路実績（現役のみ）	国公立大は、長岡造形大、金沢芸術大、愛知教育大に３人が合格。私立大は、愛知工業大、名城大などに延べ 59 人が合格。短大、専門学校進学 70 人。就職 133 人。
住所	〒461-0027　愛知県名古屋市東区芳野二丁目 7-51
電話	052-931-7541
Web site	https://www.nagoya-c.ed.jp/school/kogei-th/

振り返りを通じて、生徒に学習のPDCAサイクルを身につけさせることと、これからの社会で求められる思考力や協働性などの重要性を、生徒に伝えることを目的として企画しました。活動内容を検討していくうちに、生徒が楽しみながら学びの大切さを感じられる機会にしようと、3つのミッションを取り入れました。『フェス』と銘打ったのも、生徒自身がイベントをつくり上げる楽しさを味わってもらうためでした」

校長
水野俊治 みずの・としはる
教職歴32年。同校に赴任して6年目。「ボトムアップしやすくなる環境をつくる」

建築システム科主任・工務部
深見信規 ふかみ・あきのり
教職歴18年。同校に赴任して18年目。「諦めたら終わり。前進あるのみ」

広報企画部主任
村山晴奈 むらやま・はるな
教職歴19年。同校に赴任して13年目。「生徒の気持ちに寄り添い続けたい」

進路指導部
北村友香 きたむら・ゆか
教職歴21年。同校に赴任して14年目。「自律した人材の育成を目指す」

進路指導部
池田征史 いけだ・まさふみ
教職歴11年。同校に赴任して2年目。「生徒に理不尽を与えない」

生徒の行動に結びついているか 教師の疑問から取り組みを見直す

そもそも、「マナフェス」を企画した背景には、19年5月、「学びの基礎診断」の振り返りのために行った全校集会についての反省があった。

同校は、「学びの基礎診断」として「基礎力診断テスト」（＊1）を実施している。19年度の1回目の結果が返却された5月、全校集会を行い、「学びの基礎診断」の意義、GTZ（＊2）の見方、弱点克服に向けたアドバイスなどを生徒に伝えた。しかし、生徒は、返却された結果に関心を抱いた様子はなく、その後の学習でもほとんど変化が見られなかった。すると、教師からは、「何か工夫をしなければ、生徒は『学びの基礎診断』の結果を生かして自分の学習を変えようとはしないのではないか」といった声が上がった。

2回目の「学びの基礎診断」は、20年1月に実施の予定だった。教頭、教務主任、進路指導主事、各教科・学科の代表から成る委員会「チーム学び」から、「生徒に有意義な振り返りをさせるための機会にできないか」といった提案がなされた。それを受けて、委員の1人である深見先生が中心となって、「基礎力診断テスト」の内容をよく知る進路指導部員ら5人の教師で有志チームを結成。同チームが、2回目の振り返り会の企画・運営を主導することとなった。

「義務教育段階の内容を含む『基礎力診断テスト』で測定している教科の知識も、思考力や表現力なども、進学・就職にかかわらず、これからの社会で必要となる力です。そのことをどうすれば生徒に実感を伴って伝えることができるのかに重点を置いて、振り返り会の企画を検討しました」（深見先生）

授業で回すPDCAサイクルを 汎用的な考え方として意識させる

振り返り会の時間は、1回目の1時限50分間よりも格段に長い、午前の4時限分とした。当時、進路指導部に所属していた村山晴奈先生は、検討を始めた頃を次のように振り返る。

「振り返りが効果的にできなければ、『学びの基礎診断』の意義が半減してしまいます。生徒が最後まで集中して取り組み、やってよかったと思えるような場をどのようにすればつくれるか、メンバーで議論を重ねました」

企画は、自校の生徒が「学びの基礎診断」を受ける目的を整理するところから始めた。

そもそも、「学びの基礎診断」のねらいは、基礎学力の確実な習得とそれによる生徒の学習意欲の喚起にある。そのため、結果の詳細なフィードバックを基に、学校は教育活動のPDCAサイクルを構築するが、生徒にも細かなフィードバックがなされている。それを基に、生徒自身が学習のPDCAサイクルを回せるようになることが理想であり、「学びの基礎診断」実施の意義の1つであると整理したと、有志チームのメンバーで進路指導部の北村友香（ゆか）先生は話す。

＊1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。　＊2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

「生徒は、毎日の授業で学習のＰＤＣＡサイクルを回しています。例えば、工業の授業では、自分が作ったシステムが作動しなければ、その原因を検証し、改善点を見つけ出して、次の計画を立てます。既にＰＤＣＡサイクルを回す経験をしているのに、生徒は工業の授業内のこととしか認識していません。ＰＤＣＡサイクルが、ほかの場面でも生かせる汎用的な考え方であることを実感させるとともに、それを身につけられるすべての授業の大切さに気づかせたいと考えました」

加えて、学科単位で実施される学校行事が多い中、「マナフェス」は、7科合同で実施し、科横断での生徒の交流を促す問題解決型学習に取り組む活動を設けることにした。同校では、1年次の「総合的な探究の時間」において、7科混合のグループで問題解決に取り組む「ミックス・ホームルーム」を行っている。それは、普段は交流の少ない他科の生徒を知ることで、自分の強みや弱み、所属する科の特性を改めて認識する機会となっていた。「マナフェス」では、科に加えて、学年も混在させたグループワークを取り入れた。生徒に協働することの楽しさを味わわせるとともに、校内でさらなる科の連携を推進する契機にしたかったと、有志チームのメンバーである進路指導部の池田征史（まさふみ）先生は語る。

「社会では、様々な立場の人と協働してプロジェクトを進める機会がたくさんあります。多様な学科があり、それぞれが強みを持つ本校の特色を生かす機会を今後も設けたいと考えました。『マナフェス』での生徒の楽しそうな姿をきっかけに、7つの科の横のつながりが強まることを期待しました」

図　「マナフェス」のプログラム

オープニング　AI時代においても必要とされる資質・能力について、校長からの講話。

「学びの基礎診断」結果返却

ワークショップ

- **ミッション1**　「好きな食べ物」「今、熱中していること」など10項目から1つ選び、その答えを学年・名前とともに伝え合う形で自己紹介をする。
- **ミッション2**　途上国の感染症を防ぐために、子どもたちが手を洗いたくなる工夫を考える。
- **ミッション3**　思考力が求められる問題に取り組む。

＊学校資料を基に編集部で作成。

社会で求められる力と関連づけて「学びの基礎診断」の結果を語る

そうして迎えた「マナフェス」は、1・2年生が体育館に集まってスタートした（**図**）。第1部では、まず石原正道前校長から、ＡＩ時代においても必要とされる課題発見・解決能力や思考力、表現力、協働性の重要性が語られた。

次に、20年1月に実施した2回目の「学びの基礎診断」の結果を返却し、帳票の見方や弱点克服の方策を伝えた。帳票に示された指標（ＧＴＺ）の解説にとどまらず、同校の希望進路の傾向を踏まえて、社会で求められる資質・能力とは何か、それは「学びの基礎診断」の結果のどのような点に表れているのかといったことを説明すると、生徒は、1回目とは異なり、皆、食い入るように帳票を見ていた（**写真**）。

第2部では、生徒は所定の教室に移動し、グループで3つのミッションに取り組んだ。

ミッション1は、自己紹介を兼ねたアイスブレークだ。メンバーが初対面ばかりのグループも多いことから、緊張をほぐすため、学科・学年・名前を述べた後、「好きな食べ物」など、10項目から各自1つを選んでその答えを伝え合った。

ミッション2では、まず、ＷＨＯ（世界保健機関）が実施した「HOPE SOAP プロジェクト」について学んだ。同プロジェクトは、途上国の感染症対策として子どもに石けんを配布する取り組みで、石けんの中におもちゃを仕込んだところ、おもちゃほしさに石けんで手を洗うように

写真　「学びの基礎診断」の1回目の結果返却時にはあまり関心を示さなかった生徒たちだが、「マナフェス」で返却した2回目の結果には、大きな関心を寄せていた。生徒同士で、改善点を話し合う声なども聞こえた。

なり、感染症発症率が約7割減った成果も出ている。それを題材に、自分たちならさらにどんな工夫を施すか、アイデアを出すのがミッションだった。ちょっとしたアイデアで世界を変えられることを実感させるのと同時に、生徒同士でアイデアを出し合って1つの案にまとめる活動を通して、協働性を養うこともねらいとした。

ミッション3では、「学びの基礎診断」の記述式問題の振り返り教材を用いて、思考力が求められる問題にグループで取り組ませた。グループでの話し合いを通じて、1つの答えを導くことを経験させるのがねらいだった。

3つのミッションが終わると、マナビジョンの使い方を学ぶ講座とゲストの講演を行い、初めての「マナフェス」は幕を閉じた。

情報共有をすることで周囲の教師からの助言も

「マナフェス」の実施に際して、有志チームが気を配ったのは、教師の負担をできるだけ抑えることだ。第2部では、生徒を21の教室に分け、各教室に教師を1人ずつ配置することにしたが、担当教師は、校内放送から流れる指示に沿ってプリントを配布し、生徒の活動の様子を見守る役割にとどめた。

ところが、教師からは、「それでは生徒から質問があった場合に対応できないので、イベントの詳細を教えてほしい」といった声が寄せられた。そこで、急きょ、取り組みのねらいと段取りを、担当教師と共有する説明会を行った。

「教師の負担を増やさないことばかりに気を取られ、情報共有がおざなりになっていました。運営者側は、実施者に十分な情報を提供することが責務であると痛感しました。また、たとえ賛否両論がある取り組みでも、引き受ける以上は全力を尽くしたいという教師の思いを、改めて感じた機会となりました。企画段階から周りにもっと相談をしてもよかったのだと、メンバーで大いに反省しました」（池田先生）

説明会に参加した教師からの提言を受けて、企画の一部の変更も行った。当初、グループ内の席は生徒同士で決めさせる予定だった。しかし、「予定の時間では短くて、席順を決められないグループが出る可能性が高い。そうしたら、その後の進行に遅れが生じる」といったアドバイスを得て、席順を事前に決めておくことにした。情報共有によって、教師の不安が和らいだだけでなく、取り組みの精度をより高めることにもなったのだ。当時、教頭として取り組みを見つめてきた水野俊治（としはる）校長は指摘する。

「3年前に100周年を迎えた本校は、90周年の際に『次の100周年にちなんで、先生たちで100のプロジェクトを提案して実現していこう』と様々な取り組みを始めました。時には、職員たちが年代別に分かれて議論を深めるなど、ボトムアップで改革に取り組む土壌があったからこそ、今回のような学校を挙げての企画が実現できたのだと感じています」

約7割の生徒がイベントに満足 課題は日々の学習につなげること

「マナフェス」の成果は、生徒へのアンケート結果に表れている。第1・2部の内容について、約7割の生徒が「内容に満足」と回答をした。さらに、自由記述欄には、「講話でPDCAサイクルの大切さが分かった」「『学びの基礎診断』をする意味が理解できた」といった回答が書かれていた。グループワークで思考力が求められる振り返り教材に取り組んだことでも、「学びの基礎診断」が社会で必要な思考力を身につけるための機会であることを、多くの生徒が理解したのだ。

今後の課題は、「学びの基礎診断」を日々の教科指導や、生徒の学習行動のさらなる改善につなげることだ。

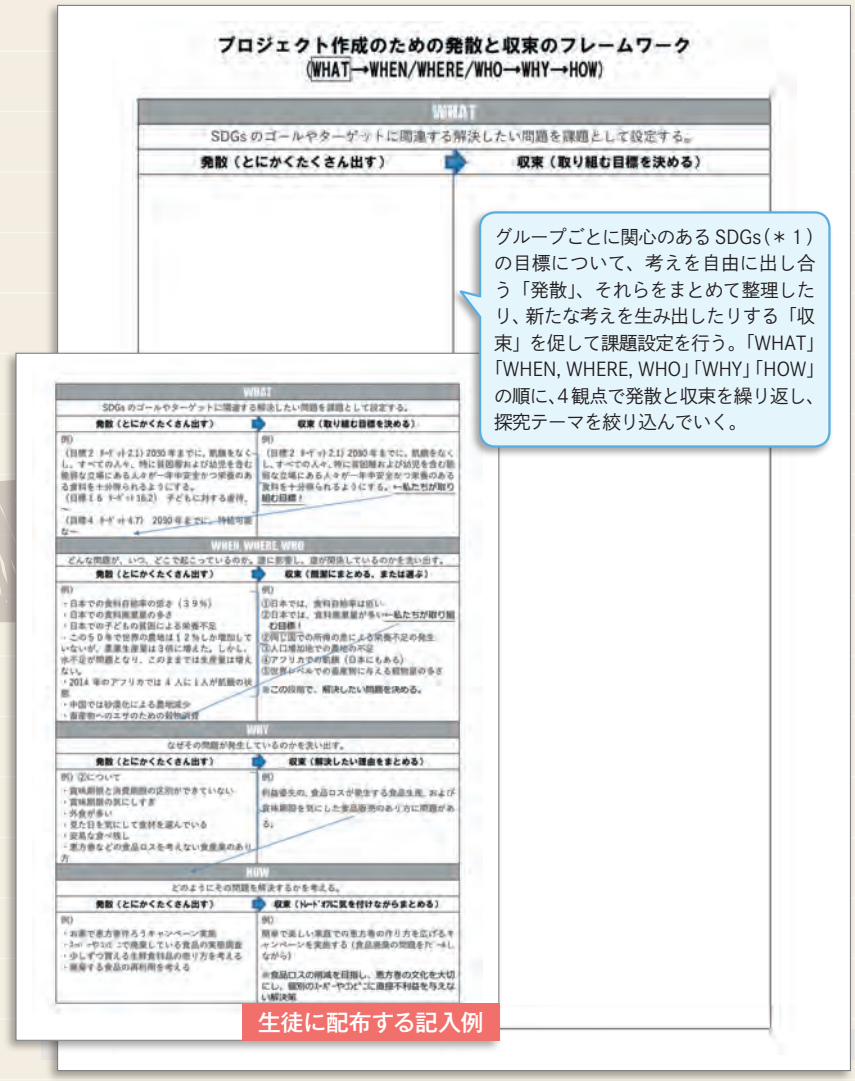
「『マナフェス』では、『学びの基礎診断』の意義が、生徒に浸透した手応えがありましたが、成果と呼べるものが表れるのはこれからでしょう。単体のイベントとして盛り上がるのではなく、日々の学習の中でも、問題解決能力や思考力、協働性の重要性を生徒が認識できるように、教育活動全体の流れを整理する必要があります。新しいカリキュラムに『学びの基礎診断』を位置づけ、学びの意欲を喚起し、学力向上に結びつく工夫をしていきます」（深見先生）

校内の教師同士による対話を通して、自校の指導ツールの改良を図る本コーナー。今号は、福岡県・私立福岡女学院中学校・高校が、「総合的な探究の時間」の課題設定で活用しているワークシートについて検討した。

改良！指導ツール

ビフォー アフター

Before



グループごとに関心のあるSDGs（＊1）の目標について、考えを自由に出し合う「発散」、それらをまとめて整理したり、新たな考えを生み出したりする「収束」を促して課題設定を行う。「WHAT」「WHEN, WHERE, WHO」「WHY」「HOW」の順に、4観点で発散と収束を繰り返し、探究テーマを絞り込んでいく。

ねらい　課題設定では、「プロジェクト作成のための発散と収束のフレームワーク」という思考ツールを活用して、グループで探究テーマを練り上げる。個々の思考を深めるとともに、話し合いを活性化させて協働学習のよさを引き出すことがねらい。

課題

1. 生徒に探究学習を「自分事」として捉えさせ、一人ひとりが本気で思考して意見を出し合い、深めていく活動を生み出したい。
2. 「発散」の話し合いでは、反対意見を含めて多様な考えを出させて、「収束」を充実させたい。

＊1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

改良会議実施校

福岡県・私立 福岡女学院中学校・高校

進路指導部副主任
柿原寿人
かきはら・ひさと
教職歴23年。同校に赴任して4年目。「はないち委員会」リーダー。

宗教部
清水久美子
しみず・くみこ
教職歴17年。同校に赴任して10年目。「はないち委員会」所属。

進路指導部
山田貴翔
やまだ・きしょう
教職歴6年。同校に赴任して5年目。「はないち委員会」所属。

福岡県・私立福岡女学院中学校・高校

◎キリスト教精神に基づき、1世紀以上にわたり自立・自律した生徒を育てる女子教育を実践。2018年度より「21世紀型能力」を養成する「凛として 花一輪 プロジェクト」を開始。伝統的に芸術教育（美術・音楽）にも力を注ぐ。
◎設立　1885（明治18）年
◎形態　全日制／普通科・音楽科／女子校
◎生徒数　1学年：中学校約120人、高校約220人
◎2020年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、九州大、佐賀大、愛知県立芸術大、島根県立大、北九州市立大などに11人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、早稲田大、福岡女学院看護大、福岡女学院大などに延べ110人が合格。
◎URL　https://www1.fukujo.ac.jp/js/

2年生 課題設定ワークシート

After

振り返りを最初に確認させることで、どのように活動すればよいかが明確になりますね。思考の整理のためのシンキングツールを本校オリジナルのワークブックで解説し、今回のワークシートと併せて活用することで、チームでの発散・収束がしやすくなり、生徒はチームの価値を実感しながら課題設定に取り組めると思います。

個人の考えを深め、他者の意見を認識し合うツールに改良されたことで、本校のプロジェクトの基盤となる考え方「大切なひとり」を、より実感させることができそうです。視野を広げ、他者を認め合う協働学習の面白さを引き出していきたいと思います。

個人の考えを深める欄を設けたことで、話し合いにおける自分の立場を明確にさせることができそうです。また、他者の考えを書く欄を設けたので、どの生徒も他者と意見を共有することができるとともに、自分自身の意見をメタな視点で見ることにもつながるのではないかと思います。

ダウンロード

プロジェクト作成のための発散と収束のフレームワーク
(WHAT → WHEN/WHERE/WHO → WHY → HOW)

WHAT			
SDGs のゴールやターゲットに関連する解決したい問題を課題として設定する。			
発散	個人（土台）	①自分の興味・関心の土台を確認／ハンドブックを読んで気になったこと、また、ＳＤＧｓと自分の経験や興味・関心などが結びつきそうだと感じたことを自由に書こう	
		②上記を参考にして、ＳＤＧｓのゴールやターゲットで興味・関心のあるものを、とにかくたくさん書こう	
	他者（変化）	③ほかの人の考えで面白いと思ったことを書こう	←なぜ面白いと思ったのかを書こう
収束		④話し合いの中で重要だと思ったキーワードを書こう	
		⑤ＳＤＧｓの中で取り組んでみたい目標を決めよう	
活動の振り返り ≪自分自身の姿勢≫ ◎自由に発想して発言できた 1・2・3・4・5 ◎ＳＤＧｓの目標を自分の興味や経験と結びつけられた 1・2・3・4・5		≪他者へのかかわり方≫ ◎時には反対の意見を述べるなど、率直な意見交換ができた 1・2・3・4・5 ◎他者の意見を参考にして自分の考えを更新できた 1・2・3・4・5	

ＳＤＧｓの目標を自分の興味・関心や身近なことと結びつけて考えさせ、「自分事」として捉えやすくするとともに、話し合いの土台をつくる。

ほかの生徒の考えの中で面白いと思ったことと、その理由を書かせて、自分の思考の変化に気づかせる。

自己評価欄には、他の生徒に遠慮し過ぎず、自由に発想して率直に考えを表明できたかなど、話し合いに大切な観点を盛り込む。

改良ポイント

1. 事前に自分の興味・関心や考えを深める個人ワークの時間を設定し、話し合いの「土台」を固められるようにする。
2. 他者の考えを聞いて自分の考えを見つめ直す「変化」のステップを踏んでから、「収束」に向かえるようにする。
3. 自分自身の姿勢や他者へのかかわり方を振り返る自己評価欄を追加し、話し合いで大切なことを意識できるようにする。

どのような対話を通じて改良できたのかは、次ページで！！

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（https://berd.benesse.jp）からダウンロードできます。「HOME →教育情報→高校向け→生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

実録

改良会議

先生方の対話のダイジェスト

個々の内面をじっくり深めてから率直な意見交換で意欲を高め合い、協働学習のよさを引き出す

探究学習を「自分事」として捉えさせる

荻原　探究学習では、生徒に課題を設定させることに難しさを感じる先生が多いと聞きます。このワークシートでは、どのような課題設定を理想と考えて作成されたのでしょうか。

柿原　他者と考えを交わし合いながら個人では到達できないゴールを目指すのが、グループによる探究学習のよさです。課題設定においても、まずは皆が頭に浮かんだことを存分に出し合い、続いて議論を交わして探究テーマを練り上げていくプロセスを体験させようと考えました。

山田　メンバーがお互いの興味・関心が異なることを知ることで、広い視野で探究学習が始められると期待しましたが、興味・関心の共有が活発化しないグループも見られました。その要因の1つは、探究学習のテーマを「自分事」として捉えられていないことにあると感じました。周りに遠慮して率直に考えを述べられないから、声が大きな生徒の考えが通ってしまい、ますます自分事ではなくなる……。

清水　そうした反省もあり、今年度はまず、興味・関心のあるSDGsの目標と、それを選んだ理由を書かせてから、グループ分けを行いました。すると、「こんなことが書けるのか」と驚かされたほど、深い考えが述べられていたのです。そうした考えを相手に伝えたくなる仕組みの必要性を痛感しました。

荻原　いきなりワークシートを提示し、「さあ、話し合おう」と促しても、当事者意識を持つのは難しいのかもしれません。まずは自分の考えを整理して話し合いの土台を固めさせることができたら、生徒はどう変化しそうでしょうか。

柿原　個人ワークの時間をあまり設けなかったのは、個人で考える過程で視野が狭まり、グループ活動の必要性を感じなくなるのではないかという心配があったからです。しかし、個人が深い考えを持たなければグループの考えは深まりづらいので、それぞれの考えの違いを明らかにし、面白い議論を生み出させたいです。チームビルディングをしっかりと行ったり、思考の深め方を丁寧に示したワークブックを参照させたりしたいと思います。

山田　個人ワークで話し合いの土台を固めることで、自分事として探究テーマを捉えやすくなりそう

改良会議ファシリテーター

VIEW21編集部
高大領域担当
荻原香織
おぎはら・かおり

今回、対話の場を持ったことで、先生方の課題意識が共通していることが確認され、改良への糸口が見えてきました。会議の序盤は、探究学習の苦労や難しさが語られましたが、先生方が意見を交わし合う中で、「こうすればできそうだ」「あれも試してみたい」といった前向きな言葉へと変化していったのが印象的でした。

です。さらに「〇〇さんと違い、私はこう考える」などと、率直な考えを述べやすくする仕かけがあるとよさそうです。例えば、異なる考えを述べるごとにポイントがもらえる仕組みにする、などです。

清水　面と向かって意見を言うのが難しいのなら、共感した点を伝えるのは黄色、異なる考えを伝えるのは水色などと、違う色の付箋紙に書かせてポイントを与えるなどの仕組みをつくってもよいですね。

柿原　「異なる考えも大切」という意識を持ち続けられるように、ワークシートに自分とは異なる意見を記入する欄を設けてもよいかもしれません。さらに、他者とどうかかわったのかなどを自己評価するルーブリックを載せるのもよいと思います。

同調圧力を払拭し、ドラマチックな学びを生み出す

荻原　改良の方向性がかなり見えてきました。最後に、今後、探究学習をどう充実させていきたいか、目標と意気込みをお願いします。

山田　先ほどから探究学習は自分事として捉えられるかが重要だと述べてきましたが、それは教師も同じです。分からないことを探究する姿勢を教師自身が楽しむことで、生徒が存分に楽しめる、ドラマチックな探究学習を生み出したいです。

清水　本気で興味を持てるゴールに向かう中で、普段の授業での学びが実は社会課題にアプローチすることに役立つと気づいてもらいたいです。そして、生徒が内に秘めた可能性を発揮して、私たちを驚かせてくれることを楽しみに指導していきます。

柿原　教師も生徒も「同調圧力をぶっ飛ばす！」といった気持ちで自由に意見を交わし合って、新しい学びをつくり上げていきたいですね。前年度の活動を振り返ってブラッシュアップを繰り返し、一歩ずつ進んでいくのみです。

改良会議を振り返って

イノベーションを生み出すのは多様な人々との対話だと実感しました。VUCA(＊2)な時代、教師の得るべきスキルが、ティーチングからファシリテーションへと変わってきています。

今回の改良会議を通して、自分の意見を言語化し、他者と対話することの重要性を改めて感じました。生徒が豊かな発想を表現できる方法を、今後も考えていきたいです。

普段は校務に追われ、前向きな議論をする機会はほとんどないので、新鮮な気持ちでした。自分でも言い表せなかった「何か」が少し見えたような気がしました。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています！

「改良！　指導ツール　ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの学校のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項❶～❹をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前にいま一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

❶学校名・お名前
❷分掌・ご教職歴
❸ツールの内容（目的・活用時期・活用方法）
❹ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉　この「改良！　指導ツール　ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション　CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

＊2 Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字から取った言葉。

これからの
進路指導のための
世の中トレンド解説

トレンド・ワード

スマートシティ

社会の変革を促すような新しい技術や価値観の登場は、生徒の進路選択にも影響を与える。そうした社会の「トレンド」を、「暮らす」「学ぶ」「働く」の観点から解説する本コーナー。初回は、「スマートシティ」を取り上げる。AI（人工知能）やIoT（＊1）を活用したスマートシティが、全国で構想・構築されている。そのうちの1つ、千葉県柏市「柏の葉スマートシティ」のまちづくりの拠点となる「柏の葉アーバンデザインセンター（以下、UDCK）」のディレクター永野収（しゅう）氏に、同市のスマートシティを例に話を聞いた。

解説者

柏の葉アーバンデザインセンター
ディレクター
永野 収（ながの・しゅう）
柏市都市部北部整備課職員。2018年から現職。

サマリー

安心・安全、快適に暮らせる持続可能なまちを、最先端の技術を利用して実現する

新技術を駆使して、都市が抱える問題の解決を目指す

2016年1月に閣議決定された「第5期科学技術基本計画」の中で、目指すべき新たな社会の姿として提唱された「超スマート社会＝Society 5.0」は、AIやIoT、ロボットなどの新たな技術を産業や社会生活に取り入れることで、新たな価値が生み出される社会と言われている。Society 5.0の先行的な社会実装の場であり、新たな技術を利用して、都市が抱える問題の解決を目指しているのが、スマートシティだ。

国土交通省では、スマートシティを、「都市の抱える諸課題に対して、ICT等の新技術を活用しつつ、マネジメント（計画、整備、管理・運営等）が行われ、全体最適化が図られる持続可能な都市または地区」と定義し、交通や省エネルギーなどの5つの観点から、スマートシティが目指すまちの姿を示した（**図1**）。千葉県柏市にある「柏の葉スマートシティ」のまちづくりにかかわる永野収氏は、次のように説明する。

「日本では、省エネルギーなど、

図1　スマートシティが目指すまちの姿

交通	・公共交通を中心に、あらゆる市民が快適に移動可能な街
自然との共生	・水や緑と調和した都市空間
省エネルギー	・パッシブ・アクティブ両面から建物・街区レベルにおける省エネを実現 ・太陽光、風力などの再生可能エネルギーの活用
安心・安全	・災害に強い街づくり・地域コミュニティーの育成 ・都市開発において、非常用発電、備蓄倉庫、避難場所等を確保
資源循環	・雨水等の貯留・活用 ・排水処理による中水を植栽散水等に利用

＊国土交通省「スマートシティの実現に向けて(中間とりまとめ)」を基に編集部で作成。

＊1　Internet of Things の略。スマートフォンやパソコンだけでなく、様々な物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりして、自動制御や情報収集などを行うこと。

特定の分野に新技術を利用するところからスマートシティの取り組みが始まりました。その後、総務省や経済産業省などが、データの利活用や自動運転といった新技術を活用する事業を実施し、スマートシティの取り組みは複数の分野を横断するようになりました。柏の葉スマートシティでは、20年3月、既存の取り組みを検証・総括し、目指すまちの姿を新たに4つの観点で示しました（図2）」

国土交通省が19年度に始めた「スマートシティモデル事業」では、15事業が先駆的な取り組みを推進する先行モデルプロジェクトに選定された。その内訳は、北海道札幌市や東京都江東区豊洲エリアなどの大都市から、秋田県仙北市や広島県三次市川西地区といった地方部まで様々だ。さらに、重点事業化推進プロジェクトは23事業、スマートシティ推進パートナーは71団体が選定され、各地で社会実装が進められている。

地域住民も参画し、公民学連携でまちをつくる

スマートシティの取り組みは、自治体・大学・企業・住民らの共同組織を立ち上げて推進するケースが多い。例えば、永野氏が所属するUDCKは、柏の葉スマートシティのまちづくりに携わる自治体・大学・企業の代表者から成る機関で、まちの将来構想の計画・推進を担う（図3）。

「柏の葉スマートシティは、05年に開業した鉄道の沿線のまちとしてスタートしました。まちには元々、東京大学と千葉大学があったことから、自治体と大学、都市開発を進める企業が連携し、そこにNPOや市民も参画してまちづくりを進めています」

数多くのビルが建ち並び、人口1万人超となった今も、柏の葉スマートシティは、まち全体のエネルギー運用やバスの自動運転など、住民の意見も反映しながら常に新しいまちづくりに挑戦している。

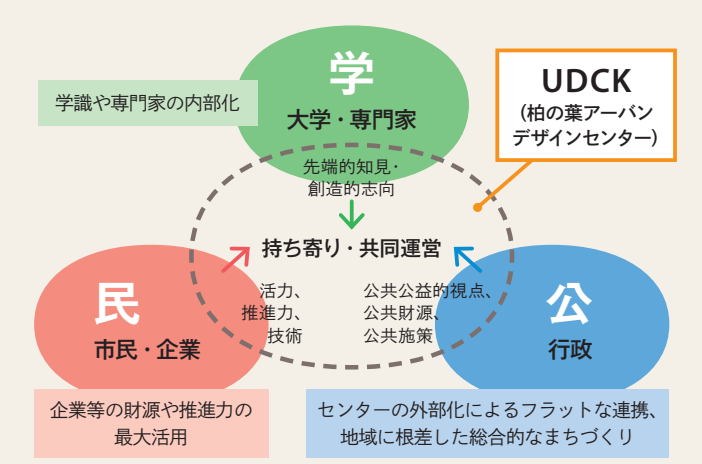
「住民のまちづくりへの参画意識は総じて高く、コミュニティー活動も盛んです。UDCKが月1回開く、まちの交流会（Kサロン）では、毎回まちに関するテーマを決めて対話をしています。テーマによっては、大人だけでなく、大学生や高校生も参加しています」

図2　柏の葉スマートシティの4つの方向性と取り組み

	方向性	具体的な取り組み
モビリティー	駅を中心とする地域内移動の利便性向上	• 自動運転バスの導入 • 駅周辺交通の可視化・モニタリングツールの構築
エネルギー	脱炭素社会に向けた環境にやさしい暮らしの実現	• AEMSのクラウド化と需要予測の精度向上 • 太陽光発電設備の保守管理IoTプラットフォームの導入 • 省CO2推進体制の構築
パブリックスペース	人を呼び込み、暮らしを支える豊かな都市空間の形成	• AIカメラ・センサー設置等を通じた多様なサービスの展開 • センシングとAI解析による予防保全型維持管理
ウェルネス	あらゆる世代が、将来にわたり、健康で生き生き暮らすことのできるまち	• 柏の葉パスポート（仮称）を基盤とした個人向けサービス展開 • 新たなサービス・データプラットフォームの基礎となる健康データ管理 • IoT技術の導入による患者へのサービス向上、院内の業務効率向上

＊柏の葉スマートシティコンソーシアム「柏の葉スマートシティ実行計画」を基に編集部で作成。

図3　柏の葉スマートシティのまちづくりの体制



＊柏の葉アーバンデザインセンターの説明資料を基に編集部で作成。

●次ページからは、「暮らす」「学ぶ」「働く」の3つの切り口で、具体的な取り組みと、それらを通じて目指すまちの姿について見ていく。

暮らす

生活の質を高める利便性や快適さを追究

建物間で電力を融通し合い、まち全体で省エネを実現

AIやIoTなどの新技術は、暮らしの問題をどう解決しようとしているのか。

「人口が増えてもエネルギー消費を抑える、建物が建ち並んでも緑を維持する、人通りが多くなっても安全を守るといったように、まちが発展しながら将来的にも持続することを目指し、新技術が活用されています」

省エネルギーについて、柏の葉スマートシティでは、大規模施設やマンションなどに蓄電池や太陽光発電を備え、時間帯によって消費の多い施設と消費の少ない施設の間で電気を融通し合うようにしている。そうした仕組みは、区画や建物を超えてまち全体で電力を管理・運用し、それらの電力を可視化する「エリアエネルギーマネジメントシステム（AEMS）」と呼ばれる。

「今後は、例えば天気のよい日は屋外に出ることを促すなど、行動変容への働きかけを自動的に行うことも目指しています」

自動車の交通量を抑えつつ、人の流れを活発化させるため、公共交通機関の利便性を高めることにおいても、新技術への期待は大きい。その代表とも言えるのが、自動運転バスだ。柏の葉スマートシティでは、公道で自動運転バスを営業運行させる実証実験を実施している（**写真1**）。

写真1　自動運転バスの車両。2019年11月から、柏の葉キャンパス駅と東京大学柏キャンパス間の、住宅街や公道が含まれる約2.6kmのルートでの走行実験を実施中。

「自動運転バスの実用化には、法制度の整備も必要です。課題解決に向けて、国とも連携し、全国の公共交通システム開発にも活用できればと考えています」

人の流れを検知するAIカメラで安心・安全なまちに

AIを搭載したカメラ・センサーの設置も、柏の葉スマートシティのまち全体で進められている。通行人の性別・年齢層・属性などをAIが判断し、交通量や自然環境の計測データも併せて分析することで、安心・安全なまちづくりに生かす（**図4**）。

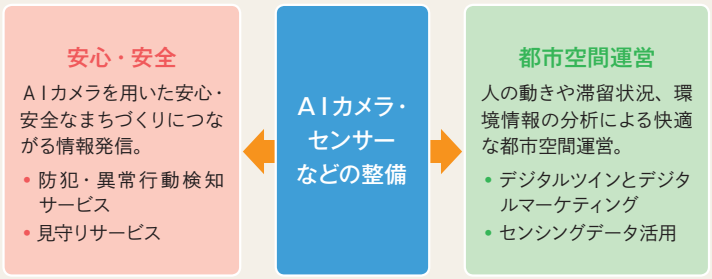
「カメラの設置は防犯にもつながり、子どもの通学時の見守りも可能となります。また、通行中に倒れた人を検知し、周囲に知らせるシステムも検討中です」

ほかにも、まち全体でデータを共有することで、利用者の利便性を図る取り組みもある。柏の葉スマートシティでは、医療機関での人の流れを検知し、患者の待ち時間を減らす取り組みをしている。

そして、健康診断の結果や通院履歴などのデータを一元管理し、健康支援に役立てるシステムの構築も検討している。

「健康状態を分析して助言したり、病気が重症化する前に通院を促したりすることもできます。超高齢社会において、健康維持は重要課題です。個人情報保護に配慮しながらシステムの実現を目指していきます」

図4　AIカメラ・センサー設置による安心・安全なまちづくり



＊柏の葉スマートシティコンソーシアム「柏の葉スマートシティ実行計画」を基に編集部で作成。

学ぶ

まちのリソースを生かした学びの機会を提供

スマートシティは、まちづくりの研究の場にもなっている。例えば柏の葉スマートシティでは、大学院生が都市デザインについて学び、柏の葉スマートシティを題材にした新たな都市デザインを提案する講座を毎年開講している（**写真2**）。参加者の提案を基に、市民が気軽に集まることができる空間が設けられた実績もある。

まちぐるみで子どもを育てるという意識が高いのも、地域コミュニティーが重視されているスマートシティの特徴だろう。柏の葉スマートシティでは、小学生が仮想商店街で職業体験をするイベントを毎年開催（**写真3**）。高校生と大学生を中心とした運営メンバーが企画・運営を担い、多世代が交流し、学ぶ場となっている。

「子どもや学生向けに社会に参画するプログラムを実施しているのは、自分たちでまちをつくる体験をしてほしいという思いからです」

まちにある大学や研究所、企業から講師を招き、子ども向けの科学講座や体験学習も行っている。

写真2　「都市環境デザインスタジオ」は、東京大学・千葉大学・東京理科大学・筑波大学の大学院生が参加する演習プログラム。柏の葉スマートシティを題材とした新たなアイデアを、年度末の公開講評会で提案する。

写真3　2007年から毎年開催されている「ピノキオプロジェクト」。以前の参加者が高校生や大学生に成長し、企画・運営側の中心として参画するようになった。

「学校を超えた学びの場を提供し、今このまちで行われている研究内容を、子どもに分かりやすく伝えることで、最先端の研究やまちづくりへの関心を持つきっかけになればと考えています」

働く

利便性と人との出会いが、働き方を変えていく

新技術によって都市の利便性や快適性が高まれば、人々の働き方も変化することが予想される。例えば、エネルギーシステムによって公共空間が快適になったり、安全で高速な公共W-iFiが設置されたりすれば、カフェや公園のベンチでも仕事ができるようになる。

「場所を選ばずに快適に働けるようになれば、人の回遊性が高まり、人々のつながりが生まれ、そこから新たなまちづくりが進むことが期待されます」

柏の葉スマートシティでは、コワーキングスペース（＊2）やデジタル工房などを備えた「KOIL」、IoTを利用した事業を支援する「柏の葉IoTビジネス共創ラボ」を設置。自治体、企業、大学、地域住民らが出会い、協働するための場を提供している。

「新しい技術やシステムは、需要と供給の相互関係があってこそ生み出されるものであり、それに一歩先のアイデアが加わって、よりよいものになっていくと考えています。専門家だけではなく、公民学の多様なメンバーが集まって知見と知恵を出し合うことが大切であり、それを実現できる場がスマートシティにはあると思います」

スマートシティは、新しいまちづくりに向け、様々な実験を行い、試行錯誤を積み重ねている。

「住民は協力的で、試験的な取り組みがしやすい環境です。だからこそ信頼関係が重要で、住民に成果をきちんと還元できるように計画を立て、実験、検証、分析することが重要だと考えています」

＊2　共同で作業する（Co-Working）場所（Space）のこと。

SDGsの視点で見る大学の学び

SDGsの達成に向けた取り組みや研究の視点で、大学の学びを紹介する本コーナー。今号では、男女平等の実現を目指す目標の5と、海の豊かさを守る目標の14に関する大学の学びを取り上げる。まずは、それぞれの目標について、世界と日本の状況を解説した後、目標5は仁愛大学、目標14は東京理科大学の学びを紹介する。

解説

目標5 ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う

世界の状況

世界的に改善が進んでいるが、感染症拡大の影響による後退も

人の意思決定が性別によって制限される社会は、自由とは言えません。目標5では、そうしたジェンダー不平等の根絶を目指しています。

取り組みの柱となるのは、女性の地位向上と環境改善です。国連では、特に女性に対する身体的・性的暴力や児童婚の禁止・根絶、女性の経済的・労働的地位の向上などに力を入れています。女性議員の割合や労働参加率、家事や育児といった無給労働に従事する割合などの指標を見ると、世界的にジェンダー問題には改善が見られるものがあります。一方で、新型コロナウイルスの感染拡大の対策として外出が制限され、家族が一緒にいる時間が増えたこと、自粛によるストレスがたまったことの影響で、女性や子どもへの暴力が急増したという指摘もあります。

ジェンダー不平等は、女性に限った問題ではありません。男性もまた、

解説

目標14 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

世界の状況

プラスチックごみによる海洋汚染が、世界的な課題

海洋汚染を引き起こす要因の中でも近年注目されているのが、プラスチックごみです。世界のプラスチックの年間生産量は増加しており、2015年にドイツ・エルマウで開催されたG7サミットでは、海洋ごみが世界的な課題として取り上げられました。同年、アメリカの研究者により、世界で年間約800万トン以上のプラスチックが陸域から海域に流出していると推計され、50年には海洋中のプラスチック量が魚の量を超えるという、衝撃的な予測が示されました。

そうした状況を受け、19年に行われたG20大阪サミットでは、追加的な海へのプラスチックごみ流入を、50年までにゼロにすることを目指すとした「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」が発表されました。

欧米を中心に、世界各国でプラスチックごみの削減に向けた様々な取

「男性らしさ」を求められるが故に、生き方を制限されることがあります。さらに、LGBTなどのセクシャル・マイノリティーの人々の権利保障も、私は大きな課題だと考えます。すなわち、ジェンダー問題の解決は、ジェンダーに縛られて生きているあらゆる人々に、自由で平等な生き方を提示することにつながるのです。

日本の状況

女性の地位向上を図るため一層の努力が求められる

日本において目標5は、SDGsの中でも最も課題のある目標の1つです。国のSDGs推進本部が策定した「SDGsアクションプラン2020」で、ジェンダー問題は、3本柱の1つに位置づけられました。

ただ現状では、2020年までに、「指導的地位」における女性の割合を30%にするとした男女共同参画政策の目標の達成にはほど遠いなど、政治分野での女性参画は、国際的に見ても非常に遅れていると言えます。

また、諸外国と比較すると、ジェンダーに関する問題が多く見られます。最近では、医学部入試における女性差別問題が大きく報じられました。背景には歴史的・文化的な要因もありますが、政治家や管理職といった意思決定者に女性が少ない状況が、一層解決しづらくしているというのが現状です。

ジェンダーに関する問題は、マイノリティーの人々が声を上げるだけでは解決しません。マジョリティーとして生きることは、一種の「特権」であるという認識をすべての人が持ち、自主的な取り組みに委ねるのではなく、社会全体で取り組むことが強く求められています。

P.58〜59で、目標5の達成に向けた［仁愛大学］の学びを紹介します。

解説者

仁愛大学 人間学部 コミュニケーション学科 准教授
織田暁子
おだ・あきこ

専門分野は、社会学・ジェンダー。京都大学文学部卒業後、同大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。日本学術振興会特別研究員を務めた後、2016年から仁愛大学講師を経て、現職。

り組みが積極的に行われています。ただ、プラスチックの海洋への流出量に関して国際的に合意された統計が現状では存在せず、実態把握が急務となっています。特にマイクロプラスチック（＊1）は、魚介類の体内だけでなく、人の排泄物からも見つかっており、生態系への深刻な影響が出てきました。そこで、10か国以上の研究者が集まり、19年にようやく、海洋におけるマイクロプラスチックの調査方法についてのガイドラインが制定されました。

海洋汚染を食い止めるためには、陸域から海域へのプラスチックごみの流出量を抑えることも求められます。目標達成に向けて、各国の河川での流出を調査する方法を制定することが、次の課題だと私は考えています。

解説者

東京理科大学 理工学部 土木工学科 教授
二瓶泰雄
にへい・やすお

専門分野は、流体力学、水理学。1992年東京工業大学工学部土木工学科卒業。94年同大学院理工学研究科土木工学専攻博士課程中退。東京理科大学理工学部土木工学科講師、同助教授を経て15年から現職。

日本の状況

問題解決には企業だけでなく、個人の取り組みも必要

国連の報告書（＊2）によると、日本は、1人あたりの使い捨てプラスチックごみ排出量が年間32キログラムで、世界で2番目に多いことが明らかになっています。そこで政府は、30年までに使い捨てプラスチックを25%削減するという目標を掲げ、20年からレジ袋有料化の実施などに取り組んでいます。行政や企業が先導して脱プラスチックの取り組みを行うのと同時に、我々研究者が各地域の状況を把握し、ごみ対策の立案に役立つデータを提供することが求められます。また、消費者が、環境への影響を理解・意識した消費行動をすることも重要です。

海洋汚染に興味を持ったら、まずは自分の行動を見直しましょう。問題意識を持ち行動することが、問題解決策を考える上で役立ちます。

P.60〜61で、目標14の達成に向けた［東京理科大学］の学びを紹介します。

＊1 プラスチックごみが紫外線や波などの作用で劣化し、5mm以下になったもの。　＊2 UNEP（国連環境計画）“SINGLE-USE PLASTICS”（2018）

この学びに関するSDGsの目標

5 ジェンダー平等を実現しよう

大学の学び

地域社会で問題解決の経験を積んだ後、身近にあるジェンダー問題の解決に挑む

仁愛大学　人間学部　コミュニケーション学科　織田ゼミ

SDGsの枠組みで、学科の学びを横断的に整理

仁愛大学人間学部コミュニケーション学科は、国際化が進む社会で、地域や産業界のリーダーとして活躍するためのコミュニケーション能力の育成を目指している。

1年次は、コミュニケーションの理論や実践、社会学や英語などを広く学び、2年次から「企画・マネジメント」「英語コミュニケーション」「情報社会」の3コースに分かれて専門性を高める。同学科の企画・マネジメントコース4年の髙倉美知瑠（みちる）さんは、入学動機を次のように話す。

「好きな英語の学習を通じてコミュニケーション能力を高めながら、幅広く学ぶ中で自分が興味を持てる分野を見つけたいと考え、本学科を志望しました」

同学科では、学生が学びの位置づけを捉えやすくするため、2018年、「コミュニケーション学科型SDGsの開発～地域連携教育の実践と体系化～」として、学科内の学びをSDGsの枠組みで横断的に整理。目標達成に向けてグローバルな視点を持ちながら、ローカルな課題を考え、行動できる当事者意識を育むため、地域連携教育を重視している。

私たちが紹介します

人間学部　コミュニケーション学科　企画・マネジメントコース4年
髙倉美知瑠（たかくら・みちる）
福井県立福井商業高校卒業。

人間学部　コミュニケーション学科　情報社会コース3年
長谷川舞実（はせがわ・まいみ）
福井県立福井商業高校卒業。

学内や地域で問題解決を重ねSDGsに当事者として向き合う

同学科情報社会コース3年の長谷川舞実（まいみ）さんは、高校時代にボランティアとして地域イベントに参加し、その楽しさや意義を実感。「次は自分で企画し、主催者側として運営したい」と考えて、地域社会との協働が活発な同学科に入学した。

2年次の「フィールドワーク演習」では、同大学のキャンパスがある福井県越前市武生（たけふ）地域の特産物の魅力を発信するイベント「武フェス」を、地域活性化団体とともに企画・運営した（写真1）。

「地域イベントは、地域社会のよさを再発見する機会になり、特に地域の子どもにとっては、『この地域で暮らしていきたい』といった思いにつながると感じました。また、私は主催者の一員として、不測の事態に冷静に対処する力が身についたと思います」（長谷川さん）

髙倉さんも、2・3年次の「プロジェクト・デザイン基礎／演習」の授業で、イベントの企画から運営ま

写真1　長谷川さんの所属するグループが企画・運営を担当した「武フェス」では、越前和紙で作ったランタンを会場に設置して、特産品をアピール。来場者数は予想を大きく上回り、盛況だった。

この学びに関する他のSDGsの目標

4 質の高い教育をみんなに

8 働きがいも経済成長も

10 人や国の不平等をなくそう

で実践した。

「地域を活性化するイベントの企画・運営などを通して、自分は周囲の意見をまとめるのが得意なことに気づき、他の授業のグループワークでも、まとめ役を意識して務めるようになりました」

そのように、学内や地域などの場で問題を発見し、その解決策を考え、実行することを繰り返す。そうした経験は、SDGsに当事者として向き合う姿勢にもつながっている。

身近な気づきをジェンダーの視点から分析

3年次からはゼミに所属して実践的に学び（＊）、4年次は卒業研究に取り組む。

織田暁子准教授のゼミでは、SDGsの「**目標5　ジェンダー平等を実現しよう**」を始め、男女平等や性の多様性が尊重される社会の構築に資する研究を行っている。

髙倉さんは、1年次に履修した「共生社会論」で、ジェンダーや社会階層をキーワードに、マイノリティーの人々が直面する問題について学んだ。それを機に、ジェンダー問題に関心を持ち、織田ゼミに入った。現在は、「現代の若者の恋愛事情」をテーマに卒業研究に取り組んでいる。

「以前に比べ、大学で学ぶ女性が増え（**目標4**）、出産後も正社員として働き続ける女性が増加するなど（**目標8**）、性別による役割や分業の意識が変化し、それらの目標は改善傾向にあります。そうした中、若者の恋愛観や結婚観がどのように変化してきたのかに関心を持ちました。1980年代～90年代に行われた恋愛観や結婚観の調査結果を文献から調べ、私がこれから行う学生を対象としたアンケート結果と比較し、考察を深めていきます（**写真2**）」

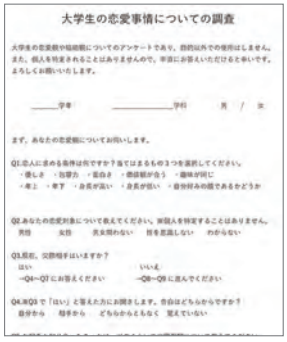

大学生の恋愛事情についての調査

写真2　髙倉さんの卒業研究では、学生を対象に、恋愛や結婚などへの価値観を調査予定。

長谷川さんが織田ゼミに入ったきっかけは、学校祭で同ゼミが性の多様性に関するイベントを主催していることを知り、授業でLGBTについて学んだことをイベントを通して多くの人に伝え、ジェンダー問題を深めたいと考えたからだ。現在の研究テーマは、テレビ番組を見て覚えた違和感から設定したという。

「化粧をした女性アスリートの映像を見た一般の人々から、『アスリートの爽やかさがなくなった』『化粧をする暇があるなら競技に集中すべき』といったコメントが寄せられていました。その一方で、ことさらに『美人アスリート』がもてはやされる風潮もあります。そうした状況は、スポーツには「男らしさ」のイメージがあり、「女らしさ」は求められていないことやスポーツが男性中心の世界であることに要因があるのではないかと考え、ジェンダー平等（**目標5**）を掘り下げて研究しています」

長谷川さんは、「この研究が、性別を問わずに自分らしく生きることを少しでも後押しできるような内容（**目標10**）になることを目指したい」と意気込む。髙倉さんは、卒業後は民間企業への就職が決まっている。

「仕事では、大学で身につけた企画力やコミュニケーション力を発揮したいです。また、自分らしく生きることを追い求めるとともに、周囲の人が悩んでいる時に相談に乗れるような人でありたいと思います」

学びとSDGs

身近な「あたり前」を疑うことが、グローバルな問題の解決につながる

人間学部
コミュニケーション学科
准教授
織田暁子
おだ・あきこ

人は、自分の知る世界を「あたり前」と考えがちですが、それが偏った思い込みであることは、少なくありません。その分かりやすい例がジェンダーです。「男性らしさ」「女性らしさ」にとらわれると生きづらさを感じたり、社会的な不平等をもたらしたりすることがあります。

私のゼミでは、身近にある「あたり前」を社会学やジェンダーの視点から分析し、ほかの人はどのように考えて行動しているのか、自分が当然と思うのはなぜなのかなどを探っていきます。

身近な問題を扱うからこそ、客観的な根拠に基づいて論じることを大切にするよう学生に伝えています。そのため、文献の講読を通して社会学の知識や統計の読み方、論文の書き方などを習得し、さらには統計やアンケート調査などの計量的な手法を用いて社会を分析するスキルなどを身につけます。

そうして身近な問題について考え、行動する経験は、SDGsのようなグローバルな課題に取り組む力にもつながっていくと考えています。

＊ ゼミは、コースに関係なく選択することが可能。

この学びに関するSDGsの目標

14 海の豊かさを守ろう

大学の学び

河川から海洋へのプラスチックごみの流出量の測定手法を開発し、豊かな海を取り戻す

東京理科大学 理工学部 土木工学科 水理研究室

幅広く土木工学を学び、社会問題の解決に役立てる

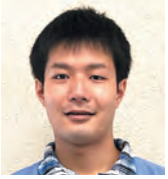
東京理科大学理工学部土木工学科では、社会基盤整備を担う人材の育成を目指している。同学科を卒業し、現在、理工学研究科土木工学専攻修士2年の小林俊介さんは、入学の動機を次のように話す。

「私は物理が好きで、大学では物理を応用して社会貢献ができるような研究をしたいと考えていたところ、物理関係の技術者である父から、土木工学科を勧められました。調べてみると、工学は土木構造物の計画・設計だけでなく、環境問題などの社会課題にも役立つ学科だと知り、本学科を志望しました」

1年次は、土木工学を学ぶための基礎力養成を目的に、数学、物理学、生物、化学などを履修。2年次は、土質力学や水理学、図学、構造力学実験、コンクリート工学実験などを履修し、3年次には、構造工学や地盤工学・水理学などの専門科目を選択して学ぶ。

小林さんは、3年次に二瓶泰雄（にへいやすお）教授の「環境水理学」の授業を受けたことをきっかけに、4年次から水理研究室に入った。

私たちが紹介します



理工学研究科 土木工学専攻 修士2年
小林俊介（こばやし・しゅんすけ）
東京都・私立世田谷学園中学校・高校卒業。

理工学部 土木工学科 4年
太田 洸（おおた・ひろ）
茨城県・私立水城高校卒業。同大学院に進学予定。

「『環境水理学』の授業では、本学の野田キャンパス（千葉県）にある湿地の水質や生物を調査しました。私の趣味は野鳥観察のため、屋外で生物を観察することが好きでした。そのため、現地観察から考察する研究手法が自分には合っていると感じました。そうした現地観察や観測を行いながら、環境保全にかかわる研究室に入りたいと考えていました」

河川のプラスチックごみによる汚染状況を調査

水理研究室では、豪雨などの防災・減災、大気環境、水環境にかかわる研究を行っている。

小林さんが学部4年次から取り組むのが、河川におけるマイクロプラスチック（以下、MP＊1）ごみによる汚染状況の調査だ。MPは小さく軽いために遠方に運ばれやすく、有害な化学物質を吸着するため、生態系への影響が懸念されている。

同研究室では、MPの発生源である陸域や河川から海洋への流出量を調査することが「**目標14 海の豊かさを守ろう**」だけでなく、河川を含む陸の豊かさも守る（**目標15**）ことにも貢献すると考えており、小林さんは、河川におけるMPごみの測定方法の開発を進めている。

「測定器を河川の水の表面だけでなく、一定の水深に設置して、河川の鉛直（＊2）方向におけるMPの分布を調査しようと考えました。しかし、川の流れが速いため、測定器の設置で試行錯誤しました（**写真**）。データ収集にも苦労しましたが、私の好きな海鳥もプラスチック

この学びに関する他のSDGsの目標

12 つくる責任 つかう責任

15 陸の豊かさも守ろう

＊1 プラスチックごみが紫外線や波などの作用で劣化し、5mm以下になったもの。 ＊2 水平面に対して垂直であること。

写真　橋の上から重しをつけた観測機材を川底に下ろし、河川におけるマイクロプラスチック調査と水質調査を行っている様子。

を誤飲して大きな被害を受けていることを考えると、調査の必要性を強く感じ、前向きに取り組めました」

AIを用いて河川のごみを検出するシステム開発に挑む

同学科4年の太田洸（ひろ）さんは、二瓶教授の「現代における土木技術の役割と展望」の授業で聞いた小林さんの研究に興味を持ち、水理研究室に入ることを決めた。

「SDGsの中でも、特に海洋ごみに関する目標に関心がありました。社会に貢献できるような研究をしたいと思っていた時に、小林さんの研究を知り、自分も挑戦したいと思いました」

太田さんの研究テーマは、「画像解析によるごみ輸送量モニタリング手法」だ（図）。その手法では、MPより大きいプラスチックの検出を目的にしており、ビデオカメラで河川の水面を撮影し、その映像を解析して、ごみ量を測定する。撮影は市販のビデオカメラでできるため、安価で導入できるという利点があり、発展途上国の技術支援への適用が期待されている。

「現状では、色からごみを検出するため、雨の波紋や虫なども、ごみと判定してしまうことがありました。画像解析にAIや深層学習（＊3）の技術を用いて、精度を高めたいと考えています」（太田さん）

現在、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、同研究室では週1回、オンライン会議ツールを用いてゼミ発表を行い、研究を深めている。

「画像解析にどのようにAIを取り入れたらよいか、AIに詳しい教授に話を聞いたり、AIを用いて大気の研究をしている先輩の発表を参考にしたりして、勉強しています」（太田さん）

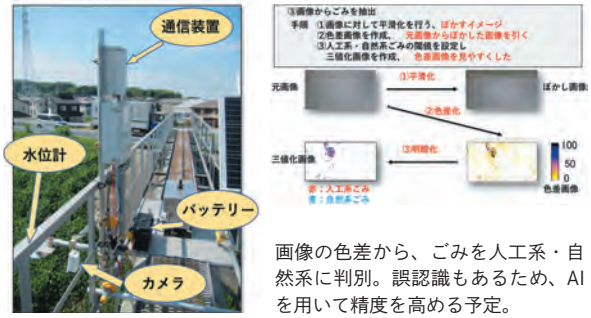
現在、小林さんは、鉛直方向だけでなく、横断方向における分布も調査し、最終的には全国の河川から海洋へのMP流出量を推定しようと試みている。

太田さんも小林さんと用いる手法は別だが、同様の目標を掲げている。

「将来的には、各地域の海洋へのごみの流出量を測定してマップ化し、それを、プラスチックを作る責任・使う責任（目標12）について皆が考えるきっかけにしてもらえたらと思っています」（太田さん）

太田さんは大学院に進学予定で、小林さんは大学院卒業後、上下水道の建設や水環境の整備などを行う水分野のコンサルティング会社に就職予定だ。

図　**画像解析によるごみ輸送量モニタリング手法**



画像の色差から、ごみを人工系・自然系に判別。誤認識もあるため、AIを用いて精度を高める予定。

学びとSDGs

現地に赴いて問題を把握し、その解決に工学を役立てる

理工学部
土木工学科　教授
二瓶泰雄
にへい・やすお

水理学とは、水の流れを力学的に解析する学問で、私の研究室では、水にかかわる防災・減災や水環境の研究を行っています。どの研究でも重視しているのは、現地観測を行い、どのような問題が起きているのかを肌で感じ取ることです。例えば、河川の汚染状況の調査では、日本全国の70河川を対象にしました。

そうした地道な作業が多いですが、学生に意欲的に取り組んでもらうために、問題の背景にある社会問題を伝えています。例えば、私の「環境水理学」という授業では、海洋汚染の問題を身近に考えさせたいというねらいから、学生に、自分が1日にどのくらいプラスチックを使っているかを調べさせ、その結果を発表してもらいました。

また、自分の研究がどう社会で役立つのか、研究の意義についても理解させるようにしています。特に、河川におけるプラスチック汚染の状況を調べる研究者は少ないため、私たちが開発したモニタリング手法が、世界での計測基準になる可能性があると伝えることで、使命感を高めています。

＊3　ディープラーニングとも言われ、人間の脳で起きる情報処理方式をモデルにコンピューターに学習させる機械学習の手法の1つ。

NEXTリーダーが
オンライン＆オフラインで
集まり、語り合う

若手教師・教育創造MTG（ミーティング）

第2回オンラインミーティング・リポート

日々の気づきや悩みを共有し、自校の課題に向き合う活力を得る

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業を経て、
全国各地の学校が自校の生徒に必要な新しい日常とはどのようなものか、模索している。
「若手教師・教育創造 MTG」に集まった若手教師は今、「with/after コロナ」の学校をどう見据えて、
どのようなことに関心を持っているのだろうか。オンラインで行われた2回目のミーティングについてリポートする。

若手教師がそれぞれの興味・関心、悩みを語る

6月に開催された2回目のオンラインミーティングは、メンバーが「**最近の興味・関心や気がかりなこと**」を語ることからスタートした。全員が、授業実践、探究学習、進路指導の3テーマの中から好きなテーマを1つ選んでグループをつくり、同じテーマを選んだメンバーに向けて、最近気になっていることや気づいたこと、意見を聞きたいことを1人ずつ話し、グループ内で対話を行った。

「授業実践」では、**ICTを活用して他校とオンラインでつながりながら、異なる学校の生徒が同時刻に同じ授業を受ける実践**などが紹介された。活動の中で見られた**生徒の主体性・協働性の評価の仕組み**などが、さらに議論を重ねる価値のある話題として共有された。「探究学習」では、「**with/after コロナの探究学習のあり方**」「**探究学習を軸にしたカリキュラム・マネジメント**」を話題とするメンバーが多く、また、「進路指導」では、調査書の様式が変わり、「指導上参考となる諸事項」の欄が拡充される中での**調査書作成のあり方**や、**1・2年次の進路意識の醸成**について意見交換が行われた。

オンラインミーティング後半で

若手教師が語った

最近の興味・関心

教科学習で習得した知識と体験を構造化させるロ頭試験を実施したい。非認知スキルを評価するルーブリックの設定など、試行錯誤の真っ最中！

臨時休業明けの教科学習の進度などについて、学年間での目線合わせが不十分なのが気がかり……。

地域と連携した探究学習が、臨時休業で止まってしまった。外部連携を今後どのように進めていくか模索中。

探究のテーマを自分事として捉えさせるための指導のアイデアを、本ミーティングで知り合った先生からいただいた。早速試し、うまくいっている！

総合型選抜、学校推薦型選抜に向けて、生徒の成長を的確に可視化する調査書のあり方について考えているところ。

担当教科を問わず、全教師を巻き込んだ小論文指導体制を今年度こそ構築したい。よりよい組織づくりの視座がほしい。

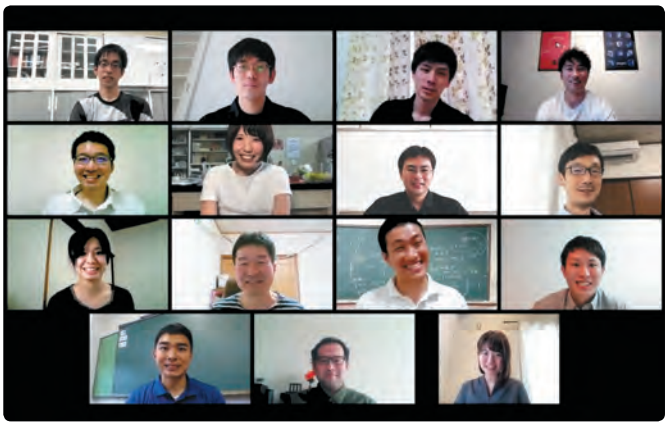
は、「私の教育活動　喜怒哀楽スピーチ」と題して、2人のメンバーが、「**今後の学校の『授業』が担う役割とは？**」「**『未来が分からない』と本気で悩む生徒にできることは？**」というテーマで、自分の考えや感じている課題をスライドを使って発表した。それに対して、ほかのメンバーからは自身の体験を踏まえたアドバイスなどが送られた（**左囲み参照**）。

対話を通して探究心、向上心が高まる

今回のオンラインミーティングでは、一人ひとりが持っている関心事や感じている課題にスポットをあてた対話に多くの時間が割かれた。

メンバーからは、「**みんなの悩みがどれも身近なもので、どの先生も毎日試行錯誤しながら過ごしているのだと分かった。臨時休業が終わり、非日常から少しずつ日常に戻る中で、毎日の業務をこなすのに精いっぱいになっているが、そうした中でも教育への探究心を忘れずにいたい**」「**全国の先生方と共通の課題を見いだすことができただけでなく、自分の中でさらに新たな課題が見えてきたように感じる。課題が課題を呼ぶ……そんな体験ができた**」といった感想が寄せられた。

次代をリードする役割が期待されるメンバー同士で対話する中、多様な視点を学ぶことで「**もっとチャレンジしてみよう**」といった気持ちを各メンバーが持つことができた今回のオンラインミーティング。熱い志を持つメンバーが集まったからこそ、お互いを励まし合い、新たな視座を提供する関係が生まれている。では、その場での気づきや学びを、自校や地域にどのように還元し、「創造のアクション」を生んでいくのか。今後の動きを期待したい。

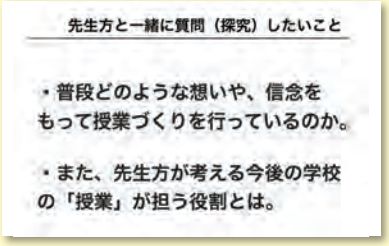


私の教育活動　喜怒哀楽
～2人の若手教師の発表内容～

テーマ1●授業改善

今後の学校の「授業」が担う役割とは？

岩手県立遠野高校　佐藤紘大先生



佐藤先生の思い

Society 5.0 によって教育の個別最適化が進み、他者と協働して最適解や納得解を導いたり、新しい価値を創出したりする力の育成がますます重要になる。そうした、「よく生きる」力を育むための授業デザインとはどのようなものか、先生方と一緒に探究していきたい。

佐藤先生の発表に対する意見・感想

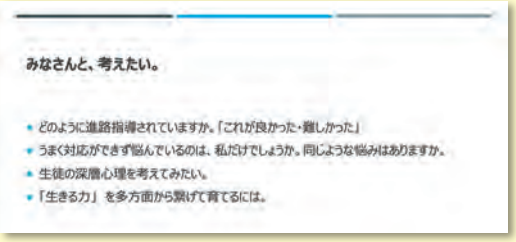
◎地域の人たちや企業で働く社会人の話は生徒に刺激を与え、新しい気づきを生む機会として今後ますます重要だと思う。学校という枠、教科という枠を飛び越える場面をたくさんつくりたい！

◎教科学習も、社会の様々な事象と関連づけて展開できる。本校では、家庭科が SDGs（＊）の 17 のゴールとひもづけながら授業を行っているが、そうしたことを他教科でも積極的に進めたい。

テーマ2●進路指導

「未来が分からない」と本気で悩む生徒にできることは？

三重県立神戸高校　森田歩美先生



森田先生の思い

面談などで「やりたいことが分からない」「何でもいい」といった言葉を生徒から聞くことが少なくない。生徒が幸せな人生を歩んでいくために、教師としてどのような声かけをすればよいのか、みんなで考えたい。

森田先生の発表に対する意見・感想

◎先のことよりも半年後、1年後をイメージさせながら指導するようにしている。近い未来に向けて、今、何をすべきかを具体化させてはどうか。

◎何を目指すのか、進路目標を決めることも大事だけれど、目標に向かって進む過程で身につく力こそが大切だと伝えることも重要だと思う。

＊ Sustainable Development Goals の略。2015 年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17 の目標と 169 のターゲットから成る。

新学習指導要領の実施に向けた準備が本格化する中、学校現場は様々な課題に直面することが予測される。本コーナーでは、実践事例や有識者インタビューなどを通じて、現場の疑問や課題を解決し、自校の実践につなげる情報を提供する。

テーマ

新課程入試につながる進路指導とは

――生徒一人ひとりが学びや経験を意味づけ、進路・キャリアにつなぐ――

はじめに

新課程入試につなぐ進路指導とは

新学習指導要領は、予測困難な社会を生きるために必要な資質・能力の育成を目的とし、「何ができるようになるか」を重視した学力観をより明確化した。その一環として、探究系の教科・科目が創設される。生徒が自らの興味・関心を軸に課題を発見し、解決を目指す中で身につけた資質・能力を教師が多面的に把握し、生徒の次の学びにつなげる形成的評価が重要になる。大学入試でも、学部の学びへの接続を意識した選抜を行う傾向が強まると予想される。

文部科学省からの新学習指導要領に対応した入試（新課程入試）についての詳細な発表は、2021年の夏頃になる予定で、現状では不明な点も多いが、育成を目指す資質・能力に基づくカリキュラムを編成するためには、今から新課程入試に向けた進路指導のあり方を考える必要がある。

今回は、探究活動を通じて生徒一人ひとりの進路実現を目指す、秋田県立秋田南高校の実践を紹介する。

実践事例

「大学の学びへの接続」を目指した探究活動と進路指導

秋田県立秋田南高校

秋田県立秋田南高校は、2015年度にスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、育成を目指す資質・能力として「5つの能力、3つの資質」（P.66・67図2）を設定し、探究活動を通じた育成をスタートした。5年間で深化した探究活動では、生徒の中に、課題を見つけ、主体的に取り組む態度が醸成されている。自ら探究に臨む姿勢が、生徒の進路選択と教師の進路指導をどう変えてきたのか、話を聞いた。

Q1 探究活動は、生徒の進路選択にどのような影響を与えたか？

A1 「対話」を重視した校内外の活動を通じて主体性が養われ、生徒が率先して進路選択を行うように

中村先生　2014年度に私が赴任した当時の秋田南高校は、県内有数の進学実績を着実に積み重ねてはいたものの、特徴的な教育や盛り上がる行事などが見あたらない、「普通の進学校」でした。当時は中高一貫教育校化に向け、中等部の設置準備を行っている最中でした。そこで、本校の基本理念「グローバルリーダーの育成」を明確化し、SGHへの申請も行いました。育成を目指す資質・能力として、「5つの能力、3つの資質」を設定し、主に探究活動によってそれらの資質・能力を育成する構想を打ち立てたのです（P.66・67図2）。

進路指導主事
渡部恵子
わたなべ・けいこ
教職歴35年。同校に赴任して3年目。国語科。

進路指導部・学術探究コース主担当
中村 東
なかむら・あずま
教職歴22年。同校に赴任して7年目。数学科。

探究活動部主任
關 友明
せき・ともあき
教職歴15年。同校に赴任して7年目。地歴公民科。

進路指導部
佐藤啓介
さとう・けいすけ
教職歴14年。同校に赴任して8年目。理科。

秋田県立秋田南高校

◎校訓は「獨立自尊」。「郷土や国家を支える高い志と国際的な視野を備えたグローバルリーダーの育成」を基本理念に掲げ、「基本的知識・技能・習慣」「探究力」「協働力」の育成を重視した教育活動を展開する。
◎設立　1962（昭和37）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東北大、秋田大、千葉大、一橋大、国際教養大などに137人が合格。私立大は、慶應義塾大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ185人が合格。
◎URL　https://akitamihami-h.wixsite.com/akitaminami

關先生　探究活動は、SGH期間中と期間終了後の現在では、探究テーマやカリキュラムに若干の違いはありますが、資質・能力の育成において重視するポイントは共通しています。具体的には、対話する機会を意図的に多く設定すること、憧れられる先輩を育てること、そして地域連携の推進です。（図1）

中村先生　探究活動を通じて、協働作業やプレゼンテーションが得意な生徒が増えるなど、育成を目指していた資質・能力が想像以上に伸びました。そして、通常の授業では見過ごしていたであろう生徒の長所に、私たち教師が気づくようになりました。また、生徒に「南高の探究活動」の歴史をつくっていこうとする意識が芽生え、「後輩のために何かできないか」と訪れる卒業生が増えています。卒業生との連絡が密になれば、教師も生徒も、進学後の学びについて知る機会が増えます。志望大学との接続をよりスムーズにする進路指導につながっています。

佐藤先生　探究活動の実施前・後の学年では、進路に対する生徒の意識が全く違います。探究活動を経験すると、課題を見つけ、それに主体的に取り組む態度が醸成されます。生徒は進路の検討時も、そうした態度を自然と表出するようになりました。自分は何に興味・関心があり、社会の中でどんな役割を担いたいのか。それを実現するために大学でどんなことを学ぶのか。自主的な進路「探究」が始まったのです。

渡部先生　2年前に赴任してきて、本校の生徒を見て最初に感じたのは、話し合いができる、自分の意見がよく言えるということ。探究活動の中でディスカッションをしたり、自身の考えを発信したりするうちに、思考力や主体性が鍛えられ、回り回って進路選択に役立っているように思えます。

図1　秋田南高校における資質・能力の育成を目的とした探究活動のポイント

❶ 対話する機会を多く設定する

生徒同士が対話する場面をつくることで、他者の意見に耳を傾ける「聴く力」を養う。お互いの発言を受け止められる関係が活発な議論を生み、生徒が主体的に探究活動に向かうようになる。生徒と教師との対話の場面も多く取り入れており、教師は教えすぎず、できる限り生徒に語らせながら、「何が原因なのだろう？」「そのメリットは何だろう？」などと問いかける。そうした対話を続けることで、生徒は根拠を持って、論理的な主張をするようになる。

❷ 憧れられる先輩を育てる

探究活動で自分がどのように成長していくのかを、同じ高校の先輩の姿を通して具体的にイメージさせることで、生徒一人ひとりの活動のゴールを明確化する。平素から、課外活動や外部大会の実績を、動画や写真で校内外に発信しているが、探究活動においてもそれは同様だ。公共ホールのステージに立ち、英語で堂々とスピーチする先輩の姿を見ることで、後輩の生徒は、探究活動を通して「何ができるようになるか」を理解し、「自分はどのようになりたいか」を考える。異学年交流の場面も多く設けられているため、先輩に対する憧れが学びのモチベーションにつながるとともに、身につけるべき力を実感することができる。

❸ 地域連携を推進する

探究活動の中で、地域の社会人との対話など、学校外の活動を重視する。大学の学びの先の仕事や社会人としてのキャリア形成など、自分のあり方・生き方を考えるようになる。

1年次では2月末に、2年次では10月末に成果発表会を開催し、下級生や保護者、大学教員や連携機関の人などに対して、研究成果を発表する。

Q2 探究活動によって深化した進路指導は、新課程で重視される「大学の学びへの接続」にどうつながるのか？

A2 2年次の終わりに行う「進路検討会」。教科学力だけではない生徒の多面性から、可能性を見つける

佐藤先生　探究活動を始めてから、進路面談ではより発展的な指導ができるようになりました。生徒の自主的な検討によって、「何となく工学部」ではなく、「こういうことを学びたいから工学部に行きたい」などと、面談の段階で志望内容がある程度固まっています。そのため、「その分野に強いのは○○大学だから、そこの研究室を調べてみては」といった具体的な指導ができるようになりました。生徒は1年次から進路について考え始めるので、指導の時期も早期化できます。以前は3年次に行っていた第1志望大学の絞り込みを、現在は2年次の夏季休業から後期にかけて行っています。

中村先生　本校では2年次の12月、2月の模擬試験の成績を返却するタイミングで、どの生徒を、どの大学のどの入試に向かわせるのかを検討する「進路検討会」を行っています。以前は主に教科学力を基に検討していましたが、現在は、例えば発信が得意な生徒は東北大学のAO入試、自分なりの意見を持つ生徒は国際教養大学のグローバル・セミナー入試などと、生徒の資質・能力と各大学が求める人物像を考慮した検討を行っています。探究活動には学年の全教師がかかわっているため、各教師がそれぞれの視点から生徒の印象を述べ合うことによって、生徒一人ひとりの多様な側面が浮かび上がり、検討の精度を高めることができています。また、中高一貫教育校化に伴い、中学生の給食のために、昼休みの時間が55分間に延長されたのですが、そのうち15分間の「昼自学」の時間を利用した面談が日常化して

総合探究コース
- 文理５クラスが対象。
- 将来学びたい学問分野がテーマの個人研究。
- 共通の学問分野を学ぶ生徒が一緒に活動し、協働で探究を深める。
- 研究レポートの作成。

に効果　高3

第1志望大学の絞り込み
活動例）第1志望宣言

12月／2月	4月	1月
進路検討会	進路検討会	出願検討会

2年次以降は、研究室1～2室に絞って訪問。志望理由をある程度固めて、具体的な質問ができる状態にする。

生徒一人ひとりが学びや経験を意味づけ、進路・キャリアにつなぐ

5つの能力

実践力	研究成果の発信と提言 社会への還元・実践
プレゼンテーション能力	考えや思いを伝える力 英語での発表と交流
論理的思考力	情報の分析と仮説の検証 根拠を明確にして考察する
課題探究能力	情報の選択と収集 コミュニケーションと協働
課題設定能力	課題意識をもつ グローバルな視点の獲得

3つの資質

基本的知識・技能・習慣	探究力	協働力
探究・協働に必要な（かつその過程で養われる）力	主体的に課題を発見・探究・解決する力	対話を通して良好な人間関係を構築し、仲間とともに探究・創造する力

います。Classi（＊1）の学習時間でのコメントで、生徒の訴えにすぐに対応して面談できる体制にもなっており、生徒の把握を大事にしています。

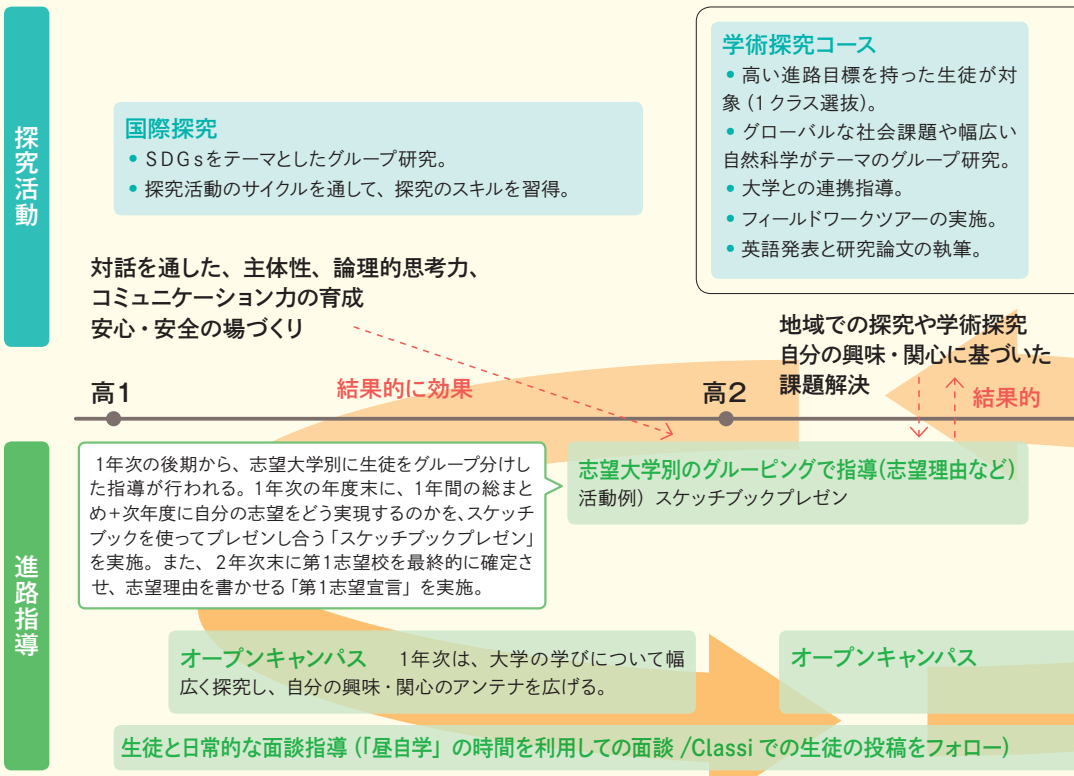
渡部先生　資質・能力重視の大学入学者選抜が増えてきた現在は、探究活動での経験が入試に直接役立つ例も少なくありません。例えば、数日にわたる講義を受け、レポート、面接などで合否を決める国際教養大学のグローバル・セミナー入試に、探究活動を通じて考察力や発信力に自信を持った生徒が積極的に挑戦し、20年度入試では合格者22人のうち、本校の生徒が6人を占めました。

關先生　これまで本校が積み上げてきた、育成を目指す資質・能力の明確化、社会に開かれたカリキュラム、各教科・科目での資質・能力の育成、生徒一人ひとりを多面的に評価する取り組みは、今後の新課程入試につながるものであり、多様な選抜方法にも対応できる力を育むものと感じています。

中村先生　新課程入試は、これまで以上に、高校での学びを、大学入学後の学びへとつなぐことが重視されると理解しています。探究活動などで、「唯一の正解」がない問いを自ら立て、納得解や最適解を導く経験を通じて、資質・能力を育むことで、高校の学びを大学の学びへと接続していきます。その結果、明確な志望理由を見つけ、入学後の学びのイメージを描くことができれば、新課程入試に対応できる力がおのずと身につくのだと思います。入試ごとに求められる能力が多様化することを考えると、準備時間を長く取れる点で、志望大学決定時期の早期化も、より大きな意味を持つでしょう。

＊1　株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図2　資質・能力の育成に特化した探究活動での学びや経験が進路につながる



＊学校資料を基に編集部で作成。

より詳しい内容は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！

動画解説　事例・解説

新課程入試につながる進路指導を考える
- 秋田県立秋田南高校の指導事例
- 先行して変化する高校入試問題
- 総合型・学校推薦型選抜の多様な選抜例からの考察

新課程のカリキュラム等の検討状況調査結果・提案

有識者による新課程の動画解説も満載

―疑問や課題を解決！実践につながる！―
新課程レポート
ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ＞入試改革／新課程 からアクセス

Reader's VIEW

先生方からのご意見を紹介します

2020年6月号へのご意見

臨時休業体験者の視点から気づきを得た

6月号の特集で、臨時休業中の他校の状況を知ることができ、安心した。また、震災による臨時休業を経験した教師が語った生徒の様子には、はっとさせられた。本校の生徒も気持ちを前向きに切り替えているように見えるが、それは諦観に近い心境なのかもしれない。私も、「焦ることはない」と、生徒に声をかけ続けていきたい。

千葉県・私立成田高校 佐藤杏奈

オンライン授業の効果検証が必要

6月号の特集で紹介された2校の実践は、今後の授業のあり方を考える上で参考になった。本校でも、対面授業とオンライン授業の併用を検討中で、オンライン授業では、事前の動画視聴を前提とした授業の効果を検証する予定だ。 **東京都立南多摩中等教育学校 徳武英人**

ピンチをチャンスに変える発想を

突然臨時休業となり、特に3年生の進路実現に向けた支援や学力保障をどのように進めるかという大きな課題を突きつけられた。そうした中、6月号の特集を読み、こうした状況だからこそできることがあり、工夫次第で生徒を伸ばせることを、改めて確認できた。大切なのは、ピンチをチャンスに変える、逆転の発想だ。特集で紹介された実践を参考に、本校でもできることを考えていきたい。

兵庫県 匿名希望

生徒の言葉から、表現活動の重要性を再認識

6月号の表紙の絵を描いた高校生が、「自分の思いを他者に伝えたいという人間としての根源的な衝動が、表現活動の源」と発言していたことが頼もしい。AIがいかに進化しても、学校は表現活動の重要性を再確認して、教育に一層取り入れるべきだと改めて思った。

東京都・私立東京農業大学第三高校 小堀健一

校種や規模が異なっても、深い学びはできる

6月号の「実践 アクティブ・ラーニング」で紹介された福岡県立ありあけ新世高校の前川修一先生が実践する「ファンダメンタル・クエスチョン」は、奥深い問いであり、私もぜひ実践したい。また、校種や学校規模が異なっても、生徒に深い学びを経験させることはでき、教科の学びと社会で生きるための力の育成が並行していることが、アクティブ・ラーニングの魅力だという前川先生の言葉に、勇気づけられた。**徳島県立総合教育センター 牧野浩章**

生徒と教師がともに学ぶ姿勢で

本校では、探究学習を充実させるため、どのようなステップで進めるべきかが課題だ。そうした中、6月号の「指導変革の軌跡」を読み、「分からないなら、生徒と一緒に学ぼう」という教師の姿勢が大切だという点に深く共感した。新たなものを一緒につくるワクワク感を、生徒と教師がともに分かち合うことが、これからの教育活動には必要なのかもしれない。**静岡県立静岡東高校 神谷隼基**

OFF SHOT

オンライン取材と対面取材を併用する形での新しい仕事のスタイルを始めて4か月ほどが経ちました。東日本大震災や各地の豪雨災害、今回の新型コロナウイルスの感染拡大の影響……と「予測困難な社会」という言葉を身に染みて感じています。高校生の時は決まったレールから外れるのが嫌だった私ですが、そのような事態にも驚かずに、前向きに捉えている自分に気がつきました。きっと、一つひとつの困難な場面に向き合う素敵な大人と、同級生、後輩に出会ってきたからなのだと思います。今号の特集では、3人の高校生に臨時休業中の気づきを語っていただきました（写真は自修館中等教育学校の2人です）。改めて自分が何を大切にしているのか、取材を通して、人生の後輩から1人の人間として教えてもらった気がしています。（荻原）

電子ブック

『VIEW21』高校版が電子ブックになりました！

『VIEW21』高校版は2020年4月号から電子ブックでご覧いただけるようになりました。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご確認ください。
HOME →教育情報→高校向け→情報誌最新号
VIEW21 最新号 検索

VIEW21 高校版 2020 10月号
次号は 10月15日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた
言葉たち

No. 021

広島県・
私立ノートルダム清心中・高校
山下佳子 先生
やました・よしこ

◎教職歴 14 年。同校に赴任して 14 年目。進路指導主任。担当教科は理科。大学院で地球科学を専攻し、博士号を取得。鉱物研究に没頭。教師として母校に戻った今、楽しみとしているのは宗教音楽の鑑賞・研究だという。

大学の研究職に進んだ私が本校の教壇に立つことを決めたのは、母校で得た素晴らしい出会いや気づきを後輩たちにも経験してもらいたいと思ったからです。卒業生の１人としてではなく、生徒の自己実現を支援する教師として、多感な 10 代の若者たちに向き合うことになるとは、母校から声をかけてもらうまでは全く想像していませんでした。でも、これはきっと素晴らしい縁なのだと素直に思えましたし、自分の気持ちが固まると、生徒に会うのがとても楽しみになりました。

いよいよ教師としての日々が始まろうとする頃、高校時代に私に理科を教えてくださった恩師から贈られた言葉が、「**自分が受けたい授業を生徒にもしてあげなさい**」でした。

新約聖書の中に、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」という聖句があります。この言葉は、中学校・高校時代に私が最も身近に感じ、大切にしてきた教えの１つでした。教師になろうとする私への恩師のひと言は、母校での素晴らしい日々を思い出させるとともに、「この教えを実践すれば、教師としての自分も楽しいし、生徒もうれしいはず」と、これからの自分自身のあり方を示してくれたのです。教師としての新たな自分が始まった瞬間だったのかもしれません。

「受けたい授業」というのは生徒によって異なります。理科を得意教科にしたいと頑張っている生徒もいれば、もっと高度な内容をたくさん学びたいと渇望している生徒もいます。大学入試で理科が課される生徒もいれば、そうでない生徒もいます。だからこそ、教科書に載っている知識を共通の土台にしながら、それぞれの生徒のニーズに応えられるような授業をつくるために、「私の今日の授業はどうだっただろうか」と、１日１日を丁寧に振り返るようにしています。

そして、それは授業だけではなく、クラス経営や進路指導でも同じです。その生徒がこうなりたいと本当に思える姿や目標を見いだす支援をすることが求められていると実感しています。教壇に立った瞬間から「先生」と生徒から呼ばれる職業に就いた者として、「これで十分」と自分の指導に安易に満足しないよう、自分への戒めとして、恩師の言葉を今日までずっと大切にしてきました。

生徒に対して思うのは、いろいろな選択肢を持った上で自分自身の生き方を選んでいってほしいということです。「自分にはこれしかできない」「この道を選んだら別の道には進めない」といった、自分を縛りつける思い込みから自由になってもらいたいと思います。そこで教師として私ができることは、授業を始めとする学校生活の様々な場面で、「好き」と思えるものにたくさん出会わせてあげることです。そして、私自身、教師という想定外の道を選んだ今、こんなに幸せな日々を生徒と過ごしていることを、これからも生徒に伝えていきます。何があるか分からないからこそ面白い人生の楽しみを、ともに楽しんでいきましょう！と。

広島県・私立ノートルダム清心中・高校　全日制／普通科／女子校／1学年約 180 人／ 2020 年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、東京大、一橋大、京都大、大阪大などに 109 人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ 381 人が合格。

VIEW21 編集部からのお知らせ

ニューコンテンツ、続々

VIEW21 express リリース

高校向けだけでなく、
教育委員会向けコンテンツも
続々リリース中！

ベネッセ教育総合研究所ウェブサイト内のコーナー『VIEW21express』では、最新の教育現場の状況や取り組み、現場の教師や識者のオピニオンなどを、「express（=速達）」でお伝えしています。ぜひ、ご覧ください。

掲載コンテンツ例 随時更新中

多様な立場からの声をリレー形式で紹介
シリーズ・
みんなで語り合い、考える「これからの学校」

速報リポート **若手教師・教育創造MTG**（ミーティング）

先行公開 **『VIEW21』教育委員会版 2020Vol.1**

VIEW21 express 検索

教育の「これから」を考える オンライン・ワークショップのご案内

自校の教師同士による対話を通じて、自校の「これから」を考えてみませんか？

参加申し込み受け付け中！
詳しくは本誌 31 ページをご覧ください

開催日時	2020年9月18日（金）15～17時
形式	オンライン（ライブ配信） （参加申し込みしていただいた方に、詳しい参加方法をご案内します）
参加費	無料
内容	本誌の特集のテーマに関して、 自校の「これから」を考える対話型のワークショップ

VIEW21
ビュー21 高校版 Volume 3 2020年8月号
2020年8月20日発行／通巻第383号 発行人 山河健二 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2020

お客様サービスセンター
［フリーダイヤル］0120-350455
受付時間 月～金 8:00～18:00／土 8:00～17:00（祝日、年末・年始を除く）
株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方 3-7-17

0KVOL3

Benesse